

# ドラゴンクエスト I ラダトームの若大将

○江原K

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ドラゴンクエストの二次創作小説です。独自展開や解釈がありません。

別サイトでDQ6、7の連載をした後、なぜか初代が書きたくなりました。

ラダトームの町で『若大将』と呼ばれた勇者の物語です。

## 目次

ブラック・サンド・ビーチ (プロローグ)	1
旅人よ (ラダトーム)	9
まだ見ぬ恋人 (ガライ・マイラ)	17
ラダトームの若大将 (沼地の洞窟①)	26
美しいヴィーナス (沼地の洞窟②)	35
恋は赤いバラ (沼地の洞窟③)	45
マイ・ジプシー・ダンス (祝宴①)	55
夜空を仰いで (祝宴②)	66
夕陽は赤く (ラダトーム②)	79
レッツゴー! 若大将 (岩山の洞窟)	91
アレフガルドの若大将 (ドムドローラ①)	102
光へ進む者 (ドムドローラ②)	114
俺は海の子 (メルキド)	125
世界一の若大将 (竜王軍バトル①)	137
蒼い星くず (竜王軍バトル②)	148
若大将対竜王 (リムルダール)	160
海 その愛 (竜王の城①)	172
若大将対竜王2 (竜王の城②)	182
若大将対竜王3 (竜王の城③)	194
この愛いつまでも (ラダトーム③)	205
夜空の星 (君といつまでも①)	215
continue (君といつまでも②)	226
Dreamer (君といつまでも My・Way)	235

## ブラック・サンド・ビーチ（プロローグ）

夜の砂浜、辺りは真っ暗闇で魔物たちすら姿を現さない。少年はその日、

海の方こうを見ていた。魔の島に君臨する竜王の城がぼんやりと見えるが、少年は実際にはさらにその先、まだ知らない世界を見ていた。

彼は海が好きだった。いつかアレフガルドの外へ航海に出たいと思っていた。

数時間もこうして海を眺めていたせいですっかり夜も更けていた。そんなとき、彼の隣に一人の少女が現れた。彼はラダトームの間であれば

そのほとんどの顔を知っていたがこの少女については初めて見る顔だった。

「・・・きみは誰？こんな時間に一人で危ないよ」

「それはあなたも同じでしょう？でもお父様に内緒で出てきちゃった。

「ここは静かでいい場所ね。しばらくいっしょに座っていいかしら？」

このとき少年はまだ十歳、少女のほうも同じくらいの年齢だろうか。

だから他に誰もいないこの浜辺であっても間違いが起こることはない。

たとえロマンチックな気持ちになろうともあくまで子供の世界の話だ。

しばらく何でもない話をしたり、共に歌を歌ったりしていた。

「ぼくは海が大好きなんだ。だから将来は自分の船を造って知らない土地へ

旅をしたいんだ。でもまずは……この世界を平和にしなくちゃいけない。

海の安全にも繋がるからね。それにぼくは……」

「ええ、いまは魔物と人間が争って命を奪いあう悲しい世界。だけどいつか

仲よくなつて互いに手をつなげるときがきたら……あたしもあなただの

その船旅についていってもいいかしら？」

暗闇であつても距離が近いので、少女の顔がぼんやりと見える。その笑顔に

少年は心を奪われた。彼にとっての初恋だった。そのときの彼にはそれが

恋だということに気がつくには少し幼かった。

「……ああ、あの夜空の星に誓うよ。どこまでも二人でいこうよ」

「ほんとう？・約束よ。いつかあたしを迎えに来てね。あ、そろそろ

帰らなくちゃ。お父様に怒られちゃうから。じゃあ、また会いましょう」

それから二人はそれぞれ、外はとても危険なのに帰りがこんなに遅くなった

ことで説教を受けていたが、そのときも考えていることといえば、

(そういえば……あの子の名前を聞いていなかった。失敗したなあ)

(あの子はなんていうのかしら……ちゃんと聞けばよかった)

またいつか会えるだろう、少年はそう思っていたがそれから彼女と会うことはなかった。彼がまた夜遅く勝手に出歩かないように監視の目が

強まったせいであの場所にあの時間行けなくなってしまったのが一つの

原因だ。それに、やはり暗闇で少女の顔が完全にはつきりとは見え

なかった。

ラダトームじゅうを見まわしたが、確実に彼女だといえる者はいなかった。

やがて少年は成長し、その夜の出来事も遠い思い出になっていたが、

大人になった彼は自由に夜の海へ行くことが許されるようになっていた。

あのとき語った夢はいまでも変わらず、海への思いも強くなる一方だ。

彼の名は『ブライアン』。後にアレフガルドの英雄として語り継がれることになる。

「おお、ブライアンじゃねえか！相変わらずイイ男だな！また海の歌を聞かせてくれよ！」

「あなたの大好きな肉料理があるから後で寄ってきな！たっぷりあるからね！」

「ありがとう、おばさん！剣の稽古が終わったらすぐに行きますよ！」

ブライアンはラダトームの町の人々みんなから愛されていた。というのも、彼は

数百年前にこの世界を救ったとされる『勇者ロト』の子孫なのだ。その正確な

家系は一部の王族とブライアン本人しか証明することはできないが、それでも

ロトの時代からこれほど経ったいまでも彼が正当な子孫であることは疑う余地がない。

もつとも、彼が愛される要因はそこにはない。彼の精悍な顔つき、

正義を愛する心、

熱心で勇敢、それでいてさわやかな人間であること・・・挙げればきりが無い。

しかも体術や剣技、何をさせても一流で、城の兵士でもブライアンには勝てない。

それら全てを複雑な気持ちで眺めている、一人の老いた男性がいた。

「・・・・・・・・うゝ・・・・・・・・む・・・・・・・・どうしたものか・・・」

『ラルス16世』。このラダトームを、そして大陸アレフガルドを治める王である。

幼いときに魔物により家族を失ったブライアンを保護したのは彼であった。

しかしいま、そのブライアンを見る目は以前のものとは異なっていた。

王には息子が一人いる。名を『チトセ』というが、やや齢を重ねてからの初子で

あつたせい、少しばかり育て方を誤った。根性の足りない、甘えの残る大人に

なっていた。当然ブライアンには人として、男として遠く及ばない。

ブライアンの人気が民衆の間で高まっていくにつれて、ブライアンを王に

すべきではないのかという声も聞こえてくるほどだ。チトセはブライアンより

一つ年上だが知らない者にはとてもそうは見えないだろう。

「パパ、あいつどうにかならないの？このままじゃ大変だよオ？」

いっそのことブライアンを何らかの方法で除き去ってしまおうかという

邪な考えが浮かんだこともあったが、必死で抑えた。親のないブラ

イアンにとって

彼を救った自分は義理の父のようなものだ。人間としてそれだけはしてはいけない。

それに、王にとってブライアンを生かしておくべき理由はまだあった。

「ローラ・・・わしのかわいいローラよ・・・」

彼が治めているアレフガルドはもはや限界だった。この世を支配しようとする

悪の魔王『竜王』、その猛威が各地で甚大な被害をもたらし、彼の娘ローラも

竜王の配下によって攫われてからそろそろ半年が過ぎようとしている。

彼女を奪還すべく精鋭の兵士たちにより結成された救出隊もすぐに全滅した。

「・・・ローラ・・・お前さえいてくれたらチトセなんか王位を継がせる

ことも、わしの実の息子でもないブライアンが出てくることもないのに・・・」

ローラは兄とは違い、優秀でしつかりとしていることを王も理解しているのです、

いつそ彼女を女王として後継にしようという考えもあった。愚かな息子は

文句を言うだろうが、一生遊ぶ金と女を数人与えておけば問題ないだろう。

高齢でなければすぐにでも自分で助けに行きたい。しかし・・・いまや

それができるのはブライアン以外にいないだろう。偉大なる勇者ロトの

血はもはや彼にしか流れていないのだ。仮に他の場所に実はロト



の

子孫だったと主張する者が現れたとしても、チカラもなければ勇者の家系を

証しするためのものもない。だからブライアンがいなければ、王の娘は

もちろん、アレフガルドそのものが終わってしまうのだ。

「・・・まだ早い。もっと鍛錬させねばならないが・・・どの道もう旅立たせる

ほかにないな。これ以上はローラが・・・それに息子の妨げにもなる。

くつ・・・だがこのわしのちっぽけなプライドや親バカのために

勇者ロトの最後の子孫をむぎむぎ死地に向かわせるなど・・・」

「・・・どうされましたか、我が王。気分が優れないのですか？」

王がはつと後ろを振り返ると、ブライアンがいた。城での稽古が終わったら

自分のもとに来るよう伝えていたのをすっかり忘れていたのだ。

「・・・い、いや、わしは元気だ。それより・・・わしの娘のことだ」

「わかっています。とうとうぼくにもその榮譽を頂けるんですね？」

ローラ姫を救うための選ばれし兵という立場に！ありがとうございます！」

「へ・・・？ん、ああ・・・そうだ。その通り。しかし・・・」

希望とやる気に満ちているブライアンに対し王は言い辛そうに・・・。

「すまないが・・・ブライアン、そなた一人で行ってもらいたいのだ」  
「・・・えっ? ぼく一人・・・ですか?」

「ああ・・・。実はこの城のなかに竜王の送り込んだ魔族の内通者がいるのではないかという噂がある。だから以前の救出隊は奇襲をかけられて全滅してしまった。この部屋にわしとそなた、そして信頼できるごく少数の者しかいないのはそのためだ。それに大人数で

行動したならば結局は竜王にこちらの動きがわかってしまう・・・。  
ローラが捕らえられている場所を見つけたとしても逃げられてしまいうだろう」

王は嘘は言っていない。しかしだからといって未来ある若者をたった一人で

旅立たせていいことにはならない。死んで来いと言っているようなものだ。

そして王はわかっている。ブライアンが自分の命令を断ることはありえないのを。

「なるほど! 確かにその通りだ! それなら一人で行くのが最高の作戦ですね!

いや・・・さすがはラルス王、ぼくなんかとは全く違う素晴らしきお方です」

ブライアンは純粹だ。命を救ってくれた王への忠節と信頼は揺るがない。

まさか自分に対し王が僅かでもどす黒い感情を抱いているなどは全く

疑っておらず、今回の使命も名誉なことだと思いい感謝すらしているのだ。

「では……このブライアン、早速行ってまいります！必ずや姫君を無事に王のもとに！我が王に定めぬ栄光がありますように！」

「……………頼んだぞ、勇者ブライアンよ」

ブライアンが王から与えられた支度金を受け取って部屋から勇ましい足どりで

出ていくと、チトセ王子が影から出てきて、いやらしい笑みを浮かべた。

「パパ、これであいつもおしまいだね。もちろん妹のローラを救い出して

くれたら万歳だし……パパもなかなか悪いじゃないか。どう転んでも

僕たちにはよいことだけが返ってくるじゃあないか、やったね！」

「……………」

王は何も言わずその場を去った。そして自らの寝室にこもると、この日は

何も口にしなかった。そして勇者ロトと、アレフガルドの民全てを見守るとされる精霊ルビスへの祈りを一晩じゅう捧げていた。

## 旅人よ（ラダトーム）

勇者ロト―彼とその仲間たちは、史上最悪の大魔王と呼ばれた『ゾーマ』を

滅ぼした。その後ロトと彼の妻はどこかへと退き、やがて『ボルガード』という

男の子に恵まれた。そのときロトはよほどうれしかったのか、普段は感情を

表にしない男であったのに、『俺の子どもだ！俺の息子だ！』と絶叫しながら

辺りを走り回ったので、妻からその死ぬ日までからかわれたのだという。

だが、勇者ロトとその妻、更にはボルガードに関しての記録は、その後

ボルガードが立派に成長したこと以外には何もない。ボルガード以降に

至っては、家系図に名前が記されているだけで情報は全く得られない。

というのも、世界が平和になった以上、彼らのチカラはもう不要だったのだ。

こうして激しい戦いの時代が過ぎた後、緩やかに人間は、そして生き残っていた

魔族もまたチカラを失っていった。そんなとき竜王が魔王として君臨したのだ。

竜王。その名の通り、竜の王。彼がどこから来たのか、またその生  
態など

詳しいことを知る人間はいないが、実は彼の存在自体は昔から確認  
されている。

何も害をもたらさず、警戒する必要もないためラダトームの先の海  
峡を挟んだ島に

彼の居城が建てられたところで、それを問題視する声は少なかった。ところが

現在、ラルス16世の支配するいまになってアレフガルドの侵略を始めたのだ。

長い時を経て準備された精鋭の魔物相手にもはや城の軍隊ではどうしようもなかった。

実はラルス16世の先祖たちは、竜王はもしかしたら危険な魔族かもしれないという

考えがあった。勇者ロトが後世に伝えていた数少ない遺言、『新たな闇』が

竜王なのではないか、そう思い密かに彼を殺してしまおうという計画があった。

ところがその時代のロトの子孫たちは残念ながら『期待外れ』だった。

『ロジ』という男は戦いに興味が無く、またラダトームから出ようともしず、

その一生を農耕に費やしていた。また『ブリランテ』という別の男は、

やる気こそ人一倍あったものの、すぐに大怪我をしまいリタイアしてしまった。

それにより竜王殺害の計画は流れ、まあ実害はないのだと放置していたところで

いまこの時代にその災厄が降りかかってきたのだった。

とはいえロジやブリランテは全くのどうしようもない者ではなかったと言える。

ロジのおかげでラダトームの食糧事情は劇的に良化し、それ以降一度も飢饉は

起こっていない。さらに人々の寿命が延びてもいるのだ。またブリランテが

大きく負傷してしまったので、ラダトームの人々は古代の回復呪文を

蘇らせようとした。その結果、『ホイミ』、そして『ベホイミ』という

肉体の損傷を癒す呪文が現代に復活した。さらに、彼らはその血を残した。

だから竜王がその本性を明らかにしたいま、『ブライアン』という希望が

この地にはいる。彼はすでにラダトームの誰よりも戦闘力があつたのだ。

王から直々に勇者と呼ばれ、王の愛娘ローラを竜王から奪還するため

旅が始まったブライアン。王が言うには、城には竜王の仲間が潜んでいる。

よって、城の者たちにはこの使命を伝えないまま旅立ちの日を迎えた。

「ン、ブライアン、どうしたんだ、その格好！どこか行くのか」

「ええ。ちよつと世界を見に・・・まあ見聞を広めるためですよ。

でも料理長のおいしい料理としばらくお別れなのは寂しいですけど」

剣の訓練の後に出される肉と魚の料理がブライアンは好物で、このために

欠かさず訓練に参加していると言っても過言ではなかった。激しい稽古の

せいで食事すらとれない者たちの分まで彼は平らげてしまっていたのだ。

「あら・・・とうとう兵士になったのですね？行先は？」

「・・・まだ決めていませんよ。ぶらりと旅をしてくるだけですから。でもだいたい留守にします。魔術師さんもお元気で」

「そう・・・。外は魔物が大勢いますから・・・何かあったら無理せず  
に

すぐにラダトームに戻ってきたほうがいいでしょう。死んだら元  
も子もないもの。

どんな回復呪文でも死んだ人間は生き返らせることは叶わないの  
ですから」

城で魔法の研究をしている魔術師の女性とも別れを告げた。なか  
なか美人では

あるが、自分よりも少し年齢が高いな、ブライアンはそれくらいの  
気持ちだった。

彼は剣術や体術を磨いてはいたが、呪文に関しては一切の修行を積  
んでいなかった。

その後も自分の旅の目的について真実を誰にも告げないまま城を  
出た。それは

町でも同じで、人気者であるラダトームの若大将との別れを惜しむ  
人々を

どうにか振り切りながら町の出口まで来ていた。すると、そこには  
一人の

女性が立っていた。彼が昔から知る幼馴染だった。

「・・・アマゾンじゃないか。こんな街はずれでどうしたんだ」

「それはこっちの台詞。ブライアン、あなたとうとう王から言われた  
のね、

魔王を倒すために旅立って。そうでしょう?」

彼女の名前は『アマゾン』。鋭い口調でブライアンに迫る。彼はす  
ぐに、

「違うよ。王様はローラ姫を救えって・・・あつ、まずい!これは言っ

ちや

いけないんだった・・・頼む、ここだけの秘密にしてくれ」

「ふふ・・・そうだったのね。まあいいわ。それは誰にも喋らない。約束する。」

でもね、ここから出るんだったら結局いつしよよ？あなたは王に厄介払いされて

殺されようとしている。あのドラ息子の王座を守るためにね」

「そんなわけないだろう。それに王様を侮辱するなよ。いまはこんな場所だから

いいけれど町中だったら大変だぞ。言葉には気をつけたほうがいいいな。

お前以外だったら報告しているところだけれど貸しがあるからな、今回は見逃す」

こうなったらブライアンは止められない。アマゾンはその後ろについた。

諦めてくれたか、と思ったがそうではないようだ。

「仕方ないわね。じゃあ私・・・ついていっちゃおうかしら」

「何だって!?!できるわけないだろう、そんなこと!」

「いいじゃない。一人が二人になったって大して変わらないわよ。」

それにあなたはステキだからきつといろんな町の女性の誘惑があるわ」

「ええっ、ぼくが？まさか。大食らいのブライアンって陰口言われているくらいなのに」

自覚がないぶん厄介だ。とはいえそれはいまは置いておくとして、やはり

ブライアンにとってアマゾン連れを連れていくことには抵抗があった。危険な

旅になることはわかっている。何を言われようが譲るつもりはない。



「・・・わかった。なら・・・あなたが安心してここから送り出すのにふさわしい

實力を見せてくれるのなら私ももうあきらめる。でも少しでも不安なところが

あつたなら・・・」

「そうまで言うならわかったよ。ぼくの戦いぶりを見て納得しなよ」

ブライアンは町の外に出た。彼の強さを理解した賢明な魔物たちは

彼に近寄らなかつたが、その判断ができない魔物が襲ってきた。

彼はそれを全く問題にせず次々と撃退していった。スライム、スライムベス、ドラキー・・・さすがに相手ではなかつた。

「どうだっ！楽勝だろう！そろそろ諦める気になつたか？」

「・・・」

ただし、これは一対一で、しかも万全の状態で戦える場合なら、だ。

「ピキ————ツ!!」 「グギャ————ツ!!!」

「・・・参つたな・・・こんなに集まつてきたか。これは・・・」

いかにこの辺りの魔物たちが雑魚に過ぎないとしても、あまりにも数が

多ければ全ての攻撃には対処できない。彼の持っている棍棒では大勢の敵を

一掃するのは難しい。一人旅の危険を早くも思い知っていた。だが、ここが

まだラダトームに近かつたのが助かつた。一部始終を見ていたアマゾンが

颯爽と登場し、大量の魔物たちを相手にブライアンの前に立ち、

「……燃やし尽くせっ！ギラ——っ!!」

「ピギャアア——」……「ウガアア——」

『ギラ』という呪文を唱えると、魔物たちは次々と焼き尽くされていった。

それを逃れた魔物も、もう勝ち目などないと背中を向けて駆け出した。

所詮はスライムやドラキード。ブライアンたちもそれを追いはしなかった。

「……だから言ったでしょう。いつかあなたは……」

「それでもお前を連れてはいけないよ。そんな呪文が使えるなんて驚いたけど

その様子じゃ……長い旅にはとても耐えられないだろう」

アマゾンはその町の娘だ。もしものときに身を守るためギラを習得したものの

どうやら一回か二回が限界だ。現に今の彼女はかなり体力を消耗している。

大量の汗、病気の人間であるかのような息切れ。ブライアンは彼女を支えた。

「……悔しいけどそうね。あなたといっしょに外へは行けないみたい。せいぜいラダトームのなかだけ……。でもわかったでしょう？  
いま旅立ってもローラ姫のもとにはたどり着けないわ」

「ああ。それは認めるよ。呪文が使えるようになるまでは……」

ブライアンの最初の冒険は彼自身の予想よりも早くに終了した。後に伝説となる男もはじめから全てがうまくいっていたわけでは

なかつた。

## まだ見ぬ恋人（ガライ・マイラ）

「・・・あれ、ブライアン様。もう戻られたのですか？」

ラダトームから旅立ったブライアンはその日のうちに帰ってくることに

なってしまった。今のままでは王の命令を果たせずに死ぬだけだ。自身の危機を救った町娘アマゾンと共に城に入っていた。アマゾンに

連れられてやってきたのは城で呪文の研究をしている魔術師のところだった。

彼女にも別れを告げて来たばかりだったので気まずかったが仕方がない。

「・・・なるほど・・・それは確かに無謀ですね。あなたはロトの子孫であつたはず。その腕のアザがそれを証明しています。ですから少し訓練すれば常人よりも早く呪文を使えるようになるでしょう。」

少なくともホイミとギラくらいは覚えておかないと・・・」

魔術師はここで何かに気がついた。ブライアンの身につけている防具だ。

「・・・あなた・・・棍棒と布の服・・・そんな恰好で行くつもりだったの？」

「はは・・・王様からお金も貰ったんですが実はもうないんです。薬草すら一個も持ってないんです。あれに使ってしまいました」

ブライアンは外を指さす。その先には、建造途中の彼の船があつた。

世界が平和になったらまだ見ぬ海と大陸を旅するための船だ。

彼はつまらないことに金を浪費する男ではなかったが、船に関しては  
並々ならぬ熱意を抱いているので王の支度金も半分近くそれに費  
やしてしまった。

「あきれた・・・まあいいわ、この魔術師さんが私にギラを教えてください。  
た。

ブライアン、あなたもここで少し勉強してから旅立ちなさい。それ  
に

お金は私が少し貸してあげるわ。今度はちゃんと使いなさいよ。  
まったく・・・どうして平民の私がお金をお金を貸してるのかし  
ら

「悪いな・・・でも意外と自由に使えるお金は少ないんだよ。ぼくは正  
式な

王族ではないからね。生活費と船に充てたら貯金なんかできない  
よ」

「・・・じゃあ始めましょうか。まずはホイミ、その練習を・・・」

ブライアンはその後丸三日間城で呪文の訓練に励んだ。その結果、  
これだけは

覚えておくべきというホイミとギラの習得に成功した。魔術師が  
言うには

これだけの短い期間で二つの呪文を自分のものにできる人間はこ  
の世界じゅうを

探しても見つけられないのでは、とのことだ。すっかり驚いてい  
た。

しかしブライアンはその三日間すら長く感じていた。一度つまづ  
いた旅の

再スタートを少しでも早くしたかったからだ。こうしている間に  
も

ローラ姫の生存の可能性が下がっていく。翌朝には旅立つことを決めた。

「それにしても竜王はどうして姫を攫ったのだろう。何かの交渉に使う気か？」

「さあね・・・でも連れ戻しに来た兵士たちを殺しているんだからそれはないわ。

おびき寄せているんじゃない？ラダトームの戦士たちを」

ブライアンや救出隊の兵士たちとは違い王から正式な任命を受けていない者たちも

ローラ姫救出に旅立っていた。彼らの狙いは与えられるであろう莫大な富や名声、

そしてうまくいけば美女ローラ姫との結婚・・・そこまで考えていた。

「ブライアン、あなたも・・・おつと、この話はここまでにしなきゃね」

「ああ。極力知られちゃいけない。誰が聞いているかわからないから」

城の人間のなかに竜王の送り込んだ者がいるという。誰がそうであるかは

全くわからない。疑うときりがない。優しく呪文を教えてください魔術師も、

おいしい料理をいつも与えてくれる料理人たちも、王のドラ息子チトセも

城の門番も・・・まあ彼らはないだろうが、とブライアンは思いつつも

それでも極力自分の使命を伏せたまま二度目の旅立ちを迎えた。アマゾンにも見送りをしないように言い、夜と朝の境目の時刻に

発った。

「ガライの町……まずは一番近いあの町に向かおうか」

ブライアンが最初に目指すのは北にある町『ガライ』。遙か昔の吟遊詩人である

ガライの創った町である。彼は勇者ロトと同じ時代の人間であり、ロトを

称える歌、闇に包まれていた世界が光を取り戻した喜びの歌……数百年が

過ぎててもなお歌い継がれているのだから彼もまた伝説だ。

「よし、せっかく覚えた呪文……魔物たち相手に使ってみるか！でも無駄打ちはだめだって注意されていたな。体力といっしょで魔力にも限界があるっていうんだから……とっておいたほうがいな」

これまでも問題なく対処できているスライムたちには棍棒で十分だ。アマゾンから

借りたゴールドは防具と薬草に使った。そして非常用にキメラの翼を一つ。

キメラの翼はすぐにラダトームに戻れる命綱だ。とはいえ今回はギラの呪文を

覚えていたので危機に陥ることはなくガライの町の前までやってくることができた。

「そうか、魔物が強くなるのは南のほうって言ってたからな。ラダトームの

近くに強力な魔物がないのも兵士がちゃんとしてるからだと言ったことは

あったけど、この辺りまで影響力があったのか」

ガライの町に入って人々と会話をする。ラダトームほど彼の名も  
広まって

いないので、逆に気楽だった。世界が落ち着いたら遠い海に出たい  
という

彼の夢も、大好きな海で誰にも騒がれず過ごしたいという心からき  
ていた。

そのガライの町ではローラ姫に関して重要な情報が得られた。

「ボクは見てしまったのです！ラダトームの姫を攫った魔物が東のほ  
うへと

飛び去って行ったのを！誰か姫様を助けに行く勇敢な方はいない  
のでしょうか？」

「・・・そういう人なら知っています。ぼくが伝えておきますよ。そう  
ですか、

東へ行けば・・・。しかし飛び去ったって・・・まさかドラキーや  
ゴーストが

姫様を運べるほど力があるのかな？」

「冗談を！そんな魔物たちだったらボクがとづくに助け出しています  
よ。

あれはとてつもなく大きく、そして恐ろしい・・・うわアゝつ  
!!」

男が勝手に恐怖体験を思い出して発狂しているのを無視してブラ  
イアンは

早々にガライを後にした。ここにはガライの墓という施設もある  
のだが、

時間をとられそうだしせつかくの勢いが墓なんて縁起の悪い場所  
に行つて

削がれてはしまわないか、そんな懸念もあり、いまは行かないこと  
にした。



(墓か……。そういえば最近父さんたちの墓参りにも行ってなかったな)

ラダトームの町にはブライアンが幼い日に亡くなった家族の墓があるのだが、

そのほかにも、かつて勇者ロトと共に大魔王との戦いに向かい死んでいった

ロトの仲間たちの墓も数百年経った今でも大切に管理されている。しかし

勇者ロトとその妻に関してはいまだに墓は見つかっていない。もしかしたら

彼らは墓など建てなかったのかもしれない。

「そういやロトの洞窟にも昔に入ってたけど変な石碑以外何もなかったな。

まあいまはすぐに東に行かないといけない。休んでる暇はないぞ」

ブライアンはラダトームには戻らずにひたすら東を目指した。当然戦闘力の高い

ラダトーム軍の手があまり行き届いていないためモンスターも手強くなる。

ドラキリーのなかでも力ある精鋭メイジドラキー、怪しげな魔法使い……

ギラを使ってくるそれら知性ある魔物に加え、攻撃力が高い大きさそりや

がいこつがうろうろしている。ここはもう温存しているときではない。

ギラを唱える危険な相手には先にギラを唱えてやることで焼き払い、打撃が

強力な敵の攻撃を受けたらホイミの呪文でしっかりと回復を怠らない。

また、大勢の敵に囲まれないために野宿する以外には足を止めな

い。それらを

全てこなし、数日も続けていれば疲労もかなりのものとなった。

「……ふう……。やっぱり山よりも海のほうがいいな」

何日もちゃんとした寢床で眠らないことや食料の調達は慣れていた。将来の航海の

備えとして小さな船で数日、ラダトームの近くではあるが船の上で過ごしたこともある。

しかし魔物たちとの戦闘を繰り返し、しかもあまり知らない土地を一人で旅する。

キメラの翼に幾度も手が伸びかけたが我慢を重ね、ようやくその村に到着した。

「助かった！まずは宿屋で一休みしたいけど先に身体を洗おう。有名な

温泉があるもんな、ここは。すいません、温泉はどこにありますか」

『マイラ』の村。決して大きくはないがその露天風呂の評判はラダトームにいた

ブライアンの耳にも届くほどだ。世界が平和でなければ心までは温まらないと

言う者もいたが、今の彼にはじゅうぶんに心身を癒す役割を果たした。

このあたりはホイミには決してできない仕事だ。いかに薬草を買い集め、

魔法を極めたとしても定期的な休息を疎かにはできないのだ。

温泉によって汚れも疲れも落とし、買い物や情報集めは明日にするかと

宿屋に向かう彼を、温泉の入口にいた女性が呼びとめた。

「あら・・・あなたステキね。パフパフしていかない？20でいいわよ？」

「・・・いらぬよ。ほかのやつをあたりなよ」

「つれないわね。でもあなたみたいなイイ男はこんな村はもちろんこの大陸を

探してもいないわあ。おカネがないならもうタダでもいいからアタシと

気持ちいいコトしましょうよ。それとも心に決めたヒトでもいるのオ？」

ブライアンにとつてもしここでそんな女性を挙げるとしたら・・・。

幼い日に夜の浜辺で一度だけ出会ったあの女の子だった。すでに

ぼんやりとした過去のことになりつつあったが、今でもときどき知らない

女性とすれ違つては、もしかしたらこの人があ那时的の、そう思つてしまう。

ブライアンは彼女がまだそのときの自分と同じくらいの年齢でありながら

かなり丁寧な言葉遣いに上品な振る舞いをしていたことを覚えており、

ひよつとしてあれはローラ姫だったのかもしれないと考えたりもしていた。

そんな『まだ見ぬ恋人』を救う決意を揺るがすものはほんの小さなもので

あつたとしても、断固退けなければならなかった。

「・・・」

「あら、残念だわ。でも気が変わったらまた来てね」

挑発的に誘つてきた女のもとを無言で立ち去り宿屋へと入った。

彼の先祖

勇者口トも女性たちから人気があつたが生涯その妻しか愛さず、彼女以外と

寝たことはなかつたという。自分もその足跡に倣いたいという決意を新たにした。

## ラダトームの若大将 (沼地の洞窟①)

マイラの宿で久々によく眠ることができた。やはり野宿とは疲れの取れ方が全く違う。

朝から村人たちに声をかけ、連れ去られたローラ姫に関して聞き込みをした。

そこでブライアンは決定的な情報を手にした。

「・・・ここから南の洞窟のなかで美しい女性を見たと言う人がいました。」

しかし洞窟のなかは怪物だらけ。まさか美しい女性なんかいませんよね」

「確かリムルダールに抜けるための洞窟ですよ。たいまつを買っておかないと。」

有益な情報をありがとうございます。ではぼくはこれで・・・」  
「おっと、そこに行こうっていうのならやめたほうがいいですよ。魔物たちの

強さだけじゃなく最近は・・・」

「いいえ、何があるうと行かなければならないのです。忠告には感謝します」

その後ブライアンは村の武器と鎧の店で鉄の斧と鉄の鎧を購入し、それまで

使っていた棍棒とはようやく別れることになった。使いやすさからか、または

彼の素質故か、棍棒でも十分戦えていたが性能ではなく耐久面で限界が来た。

どうせ買い換えるならばこの先の戦いに備えてこの村一番の武器を用意した。

薬草とたいまつも道具屋で買ったところで手持ちの金がなくなつた。あとは

噂の洞窟まで行くだけだ。村を出て再び長い道のりの旅が始まった。

「これはすごいやー！こんなことならさっさと買い換えていればよかつたな」

魔法使いやゴーストを一撃で打ち倒し、多くの魔物たちに致命的なダメージを

与えていく。もはやこの辺りの魔物に敵なし、そのブライアンを襲った

次なる試練は意外なものだった。彼が洞窟のそばまで来てみると、その入口は

毒の沼地に囲まれていた。足を踏み入れるだけで体力を奪われるこの汚染された

沼地は魔物たちの侵攻による爪痕であり、危険な場所となっている。リムルダールへ

向かうための重要な通り道も以前より人の行き来が大きく減ってしまっていた。

しかし、ブライアンにとっての試練はこの毒の沼地ではなかった。またマイラの男が

彼に警告しようとしたのも、このことに関してではない。人の数こそ減ったが

全くいなくなってしまうわけではない洞窟の利用者はたいてい商人か職人だ。

生き残るための戦闘力はあるが戦いのスペシャリストではない。それを狙う

悪党たちの縄張りができてしまっていた。当然ブライアンの前にも……。

「……………なんだきみたち。ぼくに用か」

「へへへ・・・お前には用はねえ。お前の持つてる金とその剣や鎧のほうに

用があるんだよ。だからそいつらを置いていきな」

「ひやはは・・・甘ちゃんなツラしてやがる。その大事な顔がぼろぼろに

なる前に大人しくオレたちに下着以外全部よこしな！」

「いや、下着もだ。ただの布切れでもはした金にはなるしな。

しかしこいつの目・・・言うことを聞きそうにはねえな。やれ！」

ブライアンの前に立ちはだかった男は三人とも相当腕に自信があるようだ。

斧を持ったブライアン相手に一斉に襲い掛かってきた。はじめにブライアンの

もとに迫ったのは『ワシントン』という武闘家だった。俊足を飛ばして

真つ先に蹴りを放ってきたが、ブライアンはそれをかわして腹に拳を入れた。

「ぐえっ!!おごえっ・・・!!」

「ワ、ワシントン！てめえよくも・・・！次はこのオレ『コクオー』が相手だ！」

一発でダウンした仲間の仇を討つべくコクオーが銅の剣を振りかざしてくる。

しかし技術が足りない。これまでならばそれでもじゆうぶんだつたのだからが

ラダトームの勇者相手ではあつさりと受け止められ反撃に遭うのが当然だった。

「おりゃあっ!!・・・しかし棍棒じゃなくて斧に買い換えてよかった。あの棍棒じゃ粉々にされていたかもしれない・・・」

「く……くそっ！こうなったら殺してやるぜ！それくらいの気持ちでやらないやてめえには勝てないようだ……!!」

最後の一人『ソブリン』。殺意を口にはしていたがこれまで彼らは人を

殺したことはない。あくまで物を奪うまでだったので、『殺す』と言ってしまったことで逆に足の動きが鈍くなってしまった。先の二人には

先制を許したうえで反撃していたブライアンがついに自分から動いた。

ソブリンに体当たりをして、大きく突き飛ばした。こうしてブライアンを

襲った盗賊たちは三人とも地に倒れた。彼も一息ついたが、その瞬間を狙われた。

「……ふう……ぐうっ!!い、いつの間に……」

「へへっ！安心するのが早いんだよこのおマヌケがっ!!私たちが全員で

五人いるっていうことを知らなかったみたいだねクソイモ！」

ブライアンの左腕を背後からナイフで斬りつけたのは目つきの鋭い女だった。

そして彼女と共にやってきた男が、この一味のボスなのだろう。

「……ふう……よくやってくれたぜ『ローマン』。あとは俺に任せな。

仲間が三人やられちゃった以上今さら泣いて謝ったって無傷でてめえを

家に帰してやるのは無理になった！覚悟しな坊や！」

男は呪文を唱えようとしている。この様子からするに攻撃呪文だ



ろう。

ブライアンはもう少しで三つ目の呪文が習得できそうな感覚があった。

攻撃、回復に続き、戦闘を有利にできる呪文、城の魔術師から教えられて

いた、敵を眠らせる魔法『ラリホー』だ。これを完全に自分のもの  
に出来ていれば

ここも楽に乗りきれていたのに・・・そう思っていた。

男が繰り返し出してくる呪文はおそらくギラだろう。魔物から何回か  
くらったことが

あるので威力はだいたいわかっていた。あえて回避せずに攻撃に  
出たが、なんと

その呪文は炎ではなく、真逆の氷の刃を放つものだった。意表を突  
かれた

ブライアンの負傷していないほうの腕を凍りつかせた。

「な・・・なんだこの呪文は！見たことも聞いたこともない・・・」

「ハハッ！そりゃあそうだ。失われた古代の呪文、しかもラダトーム  
の連中すら

いまだ復活させられていない氷の呪文、『ヒヤド』なんだからな！ま  
さに

この俺『ブリザード』の名にふさわしい呪文だとは思わねえか坊  
ちゃん！

さあ！その凍りついた腕を剣で落としてやるぜエ——ッ!!」

ブリザードはブライアンの凍った腕に狙いを定めたかのように思  
わせて

襲ってきたが、実は罠で、ブライアンがそれを恐れて右腕を庇おう  
とした

態勢になったところを他の無防備な部位に攻撃を叩きこむ、そんな

戦法だった。

ブリザードの持っている銅の剣では切れ味が悪く凍った右腕以外なら仮に

斬られたところで失いまではしないだろう。そもそも斬ると言うよりは

叩きつけるようなつもりで攻撃しなければならない。だからブライアンが

まずは右腕を守るのは当然だと信じ込みまずは左肩辺りを目標にした。

「くらいやがれ——っ！ラダトームの坊ちゃん戦士め——っ！！」

しかしブリザードの攻撃がブライアンの肉体に届くことはなかった。彼は

ナイフで斬られはしたがまだ動く左腕にいつの間にか斧を持ち換えており、

攻撃を止めてみせた。驚いたブリザードは動けなくなったかのようにならなくなった。

「何だとオ!?こ、こいつ……！オレの狙いがわかってやがったのか……！」

勘のいい野郎だが……それでも普通は出来ねえ！万が一その腕がなくなつちまったらどうするんだよ！ま……まともじゃねえ！」

「ぼくはまともさ。ただ、覚悟を決めているだけだ。もし読みが外れて

片腕を失ったらそれはそれで仕方ないってね。でもそう決めないと

きみに敗れていたはずだ。ぼくはこんなところで立ち止まっては  
いられない！」

ブライアンはブリザードの足に蹴りを入れた。重い一撃にブリザードの足の骨は

折れ、彼はひっくり返って悶絶した。その彼を斧を持ちながら見下ろす

ブライアンの姿を見て、ひとり無事なローマンが再び奇襲を仕掛ける。

「それ以上手出しはさせないよ・・・いやあ——ツ!!」

しかしブライアンは彼女の腕を掴み、持っていたナイフは地面に落ちた。

「・・・同じ手は二度とくらわぬ。よく見れば君の動きは無駄が多すぎだ」

「ちっ・・・!!こいつバケモノじゃないの・・・!こんなやつがまだアレフガルドにいたなんて・・・!!」

ブライアンは凍っていた腕に加減してギラを唱え、荒い方法ではあったが

解凍に成功した。両腕の負傷は薬草で癒そうと傷口に押し当てた。

悠然と傷を治すブライアンをブリザードたちはただ見ているしかできなかつたが、

次の瞬間、なんと倒れていた彼らに対しブライアンはホイミを唱え始めた。

身動きできなかつた彼らが立つことこそまだできないが起き上がり始めていた。

「・・・なぜだ!?俺たちにとどめを刺すどころか回復しやがるとは・・・」

「ぼくの戦いの技術はあくまで魔物たちを倒すためのもの。人間を傷つけるのは

だめだ。本来ならここまで痛めつけることもしたくなかつたけど仕方なかつた。

だからこの回復呪文はせめてもの罪滅ぼしだ。これで許してくれない。  
謝罪までするブライアンに対しブリザードは理解が追いついていない。

「・・・そうか、俺たちを生かしたままラダトームに連れて帰って牢にぶち込むつもりか！オレたちの余罪は数え切れねえからな、きつとてめえはかなりの金が入るはずだぜ・・・」

ブライアンはブリザードの手を取り、立ち上がらせた。そして彼の目を見て言う。

「・・・なんとなく、だけどきみたちの姿をどこかで見たことがある。」

みんなラダトームの生まれなんだろう？そしてみんな家族がいない」

「・・・よくわかったじゃねえか・・・まさか予言者か!？」

「予言者じゃないさ。きみたちと同じ親を失った孤児だ。ぼくは運よく王様に

救われたけれどきみたちはそうじゃなかった。だからもし何かが違うばきつとぼくも同じことをしなきゃ生きていけなかったかもしれない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そう思うと・・・他人には思えなかった。そんなきみたちを牢屋に渡す、

まして殺すなんてできるわけがない。いまはあまりお金を持っていないし

この装備をあげるわけにはいかないけどその洞窟に用があるんだ。これ以上何もせずに通してくれたら必ず礼はする。信じてくれ」

ブライアンは深々と頭を下げる。ブリザードはこの紳士的な態度に心を打たれた。

他の四人に下がっているように言うと、ブライアンと共に洞窟に入ろうとする。

「・・・あんたみたいなやつが王になりやあきつともつと世界はよくなるぜ。」

俺は決めた！あんたについていく！さあ早く行こうぜ、洞窟へ！」

強引に引っ張られるようにしてブライアンは洞窟へ連れられて行く。

気がつかないうちに彼は生涯の親友となる男を得ていた。

## 美しいヴィーナス（沼地の洞窟②）

ブライアンがブリザードたち一味と戦っている間、その洞窟のなかで動きがあった。

本来の進路とは逸れた人通りもない道の先には、大きな扉があった。

その扉を開けると、この暗闇の洞窟に似合わぬ、明かりの灯された部屋がある。

ラダトームの王族が使用するものにも劣らぬ最高級のベッドにテーブルまでも

備えられているこの空間に一人、ブライアンが探し求めているその人がいた。

美しきその女性のもとに、どこからか来客が訪れた。部屋に入るただひとつの道で

あるはずの重い扉は開いていない。魔族だけが知る秘密の抜け道なのか。

フードに全身を覆い、その顔もほとんど隠れている少女がブライアンの探し人、

つまりローラ姫の前に現れ、テーブル越しに腰掛けた。

「元気そうだね、ローラ。ほら、今日のぶんのパンを持ってきたよ。

着替えの服と身体を拭くための布もあるから先に水場に行ってきたら？」

「・・・今日はいつてもより早いのですね。もはやあなたが訪れるこのときのみが

時間を知る唯一の術であるのに・・・しかし今日は早い、それはわかります」

「ふふふ・・・よくわかったね。それは特別な日だから、かな。こんなところに

半年もいて辛かっただろうけど、朗報だよ。ついに明日あなたはここを出られる。

お父様があなたをお嫁さんとして迎え入れる準備が整ったんだって！よかったね！」

ローラの顔が青ざめる。少女の言う『お父様』が誰かを知っているからだ。

「あれ・・・あまりうれしくなさそう。ひよつとして緊張しているのかな？」

このアレフガルドを支配する偉大なお父様・・・竜王と結婚するといふ

その荣誉ある立場にあなたは選ばれたんだから。つまりあなたは明日から

わたしのお母さん！になるってことだよ。でもおかしな話かもしれない。

たった十数年しか生きていないあなたがお母さんなんて・・・。はじめはわたしも慣れないだろうなあ。そのうち『お母様』って呼べるように

頑張らなくちやなあ・・・」

なんとこの少女は竜王の娘だということになる。一見人間と変わらぬ外見だが、

注意深く観察すれば彼女が魔の者であるのはどんな鈍い感覚の持ち主でも

わかるだろう。これまで半年、彼女に危害を加えられたことはないが、

もし怒りを買えばどうなるかわからない。首を一瞬で落とされるかもしれない。

しかしローラは屈さず、厳しい目つきと口調で竜王の娘に心の内をぶつけた。

「あなた方のような化け物と共になるなど・・・おぞましくて吐き気が

します。

明日にもそのようなことになるかと決まった今、すぐにも自ら舌を噛みきり自害したくなります」

「……えく？やめなよ、痛いよ？それに勘違いしているみたいだけどあなたは奴隷や捕虜じゃない。ここでの待遇でわかったでしょ？

お父様はあなたをとつても大切にしてくれる。約束するよ」

「……そんな話を信じると？」

ローラは竜王の娘を睨みつけた。しかし少女はまったく気にせず語り続ける。

「だってあなたがお父様と夫婦になることで……わたしたち魔族とあなたたち人間の関係はこれまでとは全く違う、互いに協力して世界をよくしていく……『仲間』になるのだから！」

「なんですって!？」

「お父様とあなたは最初の一步！象徴としてアレフガルドじゅうに

わたしたちが進むべき道を示してくれる。そして平和な世のなかの始まりになる。

楽しみだなあ。きつといまよりも何倍もすてきな世界に……」

目を輝かせ希望ある未来を語る娘に、ローラは今度は冷ややかな視線を向けた。

「確かにあなたの言うことは実現すれば素晴らしいでしょう。ですが……

そんなことは起こらない、断言しましょう。この私を交渉の道具のように

扱って得た平和など長くは続かないでしょう。それに私は信じていません。

あなたたちが真に何を企んでいたとしても……必ず正義に反した



歩みは

裁きを受けるでしょう。私が今日この日まで自害していない理由は唯一

それだけです。ですがそれもとうとう明日まで……になります」

「……………」

二人がわかり合うことはない。ローラは最後まで希望を信じていたが、

野心に満ちた恐ろしい魔王、魔王の妻になる前に自ら生を終える覚悟を

決めていた。しかし竜王側もそう簡単にはそれを許さないだろう。

「……まあいいや。また明日迎えに来るから。それまで元気でいてね。といつても……変な気を起こさないためにいつも見張りがいるんだけどね。

だからあなたは元気でいるしかない……それを忘れちゃいやだよ、明日からのわたしのお母さん！」

ローラが気がついたときには彼女は消えていた。再びこの部屋には

自分以外は誰もいないのを確認し、彼女は無言で精霊ルビスへの祈りを捧げた。

その行為は、凶らずも彼女を救い出すために勇者を遣わした父と同じだった。

そして祈る姿は美しい女神のようだった。たまに洞窟を通る人々から

彼女の目撃証言があったが、それは幻ではないかと言われていた理由は

アレフガルドで並ぶ者のない一番の美しさのためでもあった。

「さあ行くうぜ！善は急げだ、ブライアンさん！姫様を助けに来たん  
だろ？」

洞窟の入口で戦い、その後のやり取りでブライアンにほれ込んだ野  
盗ブリザードが

彼を引つ張るように洞窟内を案内する。その手にはたいまつが握  
られていた。

「・・・あれ？いつ口にしたかな？確かに理由はそれなだけども」

「へッ・・・最近連れ去られた姫様について聞きまわっているガタイの  
いい男が

いるっていうのは知っていたんだ。ブライアンさん、あんたのこと  
だって

いまならわかるぜ！金や名声が目的でここまで来やがった欲深い  
連中は

みんな俺たちに身ぐるみ剥がされたがあんたは違った。ラダトー  
ムの王が

ついにプライドを捨てて勇者ロトの子孫に依頼したという話も聞  
いて

いたからな・・・それもあんだなんだろう？満を持して登場ってわ  
けだ！」

限られたごく一部の内密の事柄だったはずなのに、この男はどうい  
うわけか

全てを把握している。まさか・・・ブライアンは彼の肩を掴んで歩  
みを止めさせた。

「・・・ちよつと待てよ。城のなかにいる竜王の送り込んだ内通者・・・  
お前たちなのか!？」

「いやいや、違うぜ！俺たちは魔物とは何の関係もない！俺たちの仲  
間に

『キャロル』っていう情報屋の女がいるんだよ！ラダトームだけ

じゃねえ、

アレフガルドじゅうを駆けまわっているんなやつ秘密や弱みを握って

ユスリのタネにしようって狙いだっただ。あんたが欲しい情報があつたら

いつでも言ってくれ！ただ竜王うんぬんというのは知らねえ．．．どうする？」

「もしできるならそのキャロルって人をお願いできるかな。探せるのなら、

城にいる竜王の仲間を」

その後も洞窟を進みながら話を続けるうちにブリザードはブライアンという人間を

更に深く理解し、なお一層彼に対する尊敬が強まっていた。

「．．．ブライアンさん、あんたさつき．．．何かが違えば俺たちと同じような

ことをしていたかもって言ってたが．．．そんなことは起こらなかっただろうぜ。

こうして話を聞いていても、そしてさつきの戦いでも．．．あんたの覚悟は

大したもんだ！俺たちのそれとは違う！」

「．．．？という．．．？」

「俺たちはあくまで失うモンがないから後先考えずに命知らずな行動が

できただけだ。しかしあんたは全くの無私な気持ちで姫様を救いに来たって

いうじゃねえか！やはりあんたこそ王になるべき器だぜ！そのためにも

とつとと目的を果たして城に戻ろうぜ！」

無私な気持ちが無いか・・・そう言われるとブライアンは『はい』とは

言えなかった。そこまで聖人のような人間ではない。心のどこかで

ローラ姫に会うことを期待している。同じ城にいながらも手の届かない、

それでももしかしたら少年のころの初恋の相手だったのではないか・・・

自分自身の気持ちの確認のためにもローラを救出するのだ。

洞窟のなかでは当然魔物も襲ってくるが、メーダのような不気味な魔物がいる

くらいで苦戦はしない。二人いるから、というのもあるがこれなら一人でも全く

問題はなかっただろう。だからこそブライアンには疑問が生まれた。

「これでどうして半年も誰も救出に成功しなかったんだ？きみたちがこの辺りで

悪事をし始めたのも最近なんだろう？その前にここまで辿り着けた人間が

さっさとローラ姫を救い出しているはずだろう」

「ああ。それなんだが・・・確かに洞窟にもともと住み着いている魔物たちは

全部ザコだ。しかし俺たちも確かに見たんだ。大きな竜が最後の見張りとして

立ちはだかつてやがる。あれは半端な戦士じゃまず勝てねえ」

「そうなのか。道理で順調すぎると思った。そんな危険な場所に案内してくれるなんて・・・戦いになったらきみは後ろへ・・・」

あくまで自分の受けた任務であり、ブリザードは関係ない。竜王が遣わした

強敵との戦いは自分一人でやるべき・・・そう思っていた彼に対し、「・・・いやいや、戦う必要なんかないんだ、あんたも俺もな！姫様を救うのに必ずしもそいつを倒す必要はねえってことよ！」

ブリザードは予想だにしない答えをしてきた。ブライアンはもう一度耳を傾ける。

「その見張りは一日中ずっといるわけじゃねえんだ。日に一回か二回、

休憩でもしてるのかどこかへ行っちゃまうんだよ。その短い時間の間に

俺の持つてるこの『魔法の鍵』で扉をサクッと開けちまって・・・やつらが気がついたときには後の祭りってわけさ！」

「なるほど・・・その時間を把握しているからこうして急かしてるのか。魔法の鍵か。確かリムルダールで売っているって噂だったな」

「ああ。もうそろそろ着くぜ。だがブライアンさん、あんたのことだ。

こんな泥棒みたいな真似は卑怯で嫌か？俺はあんたの意思を尊重するぜ」

洞窟の最深部、目的の場所に到着する寸前に最後の確認をする。

ブライアンほどの男だ。もしかしたら正々堂々と戦ってローラ姫を

奪還することを望んでいるかもしれないからだ。その彼は少し考えた仕草の後、

「・・・まさか。はじめはあいつらのほうが不意を突いて攫っていったんだ。

そんな相手に卑怯もないだろう。きみの言う通りさっさとやろう」

ブライアンがにやりと笑うとブリザードもそれに応え、不思議な鍵を取り出した。

何事もなく終点に辿り着き、その重く厚い扉を難なく無力化する。あとは

腕一本で扉を押して簡単に部屋のなかへと入り、ローラ姫を救い出す

ファイナレが待つているだけだ。

「よし、さあ、あんたが先頭だ！行ってやりな！」

（ついに……。でももつと格好いい人に迎えに来て欲しかったって言われたら

少しがっかりだけどな……………）

扉を開けるその瞬間、背後から大きな音がする。誰かがこちらへやってくるのだ。

人間やこの洞窟の小柄な魔物が出せる足音ではない。嫌な予感と共に振り返ると、

緑の皮膚に長い尻尾、人間一人を一噛みで砕くことも一気に丸呑みすることも

できるであろう尖った大きな口と顎……。だんだんとその姿が明らかになる。

強力で獰猛な怪物、『ドラゴン』。竜王の配下のなかでも力ある魔物だった。

ブライアンは書物でしかそのドラゴンを知らない。ブリザードは遠くから

この魔物が洞窟に出入りしたりするのを見ているにすぎない。想定外の邂逅だ。

「ま……まさか……!!ずっと全く同じ時刻に留守にしていたじゃねえか……!」

ブリザードが恐れながらも怒鳴るように叫ぶ。するとドラゴンは低い声で、

「・・・そう。昨日まではな。だが今日は特別なのだ。明日になればその部屋の

娘は竜王様の花嫁とされるのだ。そのためにいつもとは違ったが・・・

「どうやらそれが幸いしたようだ・・・このような輩がいたのだからな」

ローラ姫は明日にもここから竜王の城へと連れ去られる。それを考えたら

今日ブライアンがやって来たのは間一髪、運がよかったのかもしれない。

しかし今日であったがゆえに本来であればいはずの見張り番に

出会ってしまった。ブライアンの旅も大一番、山場を迎えていた。

## 恋は赤いバラ (沼地の洞窟③)

沼地の洞窟に監禁されているローラ姫を取り返さんとする輩を排除するために

見張りを命じられていたドラゴン。彼は知性も高いようで、ブライアンたちと

何不自由なく言葉を交わす。

「・・・グハハ・・・さすがは竜王様の愛娘。はじめはこの行為の意味が

わからなかったが・・・お前たちのようなやつに来る予感があったのだろうな。

さて、それなりの覚悟はあるのだろうか？オレに殺される・・・」  
「覚悟はあるさ。ただ、お前に殺されるつもりは全くないけどな！」

自分の何倍も大きく、そして明らかに格上の魔物。ブライアンにとって初めてのの

経験であるが、それでも果敢に先制攻撃に出た。斧でその胴体を斬りつけた。

手ごたえは確かにある。しかしドラゴンに動揺も痛みも与えられていない。

「・・・ブライアンさん！」

「ぐっ・・・効いてはいるはずだ。でもあいつを倒すためにはあと何発攻撃を与えたらいいのか見当もつかない！」

この長期戦、二人の持つ大量の薬草、そしてブライアンのホイミが命綱だ。

そしてブライアンとブリザードにとって運が悪いのはその立ち位置だ。

通常通りであればドラゴンは扉を開けた先に待ち構えているはずだった。

よって形勢が悪くなれば逃亡して立て直しを図ることもできた。



しかし

この度はドラゴンの不在を狙って侵入したところ戻ってきてしまったので

退路を断たれている。洞窟から一瞬で脱出できる『リレミト』の呪文も

覚えていない。倒すか倒されるかしなければ戦いは終わらないのだ。

「どれ・・・ゴミ虫どもを蹴散らしてやるとするか・・・ふんっ!!」

ドラゴンが尻尾を振り回してきた。余裕があるのか、それともいたぶるつもり

なのか、ゆっくりとした動きで追い詰めてくる。ブライアンたちはそれを

どうにか避ける。尻尾だけでなく鋭い爪や牙にも用心しなければならぬ。

「さすがは虫けら・・・逃げ回るだけは得意か。ではこうしてやろう」  
ドラゴンが息を吸った。何かが来る、それだけはわかった。そして口が大きく開き、

「ハアアア——・・・ゴボォ——ツ！」

高熱の火の息を吐きだした。暗い洞窟が照らされる。

「グハハハ——ツ！お前たちの骨と肉は残しておくくらいに加減してやったぞ。

どれ、この炎によって焼け爛れた今日の晩飯の具合は？」

一面に火の息を吐いていたせいで自らの視界すら炎に包まれていた。

それをやめることで、二人の焼死体と対面できると思っていたが・・・。

「ブライアンさん！どうだい俺のヒヤドは！」

「・・・ああ。凄いや。ついてきてもらってよかった」

失われたはずの氷の呪文、ヒヤドの使い手であるブリザードが氷の壁を張って

炎を相殺していた。殺したはずの人間たちが何事もなく生きており、

ドラゴンは無言で彼らのやり取りを茫然と眺めるだけだった。

「しかしどこでそんな呪文覚えたんだ？ やっぱりどこかから奪ったのか？」

「・・・まあそういうことにはなるか。でも魔物たちすら使えねえこいつが

俺にだけは適正があったのかすぐに解読できたんだ！ 他の呪文はさっぱりだったから残りの書物は全部城に売っちゃまったけどな！」

時間が経つうちにドラゴンは激しい怒りを抱き始めた。自慢の火の息が

人間に通じなかったことなどなかったのだ。大きな雄叫びをあげると、

「許さぬぞ——っ!! 絶対にここで始末してくれるわ——っ!!」

今度は足で踏みつけようとしてきた。しかしその動きは鈍い。

どうやら手加減などではなく、俊敏な動きができないようだ。

「そうか！ こんな洞窟にこもりっぱなしのせいだこいつ動きが重いんだ！」

「なるほど・・・待っていれば勝手に餌が来るからか！ しかもあの炎で人間も魔物も丸焼きに出来るんだ。身体がなまってやがるな！」

ブライアンは斧で確実にダメージを積み重ね、ブリザードも遠くから

石を投げたりしてドラゴンの体力を削っていった。無尽蔵に思える

スタミナを誇っているように思えた怪物も、やがて足が震えだした。

「……き、きさまらなんぞに……！竜王様に認められたこのオレが……！」  
「こっちは海で鍛えてたんだ。お前みたいな怠け者といっしょにするな」

「くそ……！りゅ、竜王様……！！グオオオ……！！」  
ドラゴンは最後のチカラを絞り出して腹の底から炎を吐き出してきた。

悪あがきかと思いきや、窮地に追い詰められたためか先ほどまでより

その威力は遥かに強力で……。

「危ねえ、ブライアンさん！ヒヤド！……！！ああっ!?」

氷の壁を溶かし、炎がブライアンに迫ってきた。しかし彼は怯まずに、

「オオオ——ツ!!ぼくも最後の一撃だ——!!!」

斧での一振りドラゴンの頭部、脳天に炸裂させた。会心の一撃だった。

「グゲガア〜ツ……！！」

「よ、よっしやあ！勝った！くたばりやがったぜ、あの野郎が！」

斧が刺さったままドラゴンは仰向けに倒れ、絶命した。しかしブライアンのほうも

全身に軽い火傷を負い、その場に片膝をついた。

「……ブライアンさん！早く薬草を！」

「あ……ああ。ありがとう。しかし一人では勝てなかっただろうな。もっと強くないとだめってことか……危なかったよ」

「何言つてやがるんだ！反省会は後にしようや。ほら、その先には……」

ローラ姫がいるはずだ。応急処置を終えたらすぐにも迎えに行くのだ。

「……先に行ってくれないか。もう少し傷を癒したいんだ」

「おいおい、そりゃあないぜブライアンさん！あんたが先頭で行かなくて

どうするんだよ！俺なんかが姫様を……」

緊張のせいか二人で譲り合っていると、逆に奥のほうから人影が近づいてきた。

まさかまだ見張りの魔物がいたのかと身構えさせたが、その姿が徐々に

明らかになる。それは魔物とは最も程遠い……。

「……ローラ姫！」

「全て見ていました。この私を助け出すためにあの恐ろしいドラゴンを

打ち倒してくださいましたのを。勇者ロトの子孫、ブライアンさま」

「……ええっ？ぼくのことをご存じなのですか？」

「もちろん。お父様やお兄様はあなたのことが苦手のようですけれど。」

あなたが助け出してくださいさるなんて夢のようですわ」

純情なブライアンは頭を掻いたりしながら見るからに照れている。

ブリザードは尊敬する男の意外な弱点について嘖き出してしまった。

(やれやれ……姫様、俺なんていないかのようだぜ。でもまあいいか。

これほどのお方だ。釣り合うのなんてこの姫様くらいしかいねえよな)

不思議と嫉妬心は全く抱かなかった。とはいえそろそろ二人に声をかけた。

「じゃあ……もう行きましょうぜ。早く逃げないと他の魔物が異変に気がついちゃうかもしれないし……」

「おっ、そうだな。じゃあローラ姫、行きましょう。出口は確か……」  
ブライアンはドラゴンに深々と刺さった斧を引き抜こうとするが、

幾度も厚い皮膚に打撃を与えたせいも、もう使い物になりそうになかった。そのままにしてここから去ることにした。ドラゴンが

倒されたことは知らないまでも、そんな大物を倒した男の威圧感を  
感じ取ったのか、素手の彼相手に魔物たちのほうが道を開けてい  
た。

そして洞窟の途中でブリザードの仲間四人と合流した。これで  
外に出るまでは安全だ。洞窟を出たらキメラの翼で城に戻る。

「せっかくだから……あちらに行ってみたいのですけれど」

ローラ姫のその一言でラダトームへ帰るプランは一気に変わった。

「……あっち……あちはリムルダール……ですが」

「お父様は私を全く外に出してくださらない。せっかくの機会なのだ  
から

ちよつと知らない土地を見てみたいの。いいでしょう?」

「…….…….少しだけですよ」

考えた末に姫のわがままを受け入れたブライアン。彼の決定をブ  
リザードたちは

意外に思ったが、姫という高い立場ゆえに逆らいようがなかった  
か、もしくは

先ほどの彼の照れ方からして断りきれなかったか、まあどちらかだ  
ろうと

二人の後をついていった。そのブライアンの頭のなかは別のこと  
でいっぱいだった。

彼の初恋、幼い日の夜の浜辺の少女とローラ姫が同一人物なのかど  
うか、だ。

(……聞くのもなんだかなあ。もうちよつと様子を見るか)

沼地の洞窟を『リムルダール』の町側の出口から脱出した。こちら  
も大地が

汚染されており、毒の沼が広がっていた。ブライアンはすぐにローラの手を取り、

彼女を抱きかかえた。どうせ武器であった斧はもうないのだから両手は空いていた。

「・・・まあ、ブライアンさまったら・・・大胆なのね」

「大胆・・・？何のことですか。そこに毒があるのだから当然でしょう」  
後ろで見ていたブリザードたちは苦笑いだった。彼は純情でありながら鈍感だった。

きつとラダトームの町にも彼に思いを寄せながら気がついてもらえない女性たちが

大勢いるのだと思うと彼女たちに同情せずにはいられなかった。

「でもこういうのは失礼かもしれないけど、姫様、意外と健康的だし身体は

清潔で綺麗ね。あんな洞窟に監禁されていたのだからもつと悲惨な感じに

なっているものばかり・・・」

ブリザードの仲間、女盗賊のローマンが疑問をローラにぶつけた。

それは口にはしていなかったが他の者たちも同じだった。連れ去られて半年も

経っていたのだ。元の美貌は全く失われず、肌の色もいい。ローラはそれに答える。

「ええ。私も考えもしないことでしたが、手厚く扱われました。決して飢えぬように

食事が与えられ、毎日体を洗うこともできました。水はとてもおいしく・・・

とはいえそれは全て私を竜王の嫁にするためにあの者の娘がそうするように

したのです。そして明日には私は竜王の城へ・・・！考えるだけでも恐ろしい。

もしそうなれば私は自ら命を絶つつもりでした。ブライアンさま、

ほんとうに

何と言えばよいのか・・・！」

「ご無事で何よりです。ところで沼地はもう過ぎました。元気そうですしもう

ご自分の足で歩かれますか？久々に外の空気を吸いながら・・・」  
「・・・いいえ、あなたがよければしばらくこのままをお願いします。

こんなに長い距離を歩くのは普段であつても珍しいことで多少疲れが・・・」

結局リムルダールに到着するまでずっとローラはブライアンに抱きかかえられていた。

その間敵が現れた場合はブリザードたちが撃退していた。ブライアンも両手が

塞がっているとはいえギラの呪文は問題なく唱えられるのだが、二人の時間を

邪魔させたくないとか何とかで彼が戦闘に参加するのは制止された。

「・・・ここがリムルダールの町！名前だけは聞いていましたが・・・」

「なかなかいい町なんだコレが！竜王の城が近いからヤバいところなんじゃ

ないかと思って思っているやつらが多いようだが、あの魔の島とは陸がつながってないからな、ウロウロしている魔物も大したことねえ」

「まあ・・・南の聖なるほこらの辺りは別だけどね」

聖なるほこらとはいったいどんな場所なのか。そしてブリザードがローラ姫の

監禁されていた部屋の扉を開けた魔法の鍵を売る店や、これまでに訪れた

どの町や村よりも立派な剣や鎧を揃えている武器屋。興味は尽きなかったが、

「・・・でも今日はいろいろありすぎた。眠りたいな」

「ええ、そう言われると思つて、すでに宿を！二部屋しかないんですが構いませんね」

この町の宿屋はもともと二部屋だ。ブリザードと仲間たちがにやにや笑っている。

「・・・もちろんブライアンさんと姫様で一部屋でしょう？へっへへ、俺たちは

全員で残り一部屋で構いやしませんから存分にお楽しみを・・・」  
「馬鹿言うなよ、男と女で別にするに決まつてるだろ」

ブライアンは一蹴したが、隣にいたローラ姫は冗談半分、本気半分に、

「うふふ・・・私はそれでもよろしかったのに。残念ですわ」

この発言に、初心なブライアンがまた赤面するものだと皆は期待していたが、

彼は明らかに機嫌を悪くし、怒っているようにも思えた。そしてローラに言う。

「あなたはもう少し警戒心や危機感を持ったほうがいいと思います。そんなことでは

また攫われることになるでしょう。今回は無事だったからよかったですとはいえ、

欲望のままに動く屑どもに誘拐されたらどうなっていたことか。いまだって

ほんとうならまっすぐ城に帰るべきだったんだ・・・」

突っぱねるような言い方に、今度はローラのほうが拗ねるような感じになり、

「・・・あら、そう。あなたは私のことをその程度に思っておられるのですね」

まさかこんなところでけんかが始まるのかと思つたが、ブライアンは彼女に背を向け、



荷物をまとめてひとり言のような小さな声でこう言うのだった。

「……大事でなければこんな注意するものか。わかってないなあ」

その言葉はこの場にいたローラにだけ聞こえていた。そして彼女はブライアンの

気高い人間性を知った。流れに任せて王の娘に手を出すような男ではないのだ。

彼の言う通り、これからはもつと何事にも気をつけて生きていこうと思わされた。

いつか彼が同じ寝室で寝ようと言ってくれる日まで清い身体を守るために。

「……おはようございます。ゆうべはお楽しみでしたね。では、お気をつけて！」

宿屋の主人の言葉に決して裏の意味はない。あくまで昨晚、ブライアンたちが

遅くまで歌を歌ったりしながら盛り上がっていたのでそう言っただけだ。

「……よし、買い物もしたし……そろそろ行くか、みんな！」

ブライアンはカメラの翼を放り投げた。久々にラダトームに帰るためだ。

一人で出たのに、帰るときには大勢の仲間、そしてローラ姫を連れて

堂々の帰還となった。

## マイ・ジプシー・ダンス（祝宴①）

「おお、ブライアン！なかなか帰ってこないから心配したぜ……！！？」

「お前が連れてきているのはその……ま、まさか……！！？」

ラダトームの町の人々と久しぶりの再会を果たした勇者ブライアン。町人たちが

驚き言葉を失っているのは他でもない。彼の隣にいる女性のことだ。

「そのまさかだよ。ローラ姫さ。早くお城の兵士を呼んできてくれな  
いかな」

人々が大慌てで城に向かうと、兵士たちだけでなく王までもが共にやって来た。

ローラの姿を見ると、脇目もふらず走り出し、愛娘を抱擁した。

「……おお！我が娘、愛するローラ！ほんとうに……よかったです！

わしは……わしはもうだめかと……！こうして生きて会えるとは……」

「ええ……お父様。私も久しぶりにそのお顔を目にする事ができてとても感激しております。すべてお父様の遣わした勇者様のおかげですわ」

「そうか……ブライアンか！うむ……よし、今日は夜から盛大な宴を

開くことにする！この町でも、城でもだ！ブライアン、それに町の者たちよ、

そのときまでに今日の分の仕事は終えて皆が参加できるようにせよ！

宴の時刻までは……しばらくわしら家族だけにさせてもらおう」

王と護衛の兵士たちに連れられてローラが城へと去っていきこうとする。

その後ろ姿を見送っているブライアンのもとに一人の女性がやってきた。

「ブライアン！あなた・・・元気そうじゃない。しかも姫様まで

連れて帰ってきて・・・大したものね」

「アマゾンか・・・久々に顔を見ると何か新鮮だなあ。でも少し痩せた？」

ブライアンの言葉に対しての返事がない。どうしたのかと近づくと、

アマゾンは彼に勢いよく抱きついてきた。鍛えられた足腰を持つ彼でなければそのまま押し倒されかねないほどだった。いまこのときの

彼女は、泣くでも笑うでもなく、ただ心から安堵している顔だった。

「・・・あなたが無事でよかった。一日、また一日あなたが帰ってこない

夜のたびに・・・無理にでも町の外までついていけばよかったと・・・」

「・・・心配かけて悪かったよ。待っていてくれてありがとう」

このやり取りを微笑ましく見ていたブリザードたちだったが、その一瞬、

確かに『寒気』、『殺気』・・・身を突き刺すそれらを感じ取って身が震えた。

「な・・・なんだったんだ・・・？」

「ブリザード・・・あれを」

彼の仲間が指さした先は、視力のいい人間でなければ豆粒にしか映らない

遠い前方、兵士たちの一団だった。その中心、厳重に守られているはずの

ローラ姫の鋭い視線がこちらを向いているのだ。ブライアンと町娘アマゾンが抱き合っている姿を見つめている・・・ように見えた。

「・・・モテる男も楽しやないってことか・・・」

「勘違いであつてくれと願うのみだな。ブライアンさんにも困ったモンだぜ」

王の言葉通り、夕刻には町の全ての店が営業を終え、農夫も医者も早々に

自分の仕事を切り上げていた。城の料理人たちの用意した酒やごちそうに

皆があずかり、宴は早い段階から盛り上がっていた。ブライアンはブリザードとぶどう酒を楽しんでいた。もちろん二人ともよく食べる。

「意外と奮発するじゃねえかあの王も。ただ、物足りねえのは王と主役の姫様が

ここにはいねえってことか。下々の者とはいっしょにいらねえってことかア？」

「まあそう言うなよ。安全を考えたら仕方ないだろう」

「でもあの野郎はいるぜ？王の自慢のバカ息子がよ・・・」

王の息子チトセ。別に彼は庶民と同じ空気が好きというわけではない。

あえて言えば自身が優越感に浸れるからこういう場所にいるのだろう。

そして王や教育係の監視の目のないここならやりたい放題だからだ。

「あんなのよりブライアンさんのほうがよっぽど次の王にふさわしい！

俺は断言するぜ。俺たちや町の連中はこの後の城の宴には参加させて

もらえねえからな・・・くそ、王にはつきり言つてやりたいぜ！」「まあそう言うなつて。チトセだつて根は悪いやつじゃ・・・。」  
ブライアンたちはチトセが酒瓶を片手にぶらついているのを眺めていた。

あてもなく威張りながら歩き回つた末に、彼はアマゾンのもとで立ち止まった。

「・・・あら、王子様。お酒ならあつちで・・・」

「おお？意外とカワイイ女じゃねえか。とんだ拾いもんだ。どうだいい、

そこの宿屋のベッドでボクと少しいつしよに休まないかい？なあ、いいだろう？ラダトームの王子であり次の王であるボクと

お酒を飲みながら楽しいことをしようよ・・・」

「・・・な、何するんですか！ちよつと、やめてください！」

「いいじゃないかあ。ほら、はやくこつちへ来いって。」

なあ、早く気持ちよくなるうつて言つてるんだよ！」

アマゾンの両肩を背後から掴みながら顔を近づけている。酒のせいか、

それとももともとどうしようもない男であるせいか・・・。

王子という立場ゆえに誰も手出し口出しできないなか、彼は違つた。

「そのへんにしておけよ。彼女、嫌がつているじゃないか」

「なんだブライアンてめえ！邪魔する気かよ！」

歳が一つ違うだけでチトセとブライアンは幼いときからの付き合いだった。

ブライアンは家族を亡くした後しばらくは王の家で育てられていたので

彼との交友もそこから始まっていた。それでもローラとの接触は許されていなかつたあたりに、王がいかに彼女を大切にしているか、

そしてブライアンに近づけさせないようにしていたかがわかるだろう。

このころから将来ブライアンに王座が渡ることを危惧していたのだ。

「お前ローラを助けて調子に乗ってやがんな。少しお仕置きをしてやらねえとな！」

「……………仕方ない、かかってこい！」

王子は怪しげな拳法もどきのような動きで襲いかかり、ブライアンはそれを避ける。

すると今度は酒瓶を投げつけたりしてきたのでなかなか接近しづらかった。

突然始まった喧嘩に皆は大盛り上がりで、城に伝えなくてはという野暮な

考えを持つ者は誰もいなかった。

「よーし、やっと捕まえたぞ、大人しくするんだな」

「こ、この野郎！オレに対してこんなこととしてタダで済むと思うなよ……………とうっ！」

攻撃をかわしてついに王子を地面に組み伏せたが、王子相手に手荒な真似は

できず、それ以上の追撃ができない。その隙について逃げられてしまった。

ブライアンから逃亡したチトセは懲りずに再びアマゾンに迫っていった。ところが、

「いい加減にしなさい、この破廉恥男！そんなに飢えているんだったらどつかの村の

パフパフ屋の娼婦にでも拜んで頼みなさい！」

「あぶおっ……………！ほげえええ……………」

ビンタ一発で王子を沈めてみせた。当たりどころが悪かったのか、

気絶したようだ。

(・・・この女・・・これなら最初から助けなんていらなかったじゃねえか。

いや、ブライアンさんに助けてもらったのが狙いであり望みだったのか？

さっきのローラ姫もそうだが・・・モテるっていうのは案外怖いモンだな)

ブライアンはアマゾンのもとに駆け寄って無事を確認していたが、あの調子ならまず大丈夫だろう。苦笑いをしながら見ていたブリザード

だったが、突然どこからか彼に近づく者がいた。そして速やかに何か書かれた紙を渡すと、またどこかへと消え去っていった。

「・・・おお・・・これは！さすがキャロルだ、仕事が早いぜ！

あとはこれをブライアンさんにいつ伝えるか、そしていつ公の場で明らかにするか・・・！大事なのはタイミングだぜ」

その後もまだ町での宴は続いていたが、ブライアンの姿はない。先ほど城の兵士がやって来て、彼を城での宴のために連れて行った。

町の大騒ぎとは違い、品のある祝いの席となるだろう。当然ただの町人であるアマゾンやブリザード一味は呼ばれるはずもない。

アマゾンはブリザードの仲間の女性、ナイフ使いのローマンと酒を飲んでいた。

「・・・私は思うの。こうやってブライアンが遠くへ行ってしまうんだろうなって。

私がついていけるのはせいぜい町のなかだけ。きつといつかは・・・」

普段は積極的で時には王子を一撃で倒してしまうほどの気の強さ

を見せる

アマゾンだが、酒が入ると気分が沈む人間のようだ。ブライアンは勇者ロトの子孫であり、ローラ姫を救った英雄なのだ。これからは今までのように接することができなくなる・・・そう思い始めた。共にいるローマンも慰めるでもなく彼女と同じような状態になっていた。

「よくわかるわ、それ。ああ見えてブリザードも私たちの世界では人気なのよ。」

そして情報屋のキャロル・・・あの娘は私と違って学があつて美人で、

それでいて仕事は完璧・・・きつとブリザードはあの娘を選ぶわ。ブリザードという大樹の葉っぱにすぎないのね、私は・・・」

ブライアンがここにいないのは当然だが、ブリザードもなぜかいない。

城に呼ばれていない彼だが、どうやら何らかの方法で潜り込もうとしているようだ。

「きつと城ではいまごろ優雅な音楽とここの食事とは比べ物にならないほど

豪華な・・・あれ？いま・・・何か光った？」

「流れ星・・・かしら？でも何か・・・嫌な予感がするわ・・・」

ラダトーム城。全アレフガルドの多くの民を治める栄華を誇る城も最近はい

いいニュースが少なかった。竜王軍に敗れ戦死した兵士が何人いるとか

遠くの町が魔物たちの住処になってしまったとか、意気を挫かれるものばかり

だったところに、ローラ姫が救出され傷一つなく生還を果たした。

城の王族や貴族、兵士や要人たち、また急な招きにも応え応じた周辺



権力者たち……。町の宴とは違い大騒ぎする者はいないが、みんな歓びを

抑えきれない。久々にラダトーム城に活気が戻った。

ダンスの時間が始まっていた。何事も器用にこなせるブライアンだが、

上層階級のダンスなど全く知らないでこれまで生きてきたのだ。

ローラ姫と手を取り踊ってはみたが……。

「……いたっ！」

「ああっ……ごめんなさい。足を踏んでしまうなんて……」

散々な出来だった。しかし苦悶する彼の様子とは対照的にローラは笑顔だ。

「……？どうされましたか？」

「いいえ、ブライアンさまってカワイイ一面もあるのだわ、そう思いまして。」

あんなに勇敢にドラゴンに立ち向かうあなたがいまはこうして

小さくなりながら踊っているのですから……」

「カワイイ……。女性にそんなことを言われたのは初めてですよ。」

いつも大飯食いの若大将とか呼ばれているものですから」

「まあ……うふふ」

楽しそうに踊るブライアンと愛娘ローラを眺め、ラルス16世

は……。

（……なるほど、そうか……。ローラがまだ幼いときからわしが怖れていた事態になったか。それが精霊ルビス様のご意志か。

ならばわしもくだらない意地を張るのはやめるべき……か……）  
誰も座っていない王座を眺める。そしてぽつりと……。

「たえわしの代でこの家系がアレフガルドの王ではなくなったとしても、

世界が終わってしまうことに比べたらどんなに些細なことだろう

か。

「……いや、よく考えたらわしの家も王であり続けるではないか」

大事に育て、愛してきたローラの結婚相手に、そして自らの王位を相続する者に

相応しい男が確かに見つかった。来たるべき時が来たら……そう思っていた。

しみじみと一人酒を飲んでいたが、突然城内に一人の男の声が響き渡った。

王はその声を聞くと、控えている兵士たちに視線で合図を出した。

「いまラダトーム城にいる全ての方々！せつかくのお祝いムードを

これからしばし台無しにすることをご容赦願いたい！俺の名は

ブリザード！ブライアンさんに救われ彼にほれ込んだ男だ！」

「……ブリザード！きみは確か……招かれてなかったんじゃないやあ？」

「そんなことはあとだ、ブライアンさん！ついにあんたの探していたやつがみつかったんだよ！それをこうやって大々的に発表してやるのさー！」

奥から兵士たちが十人近くやってくる。乱入したブリザードが追

い出されると

思いブライアンは頭を抱えた。しかし思わぬ展開が待っていた。

「あんなたちが密かに探していた『竜王の内通者』が！わかったんだ！」

「ええっ!?そうか、それでこの国の大物がみんな集まっていたいまなのか。ここで発表すれば犯人の逃げ場はないし……で、それは……」

「ああ。ローラ姫の誘拐、それに作戦を筒抜けにさせて軍を壊滅に追い込んだ

竜王の手先は……こいつだ——っ!!」

ブリザードが指さす相手……それは……

「え……私……ですか？」

城に勤めている魔術師の女性。ブライアンが二度目の旅立ちの前に呪文を

教わった、物腰の柔らかい優しい女性だ。ブライアンも、内通者がいるという

ことを知る少ない者たちも、まさかこの人が、そう誰もが耳を疑った。

しかしブリザードは構わずに皆の前で暴露を続ける。

「その女が魔物相手にこの城の秘密を伝えていた目撃証人もいる！

カネでもみ消したこともすでにわかっているぜ。ちよつと脅したら

そいつらすぐに吐きやがったぜ。あんたがやってることはよオ！」

「急に何を……。そもそもあなたは何者ですか。誰かこの男を……！はっ！」

兵士たちを呼ぼうとする。ところが兵士たちはブリザードではなく彼女を

取り囲んだ。ブリザードはあの短い時間で人を介して事前に王に全てを話していたのだ。

逃げ場がなくなった彼女の前に王がやってきた。

「……………」

「残念だよ。君は我が城のために活躍してくれていると思っていたのに。

君が魔物なのか竜王に魂を売った人間なのか……。全て獄でじつくりと聞こう。

そして竜王の秘密や魔族の弱点、知っている事柄を話してもらおうぞ」

宴の会場が騒然とし始めた。事情のわからない外部の来賓はなおさらだ。

どうということなのかと兵士や城の関係者たちに尋ね始めた。特徴的な

シルクハットを被ったとある年配の紳士もその一人だった。

「これは何が起きている？どうして祝いの最中に・・・」

「申し訳ありません。ですがあの者は我らを欺き竜王めの仲間だったのです。」

一刻も早く拘束し拷問を加え逆に情報を得ることにしなければなりません」

事情を説明すると、紳士は頷いたものの顎に手を当てて難しい顔をしていた。

「…………それは困る。わたしの忠実な下僕が捕らえられるのは……」

「…………何をおっしゃられて……………」

兵士はわけもわからないまま、首を斬り落とされ絶命していた。武器によるものではない。手刀で太い首を切れ味鋭く落としたのだ。

「わ———っ!!」「キヤアアああアア———ッ!!」

それまでの騒がしきは性質を変え、悲鳴や絶叫がこだました。

「…………なんだきさまは———っ!?何をした———っ!」

老いた男性はシルクハットを放り投げると不気味に笑い始めた。すると

肌の色が人外であることを示す真っ青なものとなった。おぞましい変貌を

人々は恐れおののきながら見ているしかできなかつた。やがてそれが

二足で立つてはいるが完全に人間とは離れた姿となつたときブライアンが、

「お前は誰だ!」

誰もが言葉すら発することができないなか謎の存在に向かって叫ぶ。すると…………。

「わたしは竜王。お前たちの希望を奪い去るためにやってきた」

## 夜空を仰いで (祝宴②)

ローラ姫奪還を祝う宴。歓びに満たされていたラダトーム城の空気は一変した。

なんと敵の総大将、魔王である竜王がこの会場に現れたからだ。

「・・・あの者が・・・竜王・・・」

「ローラ姫、ここは危険です！早くこちらへ！」

ローラをはじめ、戦闘力のない王族や貴族たちは避難を始める。

その様子を竜王は特に何もせず見ているのみだ。それらの者の命には

興味がない。彼がやってきた理由はラダトームの人々の皆殺しではなかった。

「・・・竜王・・・！きさま・・・賢者たちの結界は・・・！」

「フ：確かにそいつを突破するのはさすがのわたしでも骨が折れた。だいぶ力を使ってしまったな。しかし人間離れした実力と寿命を持つ

賢者どもも老いたものだ。これから目的を果たす程度の力は残っている」

ラダトームの城には勇者ロトの時代から生きていると言われている

賢者たちがいた。彼らのおかげでこの城の安全はずっと保障されてきた。

しかし今それが崩されようとしている。隠された地下室などで日々を過ごしてきた彼らも緊急事態に次々と駆けつけてきた。

「では・・・きさまの目的とは？」

「フフ、わたしは以前ここから『光の玉』を奪い取った。しかしそれだけでは

足りぬのだ。わたしはお前たちの希望をすべて奪うためにやって

きた！

この城のどこかに『太陽の石』と呼ばれる神器があるらしいな。私の下僕、

『大魔道』・・・お前たちが城の魔術師として雇っていた者からその情報は

すでに得ている。そいつも頂きに来た。そしてお前たちは我々に降伏するのだ！」

竜王の送り込んだ女性の正体は大魔道と呼ばれる魔族だった。ブライアンの友人

ブリザードがそれを暴き、彼女は拘束される寸前だったがもうそれどころではない。

あの竜王が直々に乗り込んできて、人々の希望を奪うと宣言したからだ。

「そう。お前たちアレフガルドの人間の希望、すべてをだ。その最大のものは・・・」

このとき王は直感で理解した。我々にとっていま最大の希望は・・・。

「それはこの男だ——つ！勇者ロトの子孫——つ!!」

竜王はブライアンめがけて突進していた。ブライアンにとっては不意を突かれた形だ。

これまで竜王は国王や賢者たちに向かって話をしていて、自分は完全に敵の視界の

外だと思っていたからだ。しかし竜王は最初から狙いを定めてチャンスを待っていた。

「うっ・・・！」

「わたしはロトに恨みはない。そもそも彼は生後間もないわたしがこの地に降り立ち

物心ついたときにはすでに表舞台から姿を消していたのだからな。だがわたしに

歯向かう者はその力に目覚める前にわたし自ら始末せねばならな

いだろう！

死ね—— ツ!!勇者の最後の末裔よ—— つ!!」

自らのそばにいた兵士の首を斬り落とし惨殺したときのように竜王は

その手刀でブライアンに襲いかかった。今度は貫くように構えをとり、

ブライアンの心臓を一突きして瞬時に命を奪うつもりだった。

「シヤア—— ツ!!手ごたえありだ—— つ！」

その一撃は肉を抉り骨を砕いた。狙いとは少し位置がずれたのか心臓を潰した

感触はなかったが、すぐに大量の血と水が噴き出し、攻撃は完全なる成功を

収めたと確信した。高笑いしながら返り血に染まった顔をあげた。

「ハハハ……!あつけないものだな、数百年に及んだ伝説の血統の終焉は。

これで沼地の洞窟のドラゴンのかたきも討てた。さて、その死に顔は……」

竜王の笑いが止まった。自らの攻撃が実は失敗していたという光景のために。

「お……王—— つ!!!」

ラルス16世……アレフガルドの頂点に立つ王がブライアンの代わりに

竜王の攻撃をその身に引き受けていたのだ。ブライアンも遠くから見ていた

ローラも、その場に残っていた全ての人々が崩れ落ちる王の姿に衝撃を受けていたが、最も動揺していたのは実は竜王だった。

「こんなことが……!!このわたしが……狙いを外しただと……!?!」

その隙を賢者たちは見逃さなかった。竜王に対しこの時代では失

われたはずの

古代の呪文を唱え始めた。ギラとは炎の性質も威力も違う、巨大な火の玉が

空中に浮かび、そのまま竜王を襲い、その体を覆いつくした。

「そこまでじゃ竜王—— つ!!ハアア—— ツ!!」

「が……ガボオオオオオオ……!!」

竜王は炎に燃やし尽くされ消滅した。死体すら残らないほどの火の玉だったのだ。

最大の脅威は去ったが、賢者たちもすぐに倒れる王のもとに急いだ。そして

やはり現代では誰も使えない最高級の回復呪文を唱えた。腹の大きな傷は

瞬時に塞がった。だが、彼らは知った。すでに手遅れだったことを。

もはや死にゆく王の生命力を蘇らせることはできず、肩を落としました。

「王……ラルス16世さま!しっかりしてください!王!」

「お父様……!!」

ブライアンとローラが声の限り呼ぶが、王はただ穏やかな笑みを浮かべるだけだった。

「どうしてぼくなんかをかばって……!!」

「……ブライアン……わしは……お前に謝らなければならぬ。

お前の養父でありながらお前のことを邪魔に思うことが多々あったのだ……。

わしやわしの息子は民衆からの人気がない。いつかお前に……この王座を

奪われてしまうかもしれない……。あんな危険な任務に粗末な支度金で

一人で旅立たせたのも……すべてはわしの愚かさゆえ……



すまなかつた」

懺悔するようにブライアンに許しを請っていた。ブライアンは首を横に振りながら、

「何を仰っておられるのですか……！いまあなたはぼくを守ってくれた。

それが答えではありませんか。幼い日も、そしていまもあなたがいなければ

ぼくは生きてはいない！あなたへの感謝は尽きなくともどうして許すことなど

あるのでしょうか。ですから王、気をしっかりと……！」

「……そうか……やはりブライアン、お前は海のように大きな男だな。

ローラよ。お前とブライアンによる治世をわしも見てみたかった。

お前たちが国を導くことで人々は今よりはるかに幸福に満たされるだろう」

「お父様……！」

「だが最後にお前と再会できた、それだけで……わしは満足だ。お前の母は

早くにこの世を去りお前やチトセにも寂しい思いをさせたな。しかしお前は

こんなに立派に成長してくれた……ありがとう」

王は自らの大切な愛娘、そして血は繋がっていないが愛する息子の手を握った。

「……さらばだ……この国を、世界を……任せたぞ、我が子どもたちよ」

「……！！！」

国王、ラルス16世は息を引き取った。ブライアンとローラは言葉を失い

彼の胸元に顔を埋めるのみだった。悲痛な光景にブリザードは目を背けた。

「ちっ……なんてこった！こんなこと……!!」

拳を握りしめるブリザードに賢者のうちの一人が近づき、諭すように言った。

「……いや……親が子を守り、未来を託してこの世を去ること……それは

決して悲しむことではない。事実、王が身代わりとならず竜王の狙い通り

勇者が討たれていたらやつに隙は生まれず、我らの呪文も功を奏さなかつただろう」

「そ、そうなのか……?」

「うむ。そして我らも若き者たちに未来を任せることにするときがきたようだ。

これまで数百年と生きてきたが……その役割もいよいよ終わりのようだ。

勇者ブライアン……あの男に我らがこのラダトームで守ってきた神器を……」

王の犠牲は決して無駄ではなく、さらに大きなものに未来を託すためのもの。

だからこれ以上嘆き悲しむな、そう言っているのだ。しかし真の悲劇は

この後に待っていた。跡形もなく焼け死んだと思った男の声が聞こえた。

「……フウウ……!!」

「……!!竜王……!!きさまは我らの前に倒れたはず……」

「はて、何のことか……?あのような呪文でわたしが倒れる……?」

傷を負っていたことは間違いない。しかし皆が王の最期に目を奪われている隙に

姿を隠してベホイミで回復し、万全の状態で舞い戻ってきたのだ。

賢者たちの

古の呪文ですら竜王の命を奪うまでには至らなかつたのだ。

「ならばもう一度——っ!!ハアアアア——ツ!!」

「お前らぐとき老いた者どもの攻撃など二度とくろうか!ベギラマ——っ!!」

竜王はギラの数倍の威力を誇る炎の呪文『ベギラマ』を唱えた。その炎は

賢者たちの呪文による炎を飲み込み、ついには賢者たちそのものまでも襲い、

食らいつくしてしまったのだ。

「……ば……ばかな……!!我が唱えたのは……勇者ロトの時代の

最高のもの……『メラゾーマ』であつたはずだぞ……!それがどうして

ベギラマなどに……」

「フハハハ!なぜわたしが古代の呪文を蘇らせようとしないかを教えよう。

このベギラマで十分だからだ!わたしのベギラマの威力はお前たちのどんな

呪文をも上回る!よつて必要ないのだよ、メラなんとかなんていう余計なものは!

魔法のレベルが大事なのではない。使い手のレベルが最も重要なのだ!」

「……グツ……!こんなはずでは……!!ゴボオっ……」

賢者たちは倒れた。竜王は立ちつくしていたブリザードや兵士たちに視線をやった。

「……ひっ……!!」

「フン……あとは太陽の石を奪うのみ。そうなればロトの子孫がいよ

うが

ローラ姫がいろいろがどうでもいいことよ。いや・・・やはりここで終わらせておくか！根絶やしにしてやろう！」

竜王の暴虐の嵐は止まない。次々と兵士たちを切り刻み、血と肉が飛び散る。

「ギヤアアアア——ツ」「ぐわ——っ!!」

「フハハハハ!!何の役にも立たない屑ども！お前たちの死肉は後ほど

魔物どもに食らわせてやろう！せめてもの有効活用ってやつだ！

さあ、このアレフガルドの支配者であるわたしによって殺される榮譽を抱いて

地獄に落ちていくがよいぞ——っ!!」

竜王の殺戮劇にブリザードは恐怖でその場から動けなくなってしまう。

しかし、この惨劇にもう一人、寒気に包まれ身体を震わせている者がいた。

それは大魔道。竜王の仲間であるはずの彼女がなぜか両手を頭にやり、

「いやああああああああああ——ツ!!」

叫び声をあげて膝から崩れ、大量の汗と涙を流していた。竜王はそれに気づき、

「・・・そうか・・・まだお前は・・・おい！我が娘よ——っ!!」

するとどこからかフードを被った小さな少女が現れ、大魔道の身体を支えた。

「娘よ・・・大魔道のことを頼んだ。新鮮な空気を吸わせてやれ」「わかった。お父様も気をつけてね！」

すぐに城の外へと駆け出してしまおう。しかしいまのラダトーム軍には彼女たちを

追う余裕はない。竜王の猛攻を凌ぐしかできない。ローラは竜王の娘とは

沼地の洞窟で毎日のように話していたので捕らえるべき存在であることは

わかっていたが、ローラにその力はない。そして隣にいたはずのブライアンもない。気がつくとは彼は竜王の前に立っていた。

「・・・ほう、救われた命を再び捨てに来たか・・・」

「やめろブライアンさん・・・！殺されるだけだ！あんたは姫様と・・・！！」

ブライアンは何も言わずに剣を握った。兵士たちの死体のうち、いちばん立派な

鋼鉄の剣。リムルダールの店で見てはいたが手の届かなかった値の張る剣だ。

だが竜王からすればそれすらも粗末な玩具に過ぎないようだ。

「フハハハハ。そんなもので何ができる。大人しく降伏したらどうだ。

あの老いぼれが死んだのだ、次の王はおそらくお前なのだろう？

わたしたちに逆らうのはやめるべきだ。まあ老いぼれの後を追  
い・・・

残っているクズ共と運命を共にしたいのなら試してみるのもいい  
かもな」

もちろんブライアンは鋼鉄の剣を手離さず、竜王への敵意を露わに  
する。

「・・・さつきお前が言っていただろう。誰が使うかが大事だつてな」  
「そうか。ならば仕方がない。もう一度殺してやろう！ハア——  
——ッ！！」

竜王は手刀でブライアンの首を狙った。相変わらず一撃での決着

を凶っている。

ブライアンはそれをどうにか避け、竜王の右肩に剣を振りぬいた。腕ごと

斬りとばしてやろうという一振りだったが、なんと肩の肉で剣は止められている。

あのドラゴン以上の守りだ。強引に押しこもうとしてもそれ以上動かない。

逆にブライアンのほうが一気に危険な状況に置かれた。竜王と接近してしまった。

竜王は攻撃されている右肩そのままに、左の手でブライアンの首を締めあげた。

「がっ……がああ……!!」

「フン……だから言っただろう。もはやお前には何もできないのだ」  
竜王の指が首に食い込み出血し始めた。呼吸をするのも困難になる。

意識も遠のきこのまま窒息もしくは斬首……どちらにしても苦しみの死が

待っている……そのときだった。無警戒だった竜王の背を火の玉が襲った。

「……あ、後は頼んだ……新たなる勇者よ……ぐふっ」  
「……うおおおっ!?きさま……まだ息があったのか……」

倒された賢者のうちの一人だった。最後の力を振り絞り、竜王を攻撃した。そして

全てを使い果たした賢者は数百年という生を終えた。

「驚かせおって……。所詮はここまでだったようだな……」

竜王は冷静さを取り戻した。再び勇者の処刑に戻ろうとしたが、

「うおおおお——っ！よくもパパを！てめえこのやろオ——  
——ッ!!」

避難していたはずの王子が酒の瓶や樽、辺りにあったものを次々と投げつけてきた。

武器になりそうなものを投げ終えても、果物や料理の乗っていた皿までも投擲し、

竜王の顔で果実が潰れたり皿が割れたり：：ダメージは全くなかったが

怒りの矛先を向けるには十分だった。

「・・・このクズが・・・!!わたしの顔を汚したな!ならばわたしは

お前の顔を血で染めてやるでしょうぞ!!」

チトセ王子は大慌てで逃げ出した。竜王は彼を討とうとしたが、そのとき

ブライアンの首にこめていた力を弱めた。それが竜王の最大の失敗だった。

「・・・はっ!!抜け出しおったか・・・!いや・・・それより・・・」

ブライアンの右腕のアザが光っていた。事情を知らない竜王にとっては

何が何だかわからない。ブライアンにとってもこんなことは初めてだ。

その腕のアザは勇者ロトの子孫であれば皆身体のどこかに存在している、

まるで彼の血が流れている証明みたいなものだった。紋章のような

不思議な形のアザだったのだが、それがどれだけくつきりと出ているかは

同じロトの子孫たちでも差があった。力があればあるほどそれは鮮明であるという言い伝えがあるが、平和な世が続いた近代はしつかりと

見つめないとそのアザが確認できない者ばかりだった。ところが、ブライアンのものははつきりと見えるどころか眩しく光輝いてい

るのだ。

「おおおおお——!!!」

「くっ！ベギラマ——っ!!」

ブライアンをベギラマの炎が襲う。しかし城に入り込むために境界を破り、

変装していたために力を使い、賢者たちを倒すために魔力を費やしていた。

ブライアンの体に炎は乗り移ったが、威力は本来の三分の一以下だった。

「くそっ……！だがきさまの貧弱な攻撃がわたしを傷つけることは……」

「おお……オオオオ——ッ!!!」

竜王は更に驚愕した。ブライアンが発している闘気、パワー、迫力……

先ほどまでの数倍以上になっていた。そしてブライアンの鋼鉄の剣が

竜王の胴体を斜めに切り裂き、紫色の血が噴きだした。その勢いで竜王は吹っ飛んだ。

「何イイイイ——ッ!?このわたしが——っ!!」

「よーっ!!一気にとどめだ！まだ生きている兵士たち、バカ王子も！

ブライアンさんがあれだけ痛めつけてくれたんだ、あとは俺たちが！」

「バカ王子って誰のことだよチンピラ！でもその通りだな！アチョー——ッ!!」

竜王を追撃し、とどめを刺そうとブリザードたちが走る。しかし魔王である男は

悪運も一流なのか。彼が飛んでいった先には魔術師として城に潜



入っていた

大魔道、そして竜王の娘だというフードの少女がいた。二人は竜王をキャッチすると

そのまま呪文を唱えて姿を消してしまった。おそらく『ルーラ』だろう。

キメラの翼と同じ効果を持ち、自らの本拠地に一瞬にして帰れるのだ。

『・・・フ、フハハハ・・・油断したわ・・・!!まさかこれほどの男が

まだラダトームにいたとはな・・・!今は退く。退くが・・・必ずやわたしは

わたしに逆らう愚者どもを粉碎し!この世の頂点に君臨してやるぞ・・・!!』

ブライアンにも竜王の去り際の宣戦布告が聞こえていた。だが不思議な力を

使い、ベギラマの炎に全身を焼かれ、満身創痍の彼はすでに意識が遠のいていた。

倒れこむ寸前、ラダトームの空が見えた。夜空はいつものように美しく、

この日起きた衝撃的な出来事全てが夢ではないかと思えてしまった。

「・・・ローラ姫・・・ラルス王・・・竜王・・・」

夜空を仰いだまま彼は意識を手放した。長い長い一日が終わった。

## 夕陽は赤く (ラダトーム②)

ラダトーム城に自ら向かい、ロトの子孫の命と神器と呼ばれる太陽の石、人間たちの

希望をすべて奪い去ろうとした竜王だが、本人も理解していない謎の力に満たされた

ブライアンによって阻まれ、痛み分けの形で己の城に戻っていた。彼のもとには

共にラダトームから帰ってきていた彼の娘と大魔道がいた。

「・・・危ないところだったねお父様。だからわたしの言う通り・・・」

「我が娘よ・・・その議論はまた後ほどにしよう。いまは・・・」

「お嬢様。竜王様は静養が必要です。さあ、私と共に・・・」

二人は竜王の間を後にした。すると、大魔道は娘に頭を下げた。

「・・・お嬢様。申しわけありません。本来であれば私がおなたや竜王様を

命をかけてお守りしなければならぬのにあのような失態を・・・！」

ラダトームで救われたことをまだ気にしているようだ。しかし竜王の娘は言う。

「いいって、別に。だってお互い様でしょ？助けたり助けられたり・・・。」

それが仲間であり、友だちであり、家族である・・・そう思ってるから。

きつといつか人間たちともそれができると思っているんだけどね。お父様も

二人のお兄様もわかってくれない。わたしが変なのかなあ」

「お嬢様・・・その優しさを大切になさってください」

二人はそのまま竜王城の外に出た。ラダトームが遠くにぼんやりと見える。

竜王は半日以上横になったまま動けず、すでに夕陽が海を赤く染め

ていた。

「……………クソっ……！せつかくの姫様奪還のお祝いムードが  
またもとのしみつたれたた空気に戻っちまった……！しかもブライ  
アンさんは

丸二日も目覚めていない！ 薬草や回復呪文で癒しは終わったの  
に……。

もはやそばにいて支えてやるしかできねえ！このタイキ・ブリザ  
ドが

ブライアンさんを救ってやるんだ！」

ブリザードはブライアンが眠る彼の寝室へと急いだ。城にその一  
室がある。

すでにブリザードは城に入る許可を得ていた。すぐに目的の場所  
に向かう。

「……ブライアンさんっ!!来てやったぜ!いつあんたが目覚めてもい  
いように

あんたの好きな肉のたっぷり詰まった饅頭を町から持ってきた  
ぜ……」

「……………」

勢いよく扉を開けたが、うるさいから静かにしろと言わんばかりに  
睨まれた。

その厳しい視線の主は、ブライアンの幼馴染である町娘アマゾン  
だった。

彼女はブライアンが竜王との戦いの後倒れてからずっと休まず看  
病していた。

「あんたか……。ブライアンさんの傷自体は完治しているはずだが」  
「それでもこうして汗を拭いたり手を握ったり……見ていたいのだ。

あなただっただから来たのでしょうか?まあそこに座って……」  
言われるがままにブリザードは座り、そして大人しくしていた。し

かし

それから間もなく、また部屋の外からざわめきが聞こえた。

「……いけませんローラ姫様、あなたほどのお方が病人の看護など……」  
「いいえ！ブライアンさまのもとには私がいなければなりません！」

「でも姫様！あなたは食事の用意も掃除もなさったことがないではありませんか！」

ローラがやってきたようだ。ブリザードはここで修羅場を予感した。アマゾンも

ローラもブライアンを愛しているのだ。巻き込まれまいと逃げ出そうとしたが遅かった。

「……………ローラ姫様。ここへ何を？」

「あなたは確か町の……。ブライアンさま……。いや彼はこの城の間人。

ならばあなたではなく私が彼を看るのが道理にかなっているのでは？

あなたにはあなたの生活があるはずです。それに一度お休みに……………」

ライバルからの牽制に気の強いアマゾンがどう反応するかハラハラしながら

ブリザードは展開を見守っていた。しかしアマゾンは小声で呟くように返答した。

「……いいえ、私にはわかるのです。ローラ姫様、きっとあなたは将来、

もっと大切な場面、そして長きに渡ってブライアンを支え、共にいると。

ですからせめていまだけは私に任せていただけませんか、彼のことを。

私にできるのはこれくらいですから……」

「……. . . . . わかりました。ではよろしくお願いしまし  
う」

ローラは思わぬ答えにしばらく黙ってしまっていたが、アマゾンの  
気持ちを

深く思いに留め、そして受けとめた。最終的に誰がブライアンと結  
ばれるかを

わかった上で、その日が来れば身をひくという彼女の思いにこの場  
は

あつさりと引き下がった。

「ふーっ……何事も起きずによかったぜ。しかしあんたはいいのか？  
それで」

「いいも何も……『こうなるしかない』ってことには逆らえないじゃ  
ない」

アマゾンがブライアンの身体を布で優しく拭くことを再開した。  
どう言ってもやれば

いいものか……ブリザードもよくわからないまま一時間ほど沈黙  
が流れていた

そのとき、何の前触れもなく彼はむくりと体を起こし、腕を伸ばす  
と、

「……あー……よく寝た。やっぱり知らない宿のベッド、まして野  
宿なんかとか

わけが違うな。ほんとうに疲れが……あれ、どうしたんだお前た  
ち……」

ブライアンがついに目を覚ました。歓喜の瞬間に二人は目を輝か  
せた。

「……. . . . . ブライアンさん!!」 「ブライアン……!」

ベッドの彼の胸のなかへ二人同時に飛び込む。その勢いでブライ

アンは押し倒され

再び横になる形になった。

「・・・いたいな・・・だからいったいどうしたって言ってるのに・・・」  
「どうしたもこうしたもないわよ！まったく・・・！私たちがどれほど心配したと思ってるの！でもまあ・・・とにかくよかつたわ！」  
「・・・はっ!!そうか！おい二人とも、竜王はっ!!」

頭が働き始め、意識を失う直前の記憶が蘇る。そのときのブライアンは

竜王と死闘中だったのだ。慌ててベッドからおりた彼を安心させるように、

「竜王？やつならブライアンさんのおかげでどつかへ逃げ帰っちまいましたぜ！」

とどめを刺せなかったのは悔しいが・・・あの傷なら当分の間はてめえの城から

出て来れねえでしょう！あんたが振り返りにしたんですよ、あの竜王を！」

「そうか・・・それはよかつた。でも・・・王様が・・・」

王ラルス16世はもういない。ブライアンは気になったことができたので見舞いの品の

肉饅頭を食べてから王の間に向かった。すると、この間までラルス王の君臨していた

王座に、ブライアンもよく知るあの男が座っていたのだった。

「オッス！若大将！やっと起きたのか！呑気な野郎だなあ。こっちはもうとつくに

いろいろやっているっていうのに、暇人は楽でいいな」

「チトセじゃないか。そうか、次の王はやつぱりお前か」

「チトセオー！チ・ト・セ・お・う！そこを間違えてくれるなよ。」

親父が死んじやったからおれが王位を継ぐのは当たり前前だろう？」「  
「そうだよな、じゃあそのうちラルス17世ってことになるんだな」

頭の王冠をこれ見よがしにアピールし、王座にどっしりと座っている姿が

滑稽そのものだったが、すでに彼が王なのだ。ブライアンも大臣や兵士たちも

不安が大きかったがこれからしつかりと支えていく以外にあるまい。

そう思っていたところでチトセ王はブライアンを持っていた杖で指して言った。

「じゃあさっそくだが若大将、王であるおれからお前に使命を与える！」

「・・・何だ？あんまり無茶なのは困るぞ」

「王の命令だ！お前は今から竜王を倒して来い！そして・・・」

倒してくるまでこの城に戻ることは・・・絶対に許さんっ！」

またとんでもないことを言いだしやがった、そう兵士たちの間で呆れにも近い

ざわめきが起こる。しかしブライアンはすぐに跪いて答えた。

「・・・チトセ王、あなたの仰る通りに私は動きます」

それを聞くと王は王座から立ち、決まりの悪そうな顔でブライアンに近づき耳打ちした。

「悪いな若大将・・・お前にラダトームにいられるとおれの王座が危うい！」

お前を王様にしようってやつがたくさんいるんだよ、頼む、おれの支配が

軌道に乗るまではしばらく旅に出てくれ！」

「・・・仕方ないな。いいだろう。でも心配しなくたって王座なんかとらないよ。」

仮に治める国があるとしたら・・・やっぱり自分自身で見つけたいな

「ブライアンは王の間を後にしようとした。すると王はもう一度彼

を呼んだ。

「おお、そうだ。こいつは賢者の遺品だそうだ。持っていけよ」

ブライアンはそれを受け取ると旅の道具入れに入れた。実はそれこそ

ラダトームに眠る三種の神器の一つ『太陽の石』だった。しかし王は

それを知らず、ブライアンのほうも大事なものとしかわからなかった。

どのような役割があるのかなどはまだ全く理解していなかったのだ。

「・・・よし、もともと言われなくてもそのつもりだったんだ。行くぞ！」

「・・・ブライアンさま・・・どうかご無事で・・・！」

ブライアンは竜王を倒すための冒険を始めようとしている。広大な大地へ

帰ってくる保証のない旅に向かう愛する男の姿をローラ姫は城の窓から

見つめているしかできなかった。そしていつもにも増して精霊ルビスへの

心のこもった祈りを捧げようとしたところで、閉じかけた瞳を大きく開いた。

「・・・な・・・な・・・！あれは・・・！！！」

ローラは大急ぎで城の外へ出た。すぐにブライアンに追いついた。何も言わずに

見送ろうとしたのにどうしても黙認できずに飛び出した理由は・・・。

「・・・あ、あなたもブライアンさまといっしょに・・・!?」



「はい？まあ・・・そうなるわね。不安だし、町の外にもついていかなくちや。」

私は別にあいつのことを諦めるとかは一言も言ったつもりはないけど」

「・・・・・・・・!!こ、こうなったら私もお供を——っ!!」

兵士たちがどうにかローラ姫を城へと連れて戻った。その様子をアマゾンが

くすくすと笑いながら見ているだけだ。ブリザードは先ほどとは別の意味で

言葉を失った。やはりこの二人の戦いはまだまだ続くようだ。いや、

ブライアンを好きな女性がラダトームじゆうにたつた二人とは考え難い。

「・・・・・・・・どうしたんだ二人とも？騒ぎがしなかったか？」

「・・・・・・・・いや、何もなかったぜ」

離れた場所にいたブライアンに対し、ブリザードはそれだけ答えた。

「しかし夕陽がきれいだな。これも生きていればこそ・・・か」

ブライアンはしみじみと赤い夕陽を見つめていた。竜王に二日遅れてのことだった。

「だけどどうするの？竜王の城は目の前とはいえ海からは行けないよ  
うに

特別な結界が張られているのはとづくに調査済み。あなたの船も  
だめよ」

「まあすぐに行ったところで勝てないだろう。やつがしばらく動けな  
いというのなら

そのうちにしっかり鍛えたほうがいいと思っっているんだ」

「なるほど。ならその鋼鉄の剣でザコを狩って狩って狩りまくりま  
しょうぜー！

俺たちもやってやるぜ！ゴーストや魔法使いも倒せねえんじやつ  
いていく

意味がねえ。さっそく修行の開始だぜ！強くならなきゃな……」

ブライアンの姿を見ただけでももうスライムやスライムベス、ドラ  
キー辺りは

すぐに逃走する。それらを追うことはせず、竜王への忠誠心が強い  
のか好戦的なのか、

もしくは何も考えていないのか……向かってくる魔物だけを相手  
にした。

ブリザードの言葉通り、『狩り』だ。順調に魔物の死骸を重ねてい  
く。

しかし、どこからか声がする。ブライアンたちの戦いを見ていたの  
か、

草むらからその男は出てきた。彼はブライアンに近づいてきて言  
う。

「……お前が強くなる最も効果的な方法を教えてやろう、勇者ブライ  
アンよ」

「……？それはいったい……？そもそもあなたは……」

「オレのことは後でいいだろう。で、お前がレベルアップする最高の  
やり方だが、

それはお前の身体に眠るロトの力に目覚めることだ。お前は何事  
にもセンスが

あつたせいでこれまでではどうにかなってきたようだが……。その  
力を

使いこなせるようにならなくてはとてども竜王は倒せんな」

突如やってきたこの男はブライアンの戸惑いを気にもせず語り続  
けた。

彼は髪の毛の色が灰色で、身につけている鎧も白という珍しい風貌

の男だった。

手にする剣はブライアンと同じ鋼鉄の剣だった。彼はそれを構えて、

「・・・かかって来い。オレの言葉が嘘ではないことを教えてやろう」

「いきなりそう言われても・・・見ず知らずの人と戦うわけには」

「ならばこちらから行くぞ！ハア——ッ!!」

白い剣士が先制攻撃を仕掛けてきた。だが意外と対処可能なスピードだった。

「何だあの野郎はっ!?だが速きはあまりないみたいだ！」

「・・・ブライアン！」

ブライアンはすぐに自らの鋼鉄の剣で攻撃を受け止め反撃に出ようとした。

しかし剣士の攻撃は思っていた以上に『重い』。よく見ると彼の足腰は

非常にどっしりとしている。ブライアンも自分の肉体はしっかりと

鍛えていたが、目の前の男はそれ以上に基礎的な鍛錬に時間を費やして

いるようだ。その安定感のある剣士の勢いがついにブライアンを押しこみ、

斬られはしなかったが地面に打ちつけられてしまった。

「・・・ぐわっ!!」

「てめえ突然現れたと思ったらー！このお方はラダトームの国から竜王討伐を

命じられているんだぞ！頭おかしいんじゃないのか!？」

アマゾンに倒されたブライアンに駆け寄り、ブリザードは謎の男を怒鳴りつけた。

しかしその男もまた真剣な表情で、ブライアンたち全員に向かって大きな声で言う。

「だからこそ、だ！ 竜王を倒すというのであればこんなところでオレに

負けている場合ではない！ 勇者ブライアン、お前は血筋や家柄で自分を見てほしくないという気持ちと、何事も無難にこなせてきたこれまでの歩みのせいで偉大なるロトについて深く考えたことがなかっただろう！」

「・・・そんなつもりは・・・でも深く考えては・・・いないかもしれない」

「そんなことではお前はすぐに殺される！ 後ろの二人もいつしよにな

！  
竜王軍の精鋭たちを打ち倒し、そして竜王をも闇に葬るためにはやはり

お前のなかで熱く滾るロトの血を目覚めさせなければならない！  
それは

他の誰にもできない、当然オレにも。お前だけなのだ、ブライアン！」

ロトの血に目覚める。初めは意味が全く分からなかったが、次第に思い出した。

竜王に命を奪われそうになったとき、腕のアザが光り始め、並外れた力が

湧いてくるのをぼんやりとした頭でも確かに実感していた。あの力を

意識して開放することができれば竜王相手にも勝機が見えてくるだろう。

「もうわかったな？ オレはそのための協力にやってきたのだ。お前に断る理由はない！」

「確かにそうだ。しかしあなたがどうやってそれを実現させてくれるのか・・・」

「まずは地力をもっと鍛えなければならぬ。そのためには実戦で訓

練あるのみ、

なのだが・・・まさかお前ら、こんなところで雑魚を倒し続けて強くなるつもり

だったのではあるまいな？」

まさにその通りだよ、とブライアンがまだ口にする前に白い剣士は顔を真っ赤に

怒り始め、ブライアンを引っ張って歩き出した。置いていかれた二人も慌てて追う。

「馬鹿が！弱い敵をいくら倒したところで経験にはならん！これからお前を

絶好の修行場へ連れて行ってやる！甘えた根性を鍛え直すのだ！」

「・・・あ、あいたた！行きますから！でもあなたは何者なんですか？名前は？」

いまだにこの男に関してブライアンたちは何もわからない。さすがに名前くらいは

教えてもらわなければただでさえ信用しきれないのに更に心を許し難くなる。

竜王の手下ではないにしても、怪しさが拭えない。ブライアンたちのそんな

視線を感じ取ったか、白い剣士もしぶしぶ応じた。

「オレの名前は・・・『ビワ』だ。いま言えるのはそれだけだ」

「ビワ・・・聞いたことのない名前だな。本名かよそれ？」

結局彼の素性についてはここで知ることはできなかった。だが彼を頼らなくては

竜王を撃破するために不可欠な『ロトの力』に目覚めることは難しそうだ。

ブライアンの新たな旅が始まった。

## レッツゴー！若大将（岩山の洞窟）

勇者『ロト』の称号。今となつては大魔王ゾーマを倒した伝説の男のことを指すが、

実は歴史上彼以外にもその功績を称えられロトと呼ばれた者たちはいた。

ではなぜ『ゾーマを倒した勇者』だけが特別なのか。その理由は二つあった。

まず一つ、彼以外の者たちは時代が古すぎた。ゾーマの支配が終わってからでさえ

すでに数百年が過ぎているのだ。そして二つ目、闇の魔王ゾーマが  
いかに史上最悪の

大魔王であったかということだ。その脅威はそれまでの何よりも  
世界を恐怖と絶望に

落としたので、それを倒した男こそ真の勇者ロトとされた。おそらくこの先

世にどんな魔王が君臨し、世界を救った勇者がいたとしてもロトとは呼ばれないだろう。

ブライアンたちの言う『ロト』も当然一般的なロトのことを指して  
いて、

彼の遠い子孫であるブライアンに期待が集まっていたのも当然  
だった。

竜王討伐の命を受け旅立ったブライアンたちの前に突如現れた謎  
の男ビワ。

彼の言う特訓場に案内される道中、ブライアンについてきた元盗賊  
ブリザードと

ラダトームの町娘アマゾン  
は先を行く二人から離れたところで話をしていた。

その話題は、どうしてこの危険な旅に同行したのか、というものに

なっていた。

「俺は言うまでもねえ。あのお方に惚れたからさ！いや、勘違いするなよ！」

あくまで人間としてだ。ブライアンさんこそ俺の王だ！そのブライアンさんが

命をかけた冒険に出るんだ。運命を共にしたいと思うのは当然だぜ！」

「・・・私も似たようなところかしらね。町の中しかついていけない・・・そんなのはもういやだから。少しでもあいつの力になりたい、それだけよ。」

まあ・・・あいつに近づくと変な虫を見張るっていうのもあるかしら。あいつのためにも、そしてローラ姫のためにもね」

共通するところは、やはりブライアンが好きだからだ。だからついていく。

「・・・じゃあ・・・あいつは何なんだ？ビワとかいう男は・・・？」  
「さあ。全くわからないわ。敵ではないとしても味方なのかは怪しいわね」

ブライアンとビワは並んで歩いてしたが、会話はほとんどなかった。しかしそろそろ

目的地だという辺りになってビワがブライアンに語りかけた。

「・・・ブライアンよ、後ろの足手まといどもとはどこで別れるつもりなんだ？」

やつらは何の役にも立ちほしない。それとも囿や肉壁として使うのか？」

その発言にはブライアンも怒りを覚え、むっとした表情で彼の顔も見ないで反論した。

「彼らは立派な戦力であり何よりぼくの友人だ。そういう言い方はやめてほしいな。」

それにぼくからすればあなたのほうが頼りにならない。何者かもわからないのだから」

ビワのほうはブライアンの言葉に対し不機嫌になったりはしなかった。

むしろ頷いて、ブライアンの言うことはもつともだという顔だった。

「うむ・・・そうだ、それでいい。結局お前は一人で戦わなければならぬのだ。

後ろの二人だけじゃない。このオレも、他の誰もあてにしてはいけぬ。

そのための訓練をこれから始めるのだからな。念を押すぞ、一人で戦うのだ」

「まあ皆を危険には晒したくないしそれができるなら素晴らしいけれど

四人いるんだったら四人で戦えばいいのでは・・・？」

「・・・だから勇者ロトのことを考えろと言っているのだ。ロトも確かに

仲間たちと旅をし、ゾーマの城に突入した。しかし仲間はずつと倒れ、

最後はゾーマと一対一の戦いとなったのだ。それにロトは勝利した！

お前も必ずそうなるだろう！よってこの洞窟に今から一人で入るのだ！」

その洞窟の名は『岩山の洞窟』。沼地の洞窟とは違い人がほとんど訪れない。

魔物たちの数もこちらのほうが遥かに多い。もちろん、その強さのレベルも高い。

「さあ、この洞窟を攻略した証として最奥に眠る『戦士の指輪』を取って来い！

それができなければお前は竜王に戦いを挑む資格も実力もないことになる！



大人しくラダトームの町へ帰りのんびりと暮らしているといいだろう」

「・・・そう言われると頭に来るな。よし、戦士の指輪、だな！」

ブライアンは一人洞窟へ入っていった。追いついたブリザードとアマゾンが

彼の後に続くこうとしてもビワはそれを許さなかった。ブライアンが一人で

この試練を乗り越えてこそ意味があるのだ。

「でも・・・危険すぎる！もしものことがあったら・・・」

「もしものこと・・・？そんな心配は無用だな。ここで死ぬような男は遅かれ早かれどこかで魔物にやられるからだ。オレは絶対にやつが

戦士の指輪を持ち帰ってくるのを信じている。お前たちも待つているんだ」

ビワはブライアンが自分たちの前に再び姿を現すという確信を持っていた。

一回り成長し、真の勇者に一步近づいた状態でやってくると。

「・・・凄い数の魔物の気配だ。姿は見えないけれどわかる」

これまでにない魔物たちの多さ。魔物の巣も同然の場所なので当然ではあるが。

一斉に襲ってきた場合はどうするか、またどう歩けば体力の消費が少なくて済むか

ブライアンはいつもにも増してよく考えて先に進むことを要求されていた。

「・・・シャアアアア——ツ!!」

「おっ！出たな・・・でも殺気は・・・感じないな。向こうもぼくが怖いのか？」

ブライアンは自分に向かってきたゴーストをあえて無視した。す

るとあちらも

彼を追うようなことはせず、元々自分のいた場所に帰るだけだった。

ブライアンはこの魔物が弱いから無視したのではない。相手の敵意の有無だ。

たとえどんなに弱小な魔物であっても、敵意があるならば打ち倒すつもりだった。

(・・・これでいい。ビワの言う一人での戦いというやり方なら・・・。余計な戦闘は極力避けるべきだ。戦うかそうしないかをすぐに決断すること)

体力、それに魔力の温存になる。その判断力を身につけるといっわけか)

ただ敵を打ち倒し続け経験を積ませるためにこの修行が用意されたわけではない。

まずは自分自身の力の効率的な使い方だ。いかに素晴らしい力を手に入れても

いざというとき気力が尽きてしまったら意味がないからだ。

「頭を使えってことか。さらにこの下も・・・教訓は同じか？」

洞窟に入っただけは地上の魔物と大して変わらない、対処しやすい

魔物たちばかりであったので、ブライアンも『これは頭を使う訓練だ』と

勘違いした。この試練の本番は階段を降り、地下二階に足を踏み入れてからだった。

「・・・グッ・・・これは・・・きつい！」

いきなりドラキーマが大量に飛んでいるところに出くわしてしまう。

ギラを放ってくるものも飛びかかってくるものも逃げていくもの

もいる。

この魔物自体はそこまで強くないが、対処を誤ると数の暴力によつて

倒されてしまうか、疲弊したところを他の力ある魔物に襲われてしまう。

同じようなタイプの魔物、メトロゴーストも体力や力は脅威ではないものの

攻撃をひらひらとかわしていくうえにやはりギラを唱えてくる。

「・・・なるほど、こういうことか。こんな洞窟でこれじゃあ・・・」  
ビワが一人で戦うことを強いた理由の一つがわかった。魔王の影響など

ほとんどなさそうなのこの洞窟ですらこうなのだ。魔王の城では更に激しい

攻撃が待ち構えているだろう。そんな場所にブリザードやアマゾン

を連れていくなんて真似はできない。たとえビワや城の兵士のような

実力者を同行させても魔王の待つ王座まで全員で辿り着けるわけがない。

途中で分断されるか最悪魔物の攻撃に倒れる者も出てくるだろう。

「そして限られた魔力を効果的に使うには・・・薬草は生命線だ」

先の見えない長丁場、ホイミを使ってはいけない。面倒でも回復は薬草を使うべきだ。

魔物たちにラリホーの呪文を使うために魔力は温存する必要がある。先ほどの

弱い魔物の大群も眠らせてしまえばどうということはない。倒すにしても

その場を去るにしてもラリホーが効くのであれば積極的に唱えていくのがいい。

「・・・そもそもドラキーマゴーストもあまり好戦的ではないし倒すのも

あまり気が進まなかったからなあ。それにここで温存できれば……」

邪悪な魔道士が現れたとしても、全力で戦うことができる。危険な相手ではあるが、

先制攻撃をくらわせ、怯んだところを一気に押し切る戦法で完封した。

「タア————ッ!!」

「……グ……」

魔道士はラリホーを使う。少しでも気持ちを緩めてしまうと眠らされてしまい

助けが来るはずもない洞窟の奥深くで罅り殺しにされるだろう。自分の

武器でもあるが敵の武器でもある、危険な魔法であるのだ。

「もっと強い敵がラリホーを使えたらまずいかもな……となると……」  
ブライアンが新たに覚えた呪文、『マホトーン』。敵の呪文を封じ込める。

このマホトーンの使用も相手によつては考えなくてはいけなくなる。

そこまでいくと、やはりホイミを唱えるほどの余裕はないという結論になった。

「おっ……あの宝箱は……!」

中身はビワの言う戦士の指輪だろうか。ついに目的の場所までたどり着いたか。

そう思つて気を緩めたのがまずかったのか、宝箱に手を伸ばしたブライアンの手に

ドロルという化物が噛みついてきた。その鋭い痛みで顔が歪む。

「ぐあっ……!この!」

剣で真つ二つにした。次第にブライアンに食らいついていた牙にも力が

なくなつていき、顔ごと地面に落ちていった。しかし安心するのは

早く、

「この瞬間を待っておったのだ——っ！ギラ——！！」 「死ぬ——！！」

先ほどとは別の魔道士たちがやってきてブライアンにギラを唱えた。

「！！うぐっ……！しかもこいつらにはラリホーが……！」

魔道士たちが次なる呪文の詠唱に入ろうとしている。ここで眠ってしまったら終わりだ。

『勇者ロトの力に目覚めろ。ロトのことを考えるのだ』

「……うおおおおっ！おりゃ——っ！！」

命の危機がやってきたそのとき、白ずくめの剣士ビワの言葉が脳裏に浮かんだ。

勇者ロト……竜王と戦った夜のこと……それを思うと、再び腕のアザが

光ったように見えた。そして身体がそれまでよりずっと軽く動く。気がつくと彼の周りには魔道士やドロルの残骸が転がっていた。

「……これか……。あのときと同じ感覚だ。でもまだ自分のものに

なつたとは言い難いな……。まだまだ修行しなきゃいけないか」

ブライアンは宝箱を開けた。すると中に入っていたのは指輪ではなく首飾りだった。

「なんだこれ？指輪じゃないのか。もう少し探索するか」

それからしばらく洞窟探検を続けるブライアンに、もう魔物が襲ってくることは

なかった。彼が一瞬のうちに魔物の大群を葬った瞬間を見ていた魔物は当然として、

そうでなくとも本人もまだ完全には習得できていない不思議な力

が弱い魔物を

近づけないのか、彼は悠然と指輪を探し出すことができた。そして来た道に戻った。

「・・・むっ！戻ったかブライアン！その様子を見る限り戦闘のコツはそれなりに

掴んだようだが・・・ロトの力を使いこなすにはまだ至らなかったな？」

「驚いた・・・全部あなたの言う通りだ。まあもう少しつてところかな・・・」

「収穫があっただけいいだろう。で・・・例の物は」

洞窟から出てきて早速ブライアンはビワに戦士の指輪を見せた。それといっしょに

謎の首飾りもビワの目の前に出した。

「おお、合格だ！指輪は記念に持っているといい。そっちの首飾りはなんだ・・・？」

まあいい、それもお前のものだ。両方身につけてみてもいいのでは？」

首飾りに関してはビワもわかっていないようだ。ブライアンが両方とも手にした。

しかし彼は指輪にも首飾りにも興味はなさそうだ。装備しようとはしない。

「生憎だけどぼくはこんなものを身につけるキザな趣味はないんでね。

あなたもいららないというのならどこかの店で売って旅の資金の足しにするよ」

まとめて薬草の入った袋に放り込もうとする。するとアマゾンが彼に近づいた。

「・・・いらぬなら・・・私に・・・その指輪のほうはもらえんっ」

「ん？ああ、いいよ。しかし物好きだな。あまりいい見た目してないぞ、こいつは」

ブライアンの言うように、戦士の指輪というだけあり女性が好むようないな

指輪ではない。それでもアマゾンが彼からそれを受け取ると、すぐに自らの

左手の薬指につけて、愛おしそうに眺めているのだった。

「そんなに気に入ったのか？よかった。その指輪も喜ぶだろう」

ブリザードは彼らのやり取りを見ていた。アマゾンがその指輪を欲したのは

どうしてなのかわかっていた。戦士の指輪そのものが理由ではない。

誰から受け取るかが大事だったのだ。

(ブライアンさん……！どうしてわからねえかなア……！だがこいつもなかなか

いい女ではあるがラダトームにはローラ姫が……。あまり俺が口出ししない

ほうがいいか。この人はほんとうにこういうところ鈍いからな……ん？)

ブリザードはブライアンがまだ持っていた首飾りが目に入った。少し距離がある

場所からでもその首飾りはなかなかの品だということが見て取れる。

「なら俺も……そっちの首飾りをいただきます！ブライアンさんが命を賭して

手に入れた勲章、売っちゃうのは惜しい！俺が生涯身につけて……ブライアンから受け取るとすぐに首にかけようとした。しかしそ

の直前で、

「……あつ!?い、これは!?うわわっ!!」

大声を発して首輪を放り投げる。そしてそのまま腰砕けのように地面に座り込んだ。

いきなりどうしたんだと他の三人が彼の顔を覗き込むが、ブリザードは大声で、

「あ……危ねえところだった！ブライアンさん、あんたが持ってきたそいつは……」

『死の首飾り』だ！あとほんのちよつとでかけちまうところだったぜ！」

「死の首飾り……？何だそれ。確かに嫌な響きだ。呪われてそうだ」「ああ……昔の巻き物で見たに過ぎねえが、身につけたが最後、その首を

しめつけて窒息するまで外れねえんだと！まさに死の首飾りなんだ！

「確かなことはわからないが……俺は試してみたくなんかないぜ！」  
「……オレも嫌だな。そんなことに命を賭けるくらいだったらもつと他に命の

使い道はあるからな。しかし素材だけは無駄に高級だ。やはり売ってしまおう。

きつと高値で買い取ってもらえるだろうからな。ははは、しかし危なかったな」

ビワは笑い始めたが、彼に装備するように勧められたブライアン、そしてまさに

首にかける寸前だったブリザードは冷や汗ばかりが流れ出た。一方アマゾン

はまだに指輪を見ながらうっとりとしていた。岩山の洞窟の入り口、他に人の気配など

ないその場所で、それぞれが全く異なった感情を露わにしていた。



## アレフガルドの若大将 (ドムドローラ①)

岩山の洞窟での修行を終えた後もブライアンたちは訓練を続けていた。ブライアン

だけではなく、彼を修行の道に導いたビワも、ブライアンと共にラダトームから

やってきたブリザードとアマゾンも、レベルアップに励んでいた。

「なあビワさんよ！確かに俺たちみんなラダトームを出たときよりずっと

強くなった気がする。そこはあんたに感謝するがもういいんじゃないか？

竜王の野郎もそろそろ全快しちまうはずだ。その前に叩いたほうが・・・」

ブリザードが気になっていたことを尋ねる。しかしビワはその提案を却下する。

「いや・・・まだ駄目だ。竜王には二人の息子、そして精鋭の側近たちが

いると言われている。今の実力で竜王の城に乗り込んだとしても

やつの待つ王座まで辿り着けまい。そいつらを倒せないからな・・・」

「二人の息子・・・ローラ姫が言っていたな。竜王には人の姿をした娘もいると」

「ああ。準備は万全にしておかねばいけない。とはいえあまり悠長なことを

言っていられないのも確かだ。竜王はまたラダトームを襲ってくるだろう。

それまでにはこちらからやつらを倒しに向かわねばならない。よし、

明日からは修行のやり方を変える。とりあえず今日は早めに切り上げて・・・」

これまでの疲れを癒し、そして明日からの更なる修行に備え、英気を養うための

絶好の場所といえば・・・あの村しかなかった。

「やっぱりマイラの温泉は最高だ！疲れの取れ方が全く違う！」

「そりゃあ野宿のときの単なる水浴びと比べればな。今のうちに堪能しておけ。」

明日からはまた長い旅になるのだからな」

マイラの村、その天然温泉でライオンたちは身も心も温まっていた。

男三人、それまでの特訓の時間とは違い和やかで弛緩した雰囲気だった。

そして一度温泉から上がり、服を着て食事に向かおうとすると、ブライアンが

以前訪れたときにも声をかけられたあの女性が今回もいた。

「あら、ステキなお兄さんたち。パフパフしていかない？今なら三人で・・・」

ってあら、あなたはちよつと前の・・・また一段と男を磨いたわね」

「そういうきみは・・・きみも元気そうだな」

「そうでもないわ。最近ますますこの村に来るお客さんも減ってるのよ。」

でも別にまだお金には困ってないし、ちよつと寂しいだけ。だからお願い。

前にも言ったけどお金なんかとらないからアタシの部屋に来ない？

人助けのつもりで・・・ねえいいでしょ？」

「・・・困ったな。そう言われると弱いんだよなあ・・・」

人のいいブライアンは女性に押し切られそうになっていた。この感じなら

彼を連れていけるだろうと女性も手ごたえを感じていたが、突然悪

寒が走った。

「……………」

「……ひっ!?!」

このやり取りを離れた壁の影からアマゾンが見ていた。睨みつける目つきは

まさに狂犬のようで、女性がブライアンの誘惑に成功した瞬間彼女は

何をしてくることか……。実際には何もされないかもしれないが怖くなり、

「……い、いや、やっぱりいいわ!また今度、つてことで……」

「そうか……まあそれならそれで……」

パフパフ屋の女性はブライアンを解放した。すると女性のもとにブリザードが来て、

「残念だったなあんだ。だがそういうことなら俺があんたの寂しさを満たしてやるぜ?」

「……あんたは50ゴールド、ちゃんと取るからね」

「うがっ!やっぱりそうくるか……つて50!?!値上げしたのか!」

「客が減っちゃったから仕方ないのよ。で、どうするの?」

しぶしぶではあったがブリザードは50ゴールドを支払った。別に異性に飢えていた

わけではなかったが、ここで買い支えないとこの女性もそのうち食べたいけなくなるし

パフパフ屋も潰れてしまう。ブリザードもお人好しなせいでパフパフのサービスを

それなりの金額を払って受けることになってしまったのだ。

「ただいま……ブリザードはしばらく戻らないと思うけど」

「そうか……まあいい、せっかく久々の人里での休養なんだ、好きにさせてやれ」

ブライアンがアマゾンと合流し宿に戻ると、ビワは一人で酒を飲んでいた。

白髪で色白、着ている服も白のものばかりの彼の顔は酒の影響で僅かに赤かった。

今ならこれまでいくら尋ねても得られなかった答えが得られるのでは、と

ブライアンは考え、ビワの対面に座ると自分も容器に酒を注ぎながら話を始めた。

「・・・あなたはどうしてぼくたちの仲間となり力を貸してくれるんだ？しかも

何の見返りも求めず。最終的な目的はどこにある？」

「フ・・・お前と同じだよ。どこにでもある話さ。俺も家族を魔物に殺された。

だからその元凶・・・光の玉を奪い魔物たちを凶暴化させた竜王を倒す。

願いはそれだけだ。そのために必要な力を持つお前を鍛えているのだ」

「いや、それだけならラダトームの兵になればいいじゃないか。そのほうが

近道だしお金も貰える。どうしてそうしないんだ？」

ブライアンの質問にビワは少し黙ったが、別にいいだろうと思ったのか答えた。

「・・・ラダトームは腐敗している。この世の平和より自分たちの権力を守るのに

躍起になっている。そのためにお前は二回も旅立ちを命じられたではないか。

魔物絡みではない問題も全く解決しようとすらしらない。民からかき集めた

税金で己の肥えた腹を更に豚のようにしている。そんな国の兵士に

なるなどオレは受け入れられない。あの町や城には近づきたくもない」

「……そうか。まあ考え方は人それぞれだ、何も言わないよ」  
「だが……お前のような者が王となればラダトームは、アレフガルドは

大きく変わるだろう。あのブリザードも似たようなことを言っていたが、

竜王を倒したら次は王家を……いや、それは冗談だ。まあ、お前

が

王ならもつと国民も満たされた生活が送れるということだ」  
冗談と言っているが目は本気だ。ラルス家の統治を終わらせる気なのだ。

「……ラダトームを崩壊させる気か？そんなことは許さないぞ」

「いや、崩壊はさせない。オレは本心ではあの町も城も大好きだ。だからこそこのまま衰退していくのを見ていられない。お前のよう

うな  
誠実で素晴らしい男が……ラダトームの再興を……王家復活を……」

の  
酒の量が多かったか、ビワはそのまま眠ってしまった。酒が入って

ち  
言葉だったのでどこまでが真実でどこまでが本気なのかはいまい

判断に困ったが、ブライアンをロトの子孫としてだけではなく人間として、男として高く評価してくれているのはわかった。

「ふふふ……普段はなかなか喋らないけどお酒が入ると饒舌ね。

私じゃとても運べないからブライアン、ベッドまで連れていってくれない？」

「ああ、わかったよ。明日は早いしお前もそろそろ……」

ブライアンはそのときのアマゾンの姿に一瞬どきつとした。香油

で光る

長い黒髪に頬の赤い横顔、僅かに開いている胸元……。

「……?どうかしたの?」

「いや、何でもないさ。よいしょっと……じゃあこの人を寝室へ連れていくよ」

ローラ姫とはまた違うアマゾンの魅力。これまで全く意識していなかったが、

彼女もまた美しい女性だ。チトセ王が襲いかかるのも無理はない。

「……ぼくも酔っぱらってるんだな。明日になればきつと元通りさ。寝よう」

しばらくしてブリザードが宿に帰ると、すでに三人ともそれぞれの部屋で眠っていた。

明日からの長旅に備えた僅かな休息のひと時はあつという間に過ぎてしまった。

翌日、ビワはすぐにキメラの翼を空高く放り、四人はラダトームへ戻ってきた。

とはいってもラダトームの町へは帰らない。彼らの次なる目的地はつい最近

魔物に滅ぼされたという、ラダトームの南西にある『ドムドローラ』の跡地だった。

「随分歩くことになりそうだな。また野宿の日々か……何のために滅びの町へ?」

「フム……そのドムドローラにあるという、とある鎧に用がある。その鎧は

『ロトの鎧』と呼ばれ……勇者ロトの子孫、それも精霊ルビスに認められる力ある選ばれた者のみが身につけることのできるこの世で

最強の鎧だ。ブライアン、お前はその鎧を手に入れなければならぬ

い」

勇者ロトが自らの武器と防具を後代に残そうとしていたのかは不明だ。

しかし彼の用いていたそれらはいまもアレフガルドのどこかに眠っているらしい。

「ロトの剣は竜王軍に奪われてしまった。手に入れることはできないだろう。

そして盾は残念ながら全く噂すら聞かないほどだ。もうどこか遠くへ

持ち去られたかなくなってしまったか……。よって鎧だけでも回収して竜王に対抗できる用意をするのだ。さあ歩くぞ！」

「そういや長い伝統を誇る道具屋があつたな、あの町は。ありえるぜ」

ラダトームから数日間の徒歩の旅をして、途中強力な魔物が潜む荒野で

野宿をしながらでも向かう価値があるドムドロー。勇者ロトの鎧とは

どのようなものか……。四人の期待は日に日に高まっていった。

「これで大したモンじゃなかったらとんだ無駄足だぜ！あの強敵『死霊の騎士』より

もっと強い『影の騎士』なんてやつもいりやあ『メイジキメラ』もヤバイ！

いや……。その前に水が尽きて勝手にくたばっちゃうかもしれないぜ！」

「しかしそのぶんお前も鍛えられたからよいではないか。この辺りの魔物は

確かに強いが少なくとも一対一で勝てるようになればな。

水はまあ大丈夫だろう。オアシスがあるのは確認済みだからな……」

ラダトームの兵もこちらのほうまでは手が回りきらず、ドムドローや他の小さな

町村の陥落を阻止できなかった。そして魔物たちの勢力が増しつつある。

ブリザードも魔物たちを相手にするのがだんだん一苦労になっていた。

そのうえ灼熱の砂漠がこれまで以上に体力を奪ってくる。

「昨日の夜の話を蒸し返したくはないが、これもやはり王族の責任なのだ。

民衆からの税金は必要以上に集めたというのに正しい使い方をしなかった。

民の血を飲み肉を喰らうやつらは多くの人の住む地を見殺しにしたのだ。

ブライアン、当たり前だがお前は悪くない。全ては王族と貴族どもだ」

ビワは語気を強めた。ラダトームの城の一室で暮らしているブライアンには

決して聞こえのいい話題ではなかったが、すべてを否定できないのも事実だった。

王ラルス16世、家族を失った幼いブライアンを育て、そして竜王の襲撃の際、

その身を犠牲にしてブライアンを救ってくれたあの偉大な王すら腐敗を

一掃することはできなかった。それらはゆっくりと王国を衰退させ、

その行く末は結局滅ぼされた都市と同じ、人の住まぬ廃墟となるだけだ。

「・・・まあこの先もよくはないでしょうね。ローラ姫ならまだしも

あのバカ・・・チトセ王じゃあ下手したらあと数十年で終わりね。

どう考えても自分のためにお金を使うだろうし・・・あら、銀色のスライム！」



「ほんとうだ。こいつは珍しいや。どれどれ・・・あつ、逃げた」

『メタルスライム』は自慢の素早さを生かしあつという間に逃げてしまった。

この魔物を初めて見たブライアンたちは、これは臆病な魔物なのかと思っていたが、

「・・・うーむ・・・何かおかしいな。確かにこいつは人間の目ではその動きを見切れないほどの魔物だが・・・この逃げ方は・・・？」  
ビワは首をかしげていた。原因を考えようとしたが、それは大きな声にかき消された。

「おおっ！やったぜ、三人とも！ドムドーラの跡地が見えてきた！魔物に

滅ぼされた町だ、ゆつくり休めはしねえだろうが一息つけるぜ！」  
ついに数日間の旅の目的地が目の前に現れたのだ。ブリザードは大喜びで

駆けだそうとするが、その彼をブライアン、そしてビワが二人で制止した。

「・・・ど、どうしたんだ！さっさとロトの鎧を探しに・・・」

「・・・お前とアマゾンとは下がっている。砂漠のほうはまだ安全だ」

「ああ・・・この人の言う通り、あの廃墟からは禍々しい気配がする」

ブライアンとビワが先頭に立ち、ブリザードとアマゾンはその後ろから

注意しながらついていく。ドムドーラに足を踏み入れると、警戒すべき

理由がよくわかった。人間にとっての滅びの町は、魔物にとっての楽園だった。

「・・・あいつは沼地の洞窟にいやがったドラゴン・・・しかも何匹もいやがる！」

「それだけではない。キメラ族で最も危険な『スターキメラ』も、凶暴な獣人

『キラールリカント』もいる。ブライアン、ラリホーの準備をしておけよ。

まともに戦うと大怪我を負うが寝かせてしまえばどうってことはない。

オレたちの現在の目的は狩りではなくあくまでロトの鎧の入手だからな」

町の外よりも危険な魔物たちが徘徊している。確かに警戒は怠れない。

しかしブライアンにはこの魔物たちの様子から違和感を感じた。

「・・・おかしい。全然襲ってこないじゃないか。恐れている・・・ぼくたちに？」

「いや・・・違う。さっきのメタルスライムもそうだった。こいつらは何かに怯えている！おお、あれを見ろ！魔物たちが・・・！」

ビワが指さした先では、なんと大勢の魔物たちが逃げ出していた。もちろん

ブライアンたちから・・・ではない。そこにいたのは・・・。

「・・・・・・・・グシュ・・・ギュシュ・・・クワアアア・・・・・・・・」

全身を漆黒の鎧に包んだ、周囲の魔物の数倍も悪のオーラに満たされた悪魔だ。

一体何をしているのか恐る恐る近づくと、衝撃的な光景がそこにはあった。

彼らはその場に立ちすくみ、ブライアンは咄嗟にアマゾンの目を手で覆った。

「・・・・・・・・な、なに!?何があるっていうの!?!」

「あ・・・あなたは絶対に見るな!ブライアンさんの後ろにいる!

俺もできることなら見たくはなかったぜ!・・・何だこいつは!?!」

その魔物、『悪魔の騎士』は食事をしていた。すでに腐乱していた人間の肉を

貪り、骨も構わずに噛み砕きながら顔の周りを赤と黒の異様な色で染めていた。

「もうかなり前のことだ、この町が滅ぼされたのは。いまだに血の匂いで

満ちていたのはこいつのせいか！しかもこいつ、人の死体だけじゃなく……！」

なんと、魔物までも生きながらに喰らっていた。さそりだろうがドラゴンだろうが

人の姿をした魔物だろうが関係はない。その食べ残し、残骸が散らばっていた。

「魔物すら怯えて逃げていたのはこのためだったのか！なんてバケモノだ！」

相手が誰であろうと打ち倒し、肉を喰らい骨まで舐めつくす常軌を逸した敵。

その悪魔がどうやらブライアンたちに気がついたようだ。生きのいい獲物が

やってきたことに醜悪な呼気を吐き出した。

「グフウ~~~~~~~~ハッハア~~~~~~~~」

どんな行動に出てくるかわからないぶん竜王以上に危ない相手かもしれない。

ところがビワはブライアンに対し、誰もが耳を疑う言葉を投げかけた。

「……やはりロトの鎧は楽に手に入る代物ではないか。ブライアン！

ロトの力を手に入れるための試練だぞ。あの魔物を一人で倒せ！やつとの戦いにより、お前はいつそうロトの血に目覚めるだろう

！」

ブライアンは何も言わず頷き、一人で前へ出た。彼もまたやる気なのだ。

悪魔の騎士はそれを見て戦闘の構えをとる。この死の町で、新たに積み重ねられる死骸となるのは果たしてどちらか・・・死闘の幕開けだ。

## 光へ進む者（ドムドローラ②）

ブライアンはたった一人でドムドローラの町の邪悪な魔物、悪魔の騎士との戦いに

挑む覚悟を決めた。剣士ビワの言葉でこの一騎打ちが始まることになったが、

当然ブリザードは受け入れられるわけもなく、ビワに対して声を荒げた。

「おい！てめえ正気か!?ドラゴンどもが逃げ出すような魔物なんだぞ!?

俺たち四人がかりでようやく勝てそうな相手にブライアンさん一人だと！

何が修行だ、何がロトの力だ！死んだら虫のクソ以下の価値しかねえだろうが！」

「確かにやつは強い。しかし竜王よりは弱いだろう。やつを一人で倒せなければ

所詮これまでの努力は虫のクソ以下だったということだ。それにお前が

助けに行つたところで何になる？逆にお前をかばうためにブライアンの足が止まる」

ビワは全くやり方を変える様子はない。そしてアマゾンもそれに続いた。

「・・・癩だけれど言うとおりね・・・私たちが邪魔になるだけよ。信じましょう。あんなのに負けてたら竜王城へ行くのは無理よ」

「まあ・・・そうだよな。そうなんだが・・・くそ！ブライアンさん！」

ずっと睨み合っていたブライアンと悪魔の騎士。先に動いたのは血に飢えた悪魔だ。

「グルルル・・・グオアラ——ツ!!!」

「・・・やつぱりな。欲望のままに生きるお前は堪えきれないと思って

いた。

ぼくはもともと攻撃を受け流して隙だらけの胴体を斬りつけるつもりだった!」

悪魔の騎士が大きな斧で振りかぶってくる。鋼鉄の剣で振り払い、怪力の魔物の

武器をその手から落とすことができれば最高だ。そこまですきなかつたと

しても、隙をつくれさえすれば十分だった。ところが狙いは外れ、「ゴオオオオオオオオオ」

「・・・なんて力だ・・・!お、押し負ける・・・!!」

ブライアンは力負けし、斧で斬られこそしなかったが地面に倒れ込んだ。

「グアッヒャ——ッ!!」

「・・・!!」

その後も追撃を続ける悪魔の騎士の攻撃を避けるのにいっぱいいっぱい。

斧での一振りを躲すのに気をとられているせいで、凶暴な悪魔の更なる

攻撃を予想できていなかった。この町は瓦礫が散乱している。岩や煉瓦を

次から次へとブライアンめがけて投げつけてきた。形も大きさもばらばらで、

そのうちの尖ったものが脇腹をえぐり、大きな岩石が頭部を襲った。

「・・・ぐあっ・・・!!」

「ギヤアハハハハハハアアアアアアアア」

勝ち誇っているのか、それとももうすぐ生きのいい肉にありつけるからか・・・。

その表情は顔面を覆う兜のせいでわからないが、気分の悪くなるよ  
うな

笑い声が廃墟の町にこだまする。傷つくブライアンの姿も痛々し

く、

「・・・もう見てられねえ！俺は助けに行くぞ！たとえ身代わりだろうが・・・」

ブリザードが戦いに加わろうとした。それでもビワは彼を抑えつけた。

「二人で戦わせろと言っただろう！余計な手出しはするな！」

「いい加減にしがれ！最初から怪しいと思ったんだ！やっぱりめえは

ブライアンさんを消すために竜王の送り込んだ新たな魔物カラダトームの

王族の刺客だったんじゃないやねえか!?危険な目にばかり遭わせやがって！

くそ！ブライアンさんに何かあったら俺はてめえを殺す！」

「・・・・・・・・ロトの子孫として・・・力に目覚めなければならないのだ。

そのために乗り越えなければならぬ試練・・・わかってくれ」

アマゾンにはビワが血が滲み出るほど拳を握りしめているのを目にした。

彼も本心ではすぐにブライアンを助けに行きたいのを何とか我慢している。

竜王を倒すために、最終的にそれがブライアンの命を救うことになるために・・・。

(・・・やっぱりこの人・・・ブライアンのことを大事に思ってる。

マイラでお酒を飲んでいたときにもそんな感じはしたけれど・・・) 肩を震わせながら己を制そうとするビワの腕に自然と注目してしまふ。

彼は何者なのか。なぜそれまで面識のないブライアンに対しこれほどの

思いを抱いているのか。謎だらけのビワという男に関する疑問は

増えていく一方だったが、その彼を見続けているうちにアマゾンは気づいた。

「・・・あら？あの人の腕・・・アザかしらあれは？でもりっぱな紋章にも

見える。自分で書いたみたいな、でも人が手を加えたものには思えない。

それにあれはどこかで見たような・・・？」

彼女が思い出しそうになった瞬間、大きな轟音にかき消された。悪魔の騎士の

見境ない破壊的な攻撃が町の残骸を更に崩壊させているのだ。傷つきながらも

その攻撃を回避し続けているブライアン。ようやく勝利への道が見えてきた。

(だいぶ動きがわかってきた。これなら次にでも反撃が・・・)

しかし強敵である悪魔の騎士はブライアンの予想をはるかに超えていた。

ブライアンの目が自らの攻撃に慣れてきたことを本能的に察したのか、

動きを止めると、呪文の詠唱を始めたのだ。それはブライアンが常に

警戒していた、しかしこの魔物に限ってまさかないだろうと思っていた、

「・・・ラリホー・・・ラアリホー・・・」

「・・・しまった！ぐ・・・だ、だめだ・・・」

意識が薄れていく。ここで眠ればもう二度と目を覚ませないだろう。

倒れゆく彼を見てついにビワですら戦いに介入しようかとしていたそのときだった。

ブライアンの身体、正確にはその右腕の口トの子孫であることを証



しする印から

光が放たれ始めた。ブライアンは眠る寸前で抵抗を続けていた。

(・・・こいつがきつとドムドローの人たちを大勢・・・それに加え・・・！)

目の前の悪魔は好戦的ではない魔物たちの平穏な生活すら破壊していた。

人と魔物、全ての敵を前に、ブライアンが思い出したのは彼が少年のとき、

いまだにその正体のわからない女の子の語った言葉だった。

『いまは人と魔物が争って命を奪いあう悲しい世界。だけどいつか仲よくなつて

互いに手をつなげるときがきたら・・・』

彼女は人間だけでなく魔物も平和に暮らし、互いに助け合って生きていける

世界を望んでいた。こんな悪魔がいてはそのための全てが閉ざされる。

自分だけではない、ラダトームの人間だけでもない。アレフガルドじゅうの

全ての生きる魂のために悪魔の騎士を討つ！彼の心が熱く燃え盛ったとき、

光は輝きを増し、町中がその光に満たされていった。

「・・・あの光は・・・!?ブライアンにいったい何が起きたの!?!」

「俺は見たことがあるぜ！竜王が城を襲ったとき、もうだめだと思つた

まさにそこで、だ！ブライアンさんはいまみたいに・・・そうか！こいつが!」

「ああ。ついにあいつ、ロトの力を自分のものにしたようだな。まだ使える時間は

短いだろうが一分もあれば問題ないだろう!」

それこそがロトの力だった。ブライアンに流れるロトの血が目覚めたのだ。

まずは文字通り目覚めるために眠りの呪文への対抗として……。

「ぐ……うおおおおおっ!!」

「ブライアン!?あなた……!」

なんと鋼鉄の剣を己の足に突き刺した。そして引き抜く。その激しい痛み

眠りへの誘惑からは解放された。強引、しかしこれ以上ない対抗策だった。

「……ガ……ガアア?」

「おおおおおっ!!血と肉に飢えた卑しい悪魔よ!永遠に滅べ——っ!!!」

ラリホーが破られたことで戸惑っていた悪魔の騎士に立て直しの間も与えず、

ブライアンは光に満たされたままその胴体に渾身の一撃を叩きこんだ。

竜王にすら重傷を与えたのだ。この悪魔が耐えきれぬわけもな  
く……。

「……ゴ……ゴオオオオバアアアアアアアアアア……」

身体の中から張り裂け、まだ原形を留めていた家屋の壁に激しく  
激突させられると、

鎧ごと粉々になった。壁のほうも衝撃に耐えられず崩れ落ち、もは  
や悪魔の騎士の

原形はわからなくなってしまうた。すでに役立たずの瓦礫の一部  
となったからだ。

一方のブライアンはだんだんと全身を包む光が消えていったが、前  
回とは違い

倒れてしまうことはなくしつかりと立ち、悪魔の最期を見届けてい

た。

彼のその姿こそが、この戦いの完全勝利を物語っていた。

「よっしゃあー！勝った！ブライアンさん、あんたほんとうに最高だぜ——っ!!」

勝者を称えるようにブリザード、そしてアマゾンも彼のもとへ走り出す。しかし、

「……待て！お前たち油断するな！周りを見ろ、あの悪魔が死んだ今……！」

ビワの言葉にブライアンたちは勝利の興奮もすぐに醒めた。暴虐の悪魔の騎士から

逃げ去っていた魔物たちがいつの間にか戻ってきていた。その数は優に百を超える。

「ちっ……こいつはまずいな。ブライアン！すぐに剣を構えろ……」  
ここでビワは魔物たちの様子がおかしいことに気がつく。戦おうとはしていない。

どうやらブライアンたちを敵としてではなく、憎き怪物を葬り去った英雄として見ている。

「おお……これが……これこそがロトの力の本質か！戦わずとも道を切り開く、

光へと進む道を見いだしてしまう……！ここまでとはオレですら読めなかった！」

ブライアンの思いが通じたのか、それともブライアンが魔物たちの思いを正確に

読み取っていたのか、彼らは襲ってこなかった。しばらくすると町の外で

見かけたメタルスライムが戻ってきた。この魔物も悪魔の騎士の滅びを

祝っているようで、その小さな全身を使ってそれを表現しているかのようだ。

何回もその場で高く高く飛び跳ね、躍動している。

「あの子もとっても嬉しそう。ちょっと近づいてみようかしら…… あっ！」

アマゾンがメタルスライムに近づくと、やはり臆病なのか素早く逃げてしまった。

だが少しでも移動したにすぎず、改めて彼女が迫ってきてても今度はそのまま

彼女に触られることを拒みはしなかった。むしろ喜んでいる。

「わあ……固いわ。見た目はスライムなのにこんなに違うなんて」

「やっぱり変なスライムだぜ。飛び跳ねていたと思ったら逃げて、でも

もう一度近づいたら何事もなかったかのようにしてやがる」

メタルスライムはその後も先ほどまでジャンプしていた地点を見つめていた。

その姿に、ブライアンとビワは全く同じ瞬間に閃いた。

「……もしかするとあのスライムはただ喜んでいただけではなく」

「我々に何かを教えてくれていたのだ！ブライアン、確かめてみるぞ」

そこは舗装された道などではない、ただの草むらだった。毒の沼地が

広がっているので注意しながらその場所を掘り返してみた。すると

宝箱よりも数倍大きな箱が出てきて、そのなかからは期待通りのものが出てきた。

「……………鎧だ！これが……………ロトの鎧なのか！」

「全く汚れておらず損傷もない……………身につけてみる、ブライアン」

ブライアンは三人が、加えて魔物たちも見守る前でロトの鎧を装備した。

頭部も保護されている全身を覆う鉄壁の鎧だ。問題はこの鎧のせいで機動力が

落ちてしまうのではというところにあっただが、それは要らない心配だった。

「おお・・・凄いや、この鎧は！こんなに厚手なのに全く重さを感じない！

逆にどんどん傷が癒され気力に満たされていくようだ・・・！」

「しかも大きさピッタリ！まさにブライアンのためにあるかのような鎧だわ！」

町の魔物たちから大歓声が沸き上がる。真の勇者は種族を超えて愛されるようだ。

「・・・よし、ならばこのままこの先の町『メルキド』に向かおう。その町で

剣と盾を新調したら・・・いよいよ竜王の城に乗り込もう」

ビワが決戦のときが近いことを告げると、ブライアンの表情はいつそう引き締まった。

剣や盾の在処がわからない以上、ロトの遺産はこの鎧だけだ。身体じゆうに

力が溢れるのを感じながら、ブライアンは仲間たちとドムドローを後にした。

「・・・そうか、あの男がロトの鎧を手に入れたか」

「はっ・・・。いかが致しましょうか・・・竜王様」

竜王の城。ブライアンがロトの鎧を手に入れたことはすぐに竜王の耳に届いた。

竜王の左右には父そっくりの風貌をした彼の息子二人がいたが、その報告をした

魔物に対して足並みを揃えて迫った。

「馬鹿者が！なぜやつらが鎧を持っていくのをみすみす許したのだ！

己の命が惜しくて逃げ帰ってきたというのか！」

「い……いえ！そのようなことはございませぬ！そもそも私が目撃した

わけではないのですから！私はただの報告係ではありませんか！」

「言い訳は無用だ！ならばその目撃した者どもをここにすぐに連れて来い！」

それができねばお前を処刑する！逃げたらお前の一族を全員処刑するっ!!」

その魔物は絶望が待ち受けていることに震えていたが、救いは意外なところからきた。

「……もういい、息子たちよ、そこまでにせよ」

「ち……父上！しかし……」

「いいから黙っている。さあ、頭を上げるのだ。お前に落ち度は何も

ない。  
息子たちの言うようなことは何も起こらない。平安のうちに帰る  
がいい」

竜王が二人の息子を制し、魔物を安心させてからこの場を去らせた。

そして息子たちへ厳しい視線を向ける。行き過ぎた行為を咎める  
かのように。

「何をそんなに躍起になっていたのだ？やつがロトの鎧を手に入れた  
からといって

それが果たして何だというのだ？取り返しのつかないことのように  
に喚いていたが」

「……父上！やつは勇者ロトの遺物を手に入れこれから更に力を増し  
加えるのは必至！」

「しかもあなたはまだお身体が完全に回復してはおられない！自ら潰

しに向かうことも

難しい状況で・・・なぜそこまで落ち着いていられるのですか!？」  
竜王と息子たちの間で危機感にかなりの温度差があった。端から  
聞いている者に

とつても正しいのは息子たちの考えであり、竜王には慢心があるの  
ではないかと

思わされたが、竜王はにやりと笑い、彼らの不安を一蹴した。

「案ずるな。すでに手は打っている。わたしの下僕のなかで最も力あ  
る二人を

やつらの潜む町へと遣わした。事はすでに終わっているも同然だ」

「え!?ええっ・・・!?あの二人を・・・ですか」

「そ、それならば確かに全く問題はございません!」

「フ・・・唯一の問題があるとすればやつらがドムドーラ以上にその町  
を

徹底的に破壊し尽してしまうことだ。人の生きていた証も残るま  
い」

竜王が絶対の信頼を置き、魔族の誰からも怖れられる実力を持つ二  
体の魔物。

彼らとブライアンたちの決戦の日はすぐそこまで迫っていた。

## 俺は海の子（メルキド）

勇者口トは『上の世界』と呼ばれる別の世界から現れたと言われている。今はその世に

行く術がないため確かめることは不可能だが、当時はそれができたという文献もある。

大魔王ゾーマに対抗することができなかったアレフガルドのために、精霊ルビスが

別世界から勇者を遣わし、このアレフガルドを救ったのだ。救いは上からもたらされた。

しかし、上からのもののなかには光だけでなく闇もあった。それが竜王だ。

まだ上と下の境界が完全に閉じてしまう前に一つの卵がアレフガルドに落ちてきた。

彼の母はその命と引き換えに卵を産み力尽きたのであるが、親を失い己を知る者も

誰もいない世界に生を受けて彼が無意識のうちに最初にしたこと、それは

主を失った魔の島に向かうことだった。はじめは目立った動きを見せなかったが、

彼の内に秘められていた王としての血か、それとも魔の島の瘴気か……。

やがて密かに戦力を整え、機が熟したとみるやラダトームから光の玉を奪い

アレフガルドの、やがてはこの世界全ての王となるべく魔王となった。

彼は自らのことを『マンノウォー』（戦争に行った男）と名乗った。その名の通り、

アレフガルドの数百年続いた平和な時代を、この男が全て変えたのだ。



ドムドローラからまたしばらく砂漠を歩いた後にブライアンたちがたどり着いた

要塞都市メルキド。ただでさえラダトーム以上の防備であるのに、町の入口には

更にこの町の守りを完璧なものとする存在が鎮座していた。

「あいつが噂のゴーレムか！メルキドの住人が魔物に対抗するために用意した！」

「なんか俺たちのことも敵みたいな目で見てきやがるぜ。知能はないみてえだな」

竜王軍ですらこの町を攻め落とすことはできていない。それだけ巨大な煉瓦人形

ゴーレムが鉄壁の守りを誇っているということだ。しかし対処法はあった。

「マイラの村で手に入れたこの笛で・・・眠らせたら大丈夫っていうのか？」

オレは何も知らないというのにお前がそれを知っているというのは？」

「ああ。あのパフパフ屋の女が教えてくれた。メルキドから来た客がこぼしたから

確かなことらしい。50ゴールド払ったかいがあったってmondぜ、さあ！」

ブリザードはブライアンに笛を手渡す。『妖精の笛』と呼ばれる笛の音色は

そこらじゅうにある笛とは全く違う。神秘的な音がゴーレムを眠りに誘った。

「・・・見事な腕前だな。ブライアン、お前は歌うのも得意だしこの道で

食っていけるんじゃないか？・・・まあその話はいまはいいとして、町に入るぞ。こいつはこのままにしていこう」

「そうね。壊しちゃったらこの町が危ないし、これでいいのね」

「ゴーレムを破壊することはせずにメルキドの町へ入った。危険から」

「守られているため商業が盛んで、数多くの店が並んでいた。ブライアンたちが」

「この町を訪れた理由も、竜王城に向かう前に最後の品そろえをするためだった。」

「まずはいつものように宿に入り、部屋を人数分確保してからじっくり買物だ。」

「・・・しかし高いな。一人1000ゴールドだと？ぼったくりじゃねえか」

「そのぶん安全は保障されてるってことだろ。安眠できる場所は少ないし。」

「だけど確かに高いな。まあ仕方ないか。まずは武器と防具を・・・」

ブライアンが買い物に向かうため外に出た。ブリザードが後に続き、ビワも

更についていこうとしたが、そのビワをアマゾンが呼びとめた。

「・・・ちよつといいかしら。あなたに二人きりで言いたいことがある・・・」

「ん・・・？あ、ああ。構わないが・・・ブリザード、先に行っているくれ」

不思議に思いながらもビワは了承する。ブリザードはアマゾンの耳元で囁く。

「何だア？ブライアンさん一筋みたいなのをしながらビワの旦那に鞍替えか？」

「もしそうだったらとんだ尻軽女だぜ・・・」

「いいから早く行きなさい。もつとも、あなたの思っているような話じゃないけどね」

ブライアンとブリザードが出ていくのを見届けてからアマゾンは

椅子に座った。

ビワは別に緊張する素振りもなく、サービスとして置かれている酒を用意していた。

「うーむ．．．要塞都市はいいとしてやはり海が見えないと景色はつまらないな。

ところでどうしたんだ。オレに用があるなんて。どういうわけなんだ？」

「．．．．．あなたに関して、かしらね。私は見てしまったのよ。あなたの腕！

その紋章のようなアザ．．．ブライアンのものとそっくりだと思っ  
てね」

ビワの顔色が変わった。酒瓶を一度手から放し、アマゾンのほうを  
じつと見た。

「あなたはブライアンのことを大事に思っている。一体あなたは．．．  
「．．．．．フツ．．．そうか、案外ばれているものだな。しかしい  
つ？」

ここまで来て隠すつもりもないということか。とはいえ理由は気  
になったようだ。

「．．．あなたがドムドローラで拳を握っていたときたまたま目に入った  
のよ。

それに確証はなかったけど．．．最初からあなたはブライアンとど  
こか

似ているなって思った。今だってそう。海が好きだとか．．．  
「なるほど。ならばいいだろう。お前にだけ先に話してみるのも」

ビワはもう一度酒に手を伸ばす。そして自らの真実を告白し始め  
た。

一方、ブライアンたちは町の中心にやって来ていた。目的は最高の  
剣『炎の剣』、

そして『水鏡の盾』。いずれも高額の商品だったが、魔物たちを倒して  
得た金、

それに加えビワが投じた私財を足すことで購入資金は用意できた。  
「・・・あの人には感謝してもしきれない。ぼくたちだけだったら剣と盾、

どちらかは諦めなくてはならなかった。いつか必ず恩返しはしたいと。

「だけどこの町は・・・海が見えないのが寂しいな」

ブライアンはさっそく炎の剣と水鏡の盾を合わせて一括で購入した。

アレフガルドで用意できる最高の装備が手に入った。

「竜王を倒したら売っちゃおうかな。航海のための資金にしよう。」

でもアレフガルドの外にも強力な魔物はあるのかな？だとすると・・・」

「ハハハ！ブライアンさんは相変わらず海の話ばかりだなア！確かに砂漠はもう

こりごりですがね・・・久々に魚が食いたくなってきたな・・・」

二人は談笑しながら道具屋を目指していた。鍵や聖水の購入は検討中だった。

「鍵は俺がいくつか持ってますが・・・聖水はどうするんで？」

「いらないよ。それよりあの八百屋で新鮮な作物が欲しいな」

海の次は食い物か、と二人して笑っていた。だがその平和な時間は続かなかった。

「・・・うわあああ——つ!!魔物が！魔物が入ってきた——つ!!!」

町の入口の方角から突然大きな音がした直後、町人たちの叫び声だ。

ブライアンたちはすぐにそちらへと急ぐ。ビワとアマゾンも合流した。

まだ魔物は町の中心まで来ていない。今なら大きな被害は防げる。

「おおっ……!!確かに魔物どもがいやがる!誰も死んでないのが救いか!」

「でもこの町には無敵のゴーレムがいたのに!だから魔物たちも近づけずに」

平和が守られていたのにどうしてかしら……」

アマゾンには疑問を口にしていた途中で自らその答えを目にした。他の者たちも同じく

それを見た。あの眠らせるしかなかったゴーレムが無残にも粉々になっていった。

「そんな……!まさかぼくたちがゴーレムを眠らせたせいなのか!」

「いいや、それはないだろう。あれからだいぶ時間もたっている。これだけ」

寝ているようなやつだったら番人失格だろう。とつくに町は滅びている。

だがひよつとするとオレたちのせいというのはありえるな。これまでどんな

魔物もゴーレムに勝てなかったのにオレたちがやってきた今日になって

ゴーレムをあれ程までに破壊したのだ。並外れて強力な魔物がいるな」

ブライアンとビワは顔を見合わせると大きく首を縦に振る。それだけで

互いの意思の確認ができた。町の外へと駆け出す。それを阻止しようとする

キメラの群れやリカントたちを息を合わせて撃退していく。

「ブリザード、アマゾン!お前たちは残って町の人たちを頼む!

ぼくたちが防ぎきれない魔物が入ってくるかもしれない!」

「……わかった!こっちは俺たちに任せろ!気にせずに来い!」

「よし、後ろはあの二人や町の兵に任せて行くぞ、ブライアン!」

ビワは魔物たちを次々と打ち倒していく。ビワの華麗で身軽い剣さばきにのみ

目がいつてしまうところだが、その動きを支えているのは圧倒的な筋量と

底のないスタミナ。それらが全てバランスよく鍛え磨かれているのだ。

ブライアンも負けじと炎の剣で敵を斬り刻む。やがて町の入口の魔物を

ほとんど倒し終えたところで、二人は上空からの威圧感に気がつく。

そこには大きな竜が二匹浮遊しており、ずっと二人を眺めていたようだ。

ゴーレムを粉碎したのもおそらくこの二匹だろう。ゆっくりと地に降りてきた

竜たちとブライアン、ビワの二人が睨みあう。激突は確実だ。

「……ここにぼくたちがいることを知っていたのか。竜王の手下か!」  
「いかにも。我らは竜王様よりロトの勇者を殺害するために遣わされた」

青い竜はすらすらと人間の言葉を使う。沼地の洞窟のドラゴン以上だった。

姿はそのドラゴンそっくりではあるが大きさは一回り大きく、その顔は

三百年は生きていそうな風貌だった。

「勇者よ……この私、キースドラゴンのなかでも力ある者『サーバートン』は

お前と一対一のを申し込む!あのマンノ・ウォー……竜王が警戒する男とはどれほどのものか……確かめさせてもらうぞ!」  
キースドラゴンは炎を吐いた。あつという間に草原が燃え盛り、気がつく

ブライアンとキースドラゴンの背後を炎が囲み決闘場が完成して

いた。

「……グウルル……」

「なるほどな、そしてお前は決闘を邪魔させない見張りというわけか」  
もう一匹の赤い竜がビワのそばで仁王立ち。これでは助けに入るのは無理だ。

「よし、それでいい。ダースドラゴン……本名を『ギャラント・フォックス』と

いう者よ。では始めようか、伝説の勇者ロトの血をひく男よ！」

逃げ場のない炎のなか戦いの幕が開けた。沼地のドラゴンと同様、やはり

キースドラゴンも武器は火の息であるようだ。それを警戒しすぎると

尻尾や爪による打撃が襲ってくるのも同じだ。しかし違う点として、

このキースドラゴンにはドラゴンを遥かに凌ぐ知性がある。年季の

入った円熟さのようなものが感じ取れるのだ。

「ハッ！ハッ！ハア——ッ!!」

「……フーン！確かに筋のいい動きだ……」

沼地の洞窟のドラゴンが自慢の火炎を無効化されて冷静さを失ったような

事態に陥ったりもしない。常に落ち着きを持ち、思い上がらずに相手を

見下したりはせずにブライアンとの戦いを焦ることなく進めている。

本来、ただの力比べであれば人間は遥か昔に魔族に屈していた。しかし人間が

勝利し生き残ってきたのは、他の生物には無い高い知性にあった。野生の

魔物たちがいかに巨大で怪力で、時には高度の魔法を使ってくる

しても

所詮は本能のままに動き欲望に忠実な怪物。対処は案外容易だ。そこに人間の強みがあった。だが今回の敵にはその長所は通用しない。

作戦を立て、相手を見ながら戦うキースドラゴンに隙はないのだ。

「……フウ——っ……」

「そろそろ動きが鈍ってきたか……ぬんっ!!」

始まってしばらくはほとんど動きのない戦いだったが、実はかなりの消耗戦だった。

それもキースドラゴンの計算内で、戦いが長引けば長引くほど体格と体力において

遥かに勝っている自らの勝利する確率が上がっていく。現に今ブライアンの

足が止まり、尻尾による攻撃をくらってしまいそうになっていた。

「避けられない……!ならば受けて立つ!」

回避が不可能と判断し、ブライアンは身を守る体勢に入った。絶対的な防具

ロトの鎧に加え、メルキドで購入した水鏡の盾が早速役に立った。

攻撃を受け、かなりの衝撃だったが致命傷ではない。すぐに立て直せた。

「ム……フム、私も衰えたか?いや、それもロトの鎧の力なのか……」

火の息の熱も軽減してしまうようだしやはり長期戦となりそうだな

(……竜王でさえラダトーム城で攻撃の狙いが外れたとき動揺があった。

この敵の精神力はやつ以上ということか!明らかに決着を狙った一撃が

軽く流されても全く動じずに、すぐに次の行動を考えている……!)



ブライアンの持つ薬草の数には限りがあり、頼みの魔力も、この日はまだ

一日の疲れを癒す前であつたので満タンとは言い難い。集中力を切らさないよう

己を鼓舞してはいたが、このまま戦いが続けば先に倒れるのはブライアンだ。

ならば彼が目覚めた『ロトの力』を解き放ち短期決戦に持ち込むという戦い方もある。

しかしブライアンはまだこの力をどれだけ持続させることができるか自分でも

わかっていない。比類のない強力な力であるぶん終わった後の消耗は激しく、

もしキースドラゴンを仕留めきれなかった場合は敗北が決まる。相手は表情を

変えないため、これまで積み重ねてきた攻撃が実は効いているのか、まだまだ

余力を残しているのかも読み取れず、慎重にならざるを得なかった。そして互いに決定打を欠いたまま時間だけが過ぎてしまうのだつ

た。

「・・・ビワの旦那よ、町のほうはもう落ち着いたぜ！魔物はほとんど始末した！」

「あ、あの大きな竜は・・・！しかもブライアンが戦っているの!？」

ブリザードとアマゾンがビワのもとにやってきた。二人から見てブライアンと

キースドラゴンの戦いは互角に思えた。しかしビワの見方は違う。

「いや・・・このままではそのうちブライアンが倒れるだろう。展開は明らかに敵のほうに向いている。だが・・・」

ビワは視線をダースドラゴンのほうにやった。助太刀したくても

できない

理由を二人にそれだけで説明することができた。

(・・・悪魔の騎士と一対一を経験していてよかった。冷静に戦えている。

勝負を早く終わらせたくて自滅するのはダメだ。このキースドラゴンの

ようにじっくりと、堅実に戦いを進めることがぼくにもできている・・・)

確かにブライアンは難敵キースドラゴン相手に焦らずに冷静さを保ったまま

戦闘を進めることができていた。しかし体力の消耗は確実に襲ってきていた。

「・・・・・・・・・・！ちっ・・・・・・・・・・」

「剣で捌き損ねたな!?待っていたぞこの瞬間を！好機!!」

勝機を逃すまいとキースドラゴンが突っ込んできた。バランスを崩している

ブライアンはどうかにかこの戦い最大の危機から逃れようと、

「・・・まずい！ラリホ——ツ!!」

「そんな呪文は私には効かない！完全に隙ができたな！くらえ——い！」

「ウオ——っ！ぐうっ・・・・・・・・!!」

太い尻尾がブライアンに命中し、四方を囲む炎の寸前まで吹き飛ばされた。

「むっ！あの体勢から直撃を免れるとは！さすがは勇者と呼ばれる者だ。

あの男、竜王と同じく強運の持ち主のようだ。だが二度目はない！」

もう一度、今度はブライアンを完全に打ち倒そうと敵が勢いよく駆けしてきた。

いまだ地面に倒れたままのブライアン、絶体絶命の窮地に立たされ

た。

## 世界一の若大将（竜王軍バトル①）

竜王の配下で最強とされる二匹のうちの一匹、キースドラゴンの『サーバートン』

相手にこれまで粘り強く戦いを進めてきたがついに体力差から劣勢に追い込まれ、

地面に倒れ立ち上がりようとしているところにとどめの一撃を放たんとばかりに

キースドラゴンが向かってきた。あと十秒もすれば到達するだろう。

「くっ・・・！なんとか落ち着いて攻撃を躲さないと。沈着冷静に！」  
ブライアンのピンチに仲間たちは助けに行きたいが、彼らを監視している

ダースドラゴンの『ギャラント・フォックス』がそれを許さなかった。

猶予のないなか、なんとか間に合ってくれとビワが叫んだ。

「ブライア——ン!!お前の武器は何だ！その若さではないのか——っ!?

失敗を恐れずにいまこの瞬間を生きる輝きを見せてくれ——っ!!」

キースドラゴンが迫ってくる瞬間、ブライアンはその言葉にはつとさせられた。

これまで自分は相手と同じように落ち着きを持って戦ってきたつもりだったが、

それがすでに敵に呑まれている証だったのだ。実のところ冷静さを欠いていた。

敵の戦い方に付き合い、わざわざ相手優位の展開で戦闘をしてみなかった。

「ああ……そうだ！確かにこの数百年と生きている大きな竜に

最初から圧倒されていたんだ！ようやく目が覚めた——っ!!」

「目が覚めただと——っ!!お前はもう永遠に眠るというのに！

終わりだ！若き勇者よ！うしやあ——っ!!」

最後の一撃……キースドラゴンがそのつもりで爪を振りかざした。

ブライアンの身体が貫かれる寸前、ついに日が暮れて炎だけが

明かりの役目を果たしていたところに、闇を切り裂く光が輝き渡った。

「……あ……ああ……!!この光は！」

「うむー間に合ったようだ！あれを見ろ、二人とも！」

ビワが興奮のうちに指さした先では、キースドラゴンの攻撃を盾で完全に

防御しているブライアンの姿があった。ロトの紋章の形をしたアザが

腕だけにとどまらず彼の全身を光で満たしていた。

「……こ……こいつ……!!はっ!!」

さすがのキースドラゴンもついに隙を見せた。これまでずっと常に完璧な

戦い方と円熟した頭脳でブライアンを苦しめていた老獪な竜も、

とどめの一撃が無傷で凌がれたこと、そしてこの聖なる光に圧倒され

れ  
思考が一瞬止まってしまった。ブライアンは絶好の機会を逸さなかった。

「うおおおお——ッーここだ——っ！」

「……!!」  
炎の剣を全力で振りぬいた。避けられたら、とか耐えきられたら、などという

消極的な考え方はそもそもしない。常に最悪の目が出ると考え無難な

戦い方をするのはブライアンには似合わない。勢いのある若い力で

キースドラゴンを押し切るのがここでは最善だったのだ。

「ウガアア——ッ!!!」

威厳ある巨大な竜が腹部を縦に斬られた。しかし数百年も生きて猛者は倒れず、

「グウオオオオオ——ッ!!ブルルルルルル」

「・・・なおも前進・・・!ならばぼくもそれに応えよう!」

すでに勝敗は決していた。しかしキースドラゴンの突撃をブライアンは

受けて立った。それが彼に対する最大限の礼儀であり敬意であった。

体当たりのような形で攻撃してきた竜の腹を今度は横に一閃した。

先ほどの傷と合わさって十字の斬りあととなり、ついにキースドラゴンも、

「・・・..がつ!!」

ブライアンに到達することなく仰向けに倒れた。これ以上動くのは無理だ。

「・・・よっしゃー!ブライアンさんの勝ちだ!」

「きや——っ!!やったわブライアン!」

ブリザードとアマゾンは勇者の勝利に興奮し喜びを全身で表現していた。

ビワもブライアンの勇姿を見届け、優しい笑みがこぼれた。

（・・・最後のキースドラゴンの粘り・・・。フム、ブライアンはやはり

天運にも愛されている。もしロトの力を使うのがもっと早ければ

敵に蓄積させたダメージが足りずに一転して窮地に陥っていただろう。

一見遅いように思えたあのタイミングこそが唯一の機会だったとはな。

さすがはブライアンだ。私の誇りの・・・..)

「……ぐっ……」

戦い終えたブライアンは片膝をつく。苦しい戦いであったことは変わらない。

倒れていたキースドラゴンがすぐそばにいた。しかしもう互いに攻撃はしない。

代わりにキースドラゴンはブライアンに語りかけてきたのだった。

「……あ……あの男が警戒するわけだ。あの男は私サーバートンから

竜王の座を奪い蹴落とした強者だ。そのうえ『マンノ・ウォー』と名乗る

最強の戦士でありながら……お前を恐れている理由がはつきりとわかった」

「……もしあなたに全盛の力があれば勝っていたのはあなただ」

「フ……どうかな。それはいくら議論しても答えのない無駄な世界だ。

だがあの男について話をするならば、やつはやつで『今よりもつとよい世界』を

築くという目的はお前たちと変わらない。そういう意味では何もせずに

ずっと日和見を続けていた私よりも立派な王と言えるのかもしれないな……。

きつとお前とあの男の戦いは避けられぬのだろうが、それでも私には

確信がある。お前たちの若く新しい力が必ずや世界を更により仕方

で導くと」  
先代竜王ともいえるサーバートンの遺言にも似た言葉をブライア

ンは真剣に聞き、  
受け取っている。去り行く老兵が最期に遺す言葉の一つ一つを。

「……フフ……そしてこれは一つ個人的な頼みなのだが……」  
今にも息絶えようとしているサーバートンとブライアンの会話は

意外と長く続く。

サーバートンにとって、ここから先の言葉を伝えるまでは死ねないというところか。

しかしなかなか事切れない敵に、ブリザードは少し心配になってきた。

「・・・おいおい、大丈夫か？早くとどめをさしたほうが・・・」

「いや、やつにはもう何もできない。逆にブライアンはああして時間をとって

回復したほうがいい。あいつもかなりの傷を負っているからな。とはいえ

次はダースドラゴンとオレの対決だ。次の勝負はオレがやる！

ブライアンはしばらく休ませ・・・む？そういえば・・・」

ここでビワは大事なことに気がついた。監視役のはずのダースドラゴンがいない。

「・・・!?いつの間になくなった!?どこに消えたというのだ!」  
辺りを見回しても赤い竜はいない。空を見上げてもどこにもいない。

突然どうして姿を消したのか。まさか逃げてしまったのだろうか。

だが、果たして竜王の最も信頼している竜がそんなことをするか。

ビワは最悪の結末を察知し、それが現実になる前に走り出していた。

その向かう先はブライアンとサーバートンのいる場所だ。炎はもう消えていた。

「ビワの旦那、いったいどこへ!?あの赤い竜もどうしちゃったんだ?」

「・・・あれ・・・何?この音は・・・あ、ああ!あれは!」

「ウゴオオオオ——!!まとめてくたばれ塵どもが——ッ

!!」

ブライアンたちの上空から大きな物体が彼らめがけて降ってきた。



もちろん

正体はダースドラゴンのギャラント・フォックス。一対一の勝負のルールを無視し、

ブライアンの隙を突いて一瞬のうちにその命を奪い去ろうと舞い降りてきた。

はじめあまりにも高くにいたので、ビワたちが自分の頭上を確かめても

ダースドラゴンの姿を見ることができなかったのだ。

「あ……あ……」

「ブライア——ン！逃げて——っ!!」

ダースドラゴンの卑劣な一撃が炸裂した。相棒であるはずのキースドラゴンを

原形を留めないほどに潰してしまった。その飛び散った血や肉が赤い竜の

残虐性と非道な精神を象徴していた。キースドラゴンは仲間の手により息絶えた。

「なんてやつ……！ブ、ブライアンさんは……！」

恐る恐るブライアンの姿を確認する。すると、かなり離れた場所です倒れていた。

「ブライアン！よかった、生きてる！でも……」

意識を失い、地に頭を打ったせいで頭部からの出血が目立っている。

だが生きている。ダースドラゴンの攻撃から辛うじて守られたのだ。

「そうか、ビワの旦那だ！あの人か！旦那！あんたって人……は……」

ブリザードは言葉を失った。アマゾンも口を手で覆う。ビワは確かに

ブライアンを寸前で守った。しかしその代償は大きく……。

「あ……あんた……左腕が……!!」

ビワの左腕はなかった。彼はすぐに止血していたが、ダメージははかり知れない。

「なんてこと……！待ってて、私が覚えたベホイミで……！」

「……いや、ベホイミならオレも使える。それに腕の切断は……ベホイミでは

治せない。そのベホイミはそこで倒れているブライアンに使ってやってくれ。

一度安全な場所に戻ってブライアンを回復させろ！それまでオレが時間を稼ぐ！」

片腕になっても闘志は衰えず、白い剣士は一人ダースドラゴンと戦う気だ。

「そ……そんな！そんなことはダメだ！何なら俺も……」

「いや、お前たちは一旦退け！ブライアンを万全の状態に戻してから帰って来てくれたほうがオレたち全員の生き残る確率は上がる！

頼む！」

「……わかった。絶対死なないで！行きましょう、ブリザード！」

後ろ髪を引かれる思いを断ち切り、ブリザードとアマゾンブライアンを

担いだままなるべく遠く、安全な場所へ向かった。ビワは赤い竜を睨む。

「グヘアアアアア……邪魔しておって……！全身食いちぎってやる……」  
「……フン、お前ごとき腕一本で十分だ。逆にお前の丸焼きを食ってやる」

メルキドの町の入口に近い場所。ここならばダースドラゴンの攻撃が飛んでくる

心配もない。ゴーレムの残骸のそばでブライアンの回復が懸命に

行われていた。

アマゾンには習得したばかりのベホイミ、ブリザードは薬草を用いて  
ブライアンの

外傷を癒す。治療を続けながらブライアンの意識が回復するのを  
待つ。

「・・・そういえばあんた、宿屋でビワの旦那と何を話していたんだ？」  
「・・・ちよつと気になることを確認したの。ベホイミに集中し  
たいから

あまり話しかけないでくれる？」

「おっ・・・そりゃ悪い。でもやっぱり・・・男と女の件は俺には話し  
づらいか？へへ」

ブリザードのにやけた笑いに、アマゾンの怒りが爆発した。大きな  
声で、

「違うっ!!あの人は・・・ブライアンのお兄さんなのよ!本人が認めた  
!

まだ幼いとき・・・ブライアンは死んだと思っているけれど、魔物  
の

襲撃から生き残った、正真正銘、ブライアンと血の繋がった兄弟な  
の!

衝撃の事実を明かした。時が来るまで秘密にしておくように言わ  
れたが、

感情に任せて暴露してしまった。ブリザードは固まっている。

「・・・言われてみれば海が好きというところもよく食うところも・・・  
似ているところは結構あるが顔なんか全然似てねえのに・・・」

「あの人の腕にはブライアンと同じアザがあった。それで気がついた  
のよ」

ブライアンがまだほんとうに幼いある日、一家は魔物の襲撃に遭  
い、

ブライアン以外の全ての人間は死亡したとされていた。しかし彼の兄は

海に飛び込んでおり、どうにか生き長らえていたのだ。城に保護されたという

ブライアンに会いに行こうとしたが、なんと認めてもらえず、再会を許されなかった。

「・・・なんでだよ！そんな動かぬ証拠があるっていうのに・・・！」  
「あの人は言っていたわ。死んだことになっていたのがまずかつたてね。」

それにあの当時はロトの子孫を名乗る詐欺師どもがたまたま多いときだった。

私も子どものころのことだから何となく覚えてるけど、結構捕まっていたわ」

「そういえばあったな・・・一時だけだったが。そうか、旦那がラダトームを

忌み嫌い、しかしそれでも捨てきれずにブライアンさんに王国復活を

期待していた理由になるぜ。故郷だもんな・・・」

謎だらけだったビワという男の正体が明らかになった。魔物によつて家族を奪われた

兄弟のその後の明暗は別れたが、いまこうして再び共に歩んでいく・・・その事実を

ブライアンにどう言ったものか、と二人は悩んでいたが、いらぬ悩みだった。

「・・・そうか・・・ハヤヒデ兄さんが！」

「わっ！ブ、ブライアンさん！お目覚めで！そして聞いていたんで？」  
「ああ。意識はなかったけどぼんやりときみたちの会話が聞こえていた」

傷も全快していた。以前よりも回復に必要な時間が短いのはロトの鎧の

効果なのか、ブライアンが戦いの日々によって成長したからか。

痛みや疲れは抜けていないがもう一度戦闘に戻るには十分だった。

「うん、あるある。寝てるのに話し声や歌声は何となく入ってくるこ  
とって。」

まあそれはいいとして・・・ハヤヒデ兄さん、とか言ったわね。

『ハヤヒデ』っていうのが・・・あの人のほんとうの名前なのね」

「そうだ。あれは十年以上も昔のことです・・・まったく気がつかなかっ  
た。」

こうしてはいられない！行こう！」

ブライアンは兄ハヤヒデとの『真の再会』のため勢いよく立ち上  
がった。

そしていまも自分のために一人でダースドラゴンを相手してくれ  
ている兄を

すぐに助け、それからじっくりと話をしたい。彼は先頭に立ち走っ  
た。

「だけどよ、それならそうともっと早く言ってくれたらよかったのに  
な」

皆で戦いの場に急行しながらも、ブリザードはふとした疑問が抑え  
られなかった。

その言葉を聞くと、アマゾンの表情が沈んでいった。これは彼女が  
すでに

ハヤヒデ相手に質問していたことだったからだ。

「・・・あの人は・・・今日みたいな日が来るのをきつと予測していた。  
自分がブライアンのために犠牲になるときがやってくることを。  
そのとき

余計な悲しみを抱かせないために正体不明の剣士のまま死のう  
と・・・」

きつと自分が同じ立場だったとしたらやはり同じように行動した  
だろう。

せつかく死んでいたと思っていた唯一の肉親と再び会えたという

のに

「またしても別れを味わうことになる・・・そんなことはあつてはならない。」

「・・・だけどそんな事態にはならない・・・いや、させない！」

ブライアンの強い意志のこもった一言に、後にく二人も大きくうなづいた。

そして戻ってきた。まずは片腕を失ったハヤヒデと交代しなければならぬ。

「・・・兄さん！ハヤヒデ兄さんっ!!」

「旦那！よく凌いでくれたぜ！あとはブライアンさん・・・に・・・」

ブライアンたちの目に映ったもの・・・それは、邪悪な気に満ちたドラゴンに

胴体を貫かれて宙に浮き、ぐったりとうなだれているハヤヒデだった。

## 蒼い星くず (竜王軍バトル②)

勇者ロトの旅路―その旅のなかで彼は成長し、勇者と呼ばれるにふさわしい

力に満たされていった。その力を完全なものとする最後のひとかけら……

それは『怒りの炎』だった。旅の最終地点、ゾーマの城で彼の父親、幼いときに死んだと聞かされていた父の姿を見、そして父は自分の胸のなかで

息を引き取った。更に彼の仲間たちもゾーマの前に次々と倒れた。その最後に、彼が愛する幼馴染の僧侶が目の前でゾーマに殺害された。

このときロトは激怒した。我を忘れ、血管が破裂するほどの憤怒の炎。

その炎がゾーマの氷の世界を打ち破り、崩壊させたのだ！

それから数百年の時が過ぎ、その子孫ブライアン―ほとんど掴みかけていた

『ロトの力』の完成、それは偉大なる先祖と同じく……悲しみの現実により

果たされることとなった。

「……………ビ、ビワ……いや！ハヤヒデの旦那——ツ!!」

「グフウ……片腕のわりにはなかなか手こずらせてくれた……！  
さて……こいつの血と肉をいただくとするか！クウパア……」  
ダースドラゴンが大きな口を開き、無抵抗のハヤヒデの頭部を噛み砕こうとした。

「やめろ——つ!!この下衆め——つ!!」

惨劇を目の当たりに茫然としている男二人を押しつけ、紅一点アマゾンが

ダースドラゴン目がけて放った呪文は、ブライアンたちと共に修行した末に

習得した最高度の魔法、『ベギラマ』だった。魔力の限界が低いうえに

ブライアンの回復にそれを用いていた彼女は最後の魔力を用いてそれを放った。大きな爆発に、ダースドラゴンはハヤヒデを食す寸前で

離してしまい、その身体は宙に浮いた。

「……ああっ！旦那！おおおっ……!!」

地面に打ちつけられそうになったハヤヒデをブリザードが好捕した。

すぐに寝かせ、ありったけの薬草を用意するが……。

「……死んでいるわ……。もうどんな呪文も……」

アマゾンの身体ががたと震えていた。ブリザードの手から薬草の山が

こぼれ落ち、それと共に彼の目からは涙が溢れ出てきた。

「……そんな……！最期に、せめて最期に一言兄弟としての別れの会話すら許されないなんて……!!酷い、酷すぎる！」

そのまま激しく泣き始めた。その絶叫はメルキドの町にまで届くほどだった。

そしてブライアンの目は生気を失ったかのように色がなかった。

「次はお前たちだ層どもめがくっ!!竜王様に逆らう愚か者どもを一匹ずつ

虫けらを潰すように跡形もなくこの世から消し去ってやるぜくっ!!

腑抜けのキースやそこで倒れているボロ布のようになアアアアアア



ブライアンの無色だった瞳が真っ赤に変わった。少なくともそばにいた

アマゾンにはそう見えた。そして普段は真っ青な光を放つロトの紋章が

いまは赤と青、その両方の色が混ざり合いながらブライアンの全身を満たしていった。

「……………!!今までのとは違うわ!これが真の『ロトの力』なの!?!」

「うおおおお——っ!!絶対に…………絶対に許さ——ん!!」

ブライアンの動きは彼をずっと凝視していたアマゾンですら追いきれないほどの

速さだった。当然ダースドラゴンの『ギャラント・フォックス』にも不可能で、

「……………ゴ、ゴパア——ッ!!速い!そして…………重い!!」

一撃で大きなダメージが入ったようだ。そしてダースドラゴンはいまの

ブライアンから、力や素早さに加え魔力に満たされているのを感じ取り、

まずは呪文を封じようとした。ブライアンの武器をまずは一つ奪うためだ。

「ちっぽけな小僧めが……………!!マ……………マホトーン!!」

その呪文はブライアンに命中し、彼はしばらく呪文を使えなくなった。しかし、

「……………もともとお前相手に呪文を使うつもりなどな——い!!」

この炎の剣で!斬って、斬って、斬ってやるだけだ——っ!!!」

「オ…………オオオ!オオオオオオ——ッ!!!」

ブライアンの迫力に恐怖すら覚えたダースドラゴンは接近を拒み尻尾を振り回す。

しかし全く当たらず、気がつくとも自らの懐にブライアンが入り込んでいた。

「これで終わりだ——っ!!沈め——っ!!」

「……………!!!」

力強い一撃で一瞬のうちに戦いは決着した。ダースドラゴンの胴体は

キースドラゴンと同じように十字に斬られ、赤い血が勢いよく噴き出した。

しかもキースドラゴンのときよりも深く、渾身の力によって斬られたのだ。

ダースドラゴンのギヤラント・フォックスは轟沈し、動かなくなつた。

「…………ハ…………ハヤヒデさん…………。あなたの弟は、弟は大丈夫よ！ブライアンは大丈夫！あなたの無念を…………晴らしたのよ！」

ブライアンたちはハヤヒデの遺体の近くに集まっている。竜王軍はもう

やってこないようだ。しばらく誰も何も言わなかったが、いつまでもこうして

いるわけにもいかない。どうしたらいいのかもわからずにいたが、ここでハヤヒデの上着から何かがぼろりと地面に転がった。

「何かしらこれは。ロトの紋章が描かれているけれど…………」

アマゾンとブリザードが顎に手をやり首をかしげながらそれを見ていたが、

ブライアンはすぐに自分の手に取り、注意深く何回も確認すると、

「……これは……」ロトのしるし』じゃないか！勇者ロトの子孫であることを示す、

ぼくの家々に代々伝わっているものだ！失われてしまったと思っていただけだ……

兄さんがどこからかまた手に入れてくれたんだ！」

ロトのしるしを掲げながら空を見上げる。すると、どこからともなく声が聞こえてくる。

『……ブライアンよ、ついにやったな。あとは竜王ただ一人だ。ここから先の

お前の冒険に同行できないのは残念だが……これまでの旅、短いときでは

あつたが楽しいひと時だった。お前との失われた時間を取り戻せたようだったぞ。

あの小さかったお前がロトの勇者として立派に成長したその姿、オレは誇りに思う』

ハヤヒデの声だ。驚いたブライアンはハヤヒデの身体に目をやるも、

やはり彼は既に息を引き取っている。声を発するどころか口も動いていない。

アマゾンやブリザードは何も反応していないので、これはおそらくブライアンだけに

聞こえる言葉なのだろう。ブライアンはその声に対して語りかける。

「……そんな……。兄さんがロトの勇者として生きることでもできたはずだ！

それなのにぼくを生かすために……！王さまも兄さんもうして……！」

『フフ……違うな。弟よ、オレでは真に使いこなせなかったのだ。

ロトの力も、その鎧もな。ドムドローラに鎧を埋めたのは……実はオレなんだ。



「・・・ブライアンがそう言うのならきつとそうなのね。よかったわ」「ケツ・・・自分だけがブライアンさんをわかったような気でいやがつて。

すつかり女房気取りかよ・・・ん、つて・・・おい！あれを見るオオツ！！」

彼の叫びにしみじみとした空気が一変する。なんと、とうに絶命したと

思われていたダースドラゴン、ギャラント・フォックスが生きていたのだ。

「・・・グ・・・グウウウ・・・」

「あの野郎くっくッ！ブライアンさん！あいつ、倒れてはいるが死んでいない！」

「ブライアン！あの邪悪な魔物はあなたの兄さんを殺した屑のなかの屑！」

今度こそ目を覚まさないように、その魂まで完璧に葬るのよ！」

ブライアンは赤き竜に近づいていく。竜のほうは、もう戦うことはできないようだ。

彼が近づくと、最後の一撃を予感し無言で深く目を閉じた。ところがブライアンは、

「・・・・・・ベホイミ」

マホトーンの効果が消えていたので、ベホイミの呪文を唱えた。十字の傷が

少しずつ塞がっていく。ダースドラゴンは閉じた目を再び見開いた。

何が起きたのか理解できなかったのだ。それは当然アマゾンも同じで、

「ブライアン！あなた一体何を！そんなやつに回復なんて・・・！」  
当たり前の反応だった。しかしブリザードは黙っていた。こんな

光景には

見覚えがある。というより、彼は当事者であつたからだ。

(・・・沼地の洞窟でブライアンさんに数人がかりで襲いかかつて倒されたとき・・・あの人は俺たちを癒してくれた。そうだ、

あれで俺はこの人に心底惚れ込んだんだ。海のような大きな心に！

しかし・・・こんな憎き相手まで・・・！どうしてなんだ!?)

「・・・・・・・・何をしている・・・？オレはお前の大切な者を殺したのだ。」

早くとどめをさせ。さもなくばオレがお前を・・・」

「・・・それはない。なぜならあなたは・・・スライム一匹殺せないほど

優しい人だからだ。いまの傷の回復具合は関係ない・・・そうだろう？」

「・・・・・・・・！なぜ・・・そのことを・・・」

ギヤラント・フォックスは先ほどまでよりももつと驚いた表情でブライアンを

見つめた。ブライアンは目を逸らしながら答えた。

「・・・キースドラゴンのサーバートンさ。彼が死の間際教えてくれた。

本来あなたは自然を愛し弱き魔物たちと共に遊んでいた、人間と戦うなんて

世界からは最も遠いところにいたと。しかし光の玉を奪った竜王の洗脳に

影響を受け・・・それまでとは全く違う存在になってしまったとね」

竜王のもたらした魔物の凶暴化、それは竜王城に近ければ近いほど顕著で、

しかも純粋な心を持っている者ほど染まりやすく、竜王への忠誠と主に逆らう

人間と魔族への殺意、意識を支配されてしまいやすく、この魔物は特にその

代表的な存在だった。いま彼がその呪縛から解かれたことは誰の目にも明らかで、

「あ・・・あいつのあの穏やかな表情と澄んだ瞳！確かにスライムどころか

小動物すら殺しなんてしねえだろう・・・あんなやつは人間にもま

ずいねえ！」  
そんな竜を自らの片腕にまで至らせた竜王の非道さを改めて思い知らされた。

「だからあなたを救ってほしいと頼まれたんだ。その最中にあの一撃が来て・・・

それからのことはよく覚えていない。だが全てが終わった今、もう敵意や

恨みは何もない。兄さんを殺したのはあなたではない、竜王なのだから！」

「・・・お・・・お前は・・・このオレにそんな言葉を・・・」  
ダースドラゴンがまた両方の瞳を閉じた。これで終わり、そう思ったのも束の間だった。

「・・・あ・・・あなたの・・・その身体は・・・！」  
「・・・ふふ・・・そうか。噂には聞いていたが・・・やはりこうなっ

たか」  
全身がうっすらと透けていく。このままいくついいには消滅してしま

いそうだ。  
まさかの事態にブライアンは戸惑うが、ダースドラゴンはこれを受け入

れている。  
「竜王の支配から強引に逃れた者は必ずこうなるのだ。もともと邪悪で自身

に

忠実な魔物は洗脳などしなくてもいいからな。オレのようなやつ

が一番

厄介だったのだろう。寝返ったりするかもしれないから……」  
「……そんな！せっかく救えたと思っていたのに！結局ぼくは誰も……！」

ブライアンは己の無力さに拳を地面に叩きつけた。だが、彼の思いとは異なり

消えゆくドラゴンはブライアンに対して確かな光、勇者の力を見ていた。

「いや……これが救いなのだ。オレは竜王の操り人形として痛みも罪悪感も

良心もなくただひたすらやつの奴隷として殺戮を繰り返す日々から

ようやく解放されたのだ。お前のその……相手の邪悪な気だけを立ち滅ぼす

破邪の一撃、最後にオレを『元通りの自分』に戻してくれたのだから……」

いよいよ身体が透明になり、この世から去るときが迫った竜は自らを倒した剣を見た。

「……お前の持つ炎の剣とやら……オレたちに勝つには足りたようだが

竜王が相手となると……。いや、はつきり言おう、やつには通じない！」

「しかしこの剣はロトの剣の在処が誰にもわからなくなったいまのアレフガルドで

人間が用意できる最高の剣だ。これでだめだつて言われると苦しいな……」

「ロトの剣……知っているのなら話は早い。それならば竜王の城の地下にある！」

竜王はそれを発見したはいいものの大魔王ゾーマとは違い破壊することは



できずに自らの城で管理する以外は方法がなかったのだ。しかしあの城まで

到達できる人間などいない。管理といってもろくな警備もしていない。

まあ・・・見張りがいたところでオレやサーバートン以上はいない。勇者ブライアンよ！必ずロトの剣を手に入れろ！そして未来を勝ち取るのだ・・・」

勇者ロトが遺した伝説の剣の必要性、またその隠し場所を教えたところだ

全てを成し遂げたかのような満足そうな顔でダースドラゴンはいなくなつた。

本来の彼が愛していた平和な世の実現を、悪を切り裂く勇者に託したのだ。

メルキドの町に平穏が戻つた。風が吹き、ゴーレムの残骸が砂煙となつて消えていく。

ブライアンは空を見上げていた。この数時間で、彼は愛する兄を再び失い、

竜王軍最強の二匹のドラゴンとの死闘を終えたのだ。今すぐにも倒れておかしくない

疲労と精神状態であつた彼だったが、空の星くずを眺めていると・・・。

「・・・！星の数が増えた・・・？うん、そうだ。確かに光っている。寄り添うように二つ、そしてぼくからよく見えるところに更に力強く

く  
輝いている白い星が一つ・・・三つの星が・・・」

「・・・？俺たちには見えませんが・・・視力が段違いだぜ、ブライアンさん。」

将来海を旅しようとする男には必要な賜物なんでしょうが・・・す

げえなあ」

ブライアンの目にははつきりとその新たな星たちが光っていた。

その星たちは、みな優しくブライアンを祝福し見守っているように思えた。

## 若大将対竜王（リムルダール）

激しい戦いが終わりメルキドで一泊したブライアンたちは、次の日の朝早くには

ブライアンの兄ハヤヒデを、そして敵ではあつたが尊敬に値する二匹の竜を

丁寧に葬り、祈りを捧げてから町を出た。キメラの翼を使いラダトームの

そばに戻つたが、やはり町や城には入らない。目指すべき場所は決まっている。

最終決戦の地、竜王の城だ。船での突入が不可能であるので、どうすれば

魔の島に上陸できるかわからなかったが、しかしブライアンは歩みを止めない。

「・・・ブライアンさん・・・あのやりきれない悲しい出来事の数々を乗り越え、

ついに真の勇者って面構えになってやがる！僅かに残っていた甘ちゃんツラが

全くねえ。堂々とした、風格に満ち満ちたお姿だ！」

「ええ。このブライアンが竜王を倒せないのならもう誰にもできはない・・・

そう言い切れるほどにね。完全に『青年』になった・・・そんな気がするわ」

ブライアンはリムルダールの町を目指していた。かつて勇者ロトも魔の島へ

乗り込む際、最後の拠点としたのはその町であつたという言い伝えがある。

偉大なる先祖の猿真似をするわけではないが、先へ進むヒントが隠されて

いるのではないか・・・そう思い、目的地を決めて旅を再開したの

だ。

長い徒歩での旅の途中、ブライアンたちに襲いかかる魔物は僅かだった。

それでも行く手を阻もうとする愚かな魔物を、ブライアンは仲間の手を

借りずに一人で片づける。やがて再び広野には静寂が戻るのだ。

この静けさが、ブライアンにも共に旅をする二人にも、最後の戦いが

確実に、しかもすぐそばまで迫っていることを感じさせた。

「・・・久々だなあ。ローラ姫もいたな、あのときは」

「しかしこの町にようやく着いたはいいですが、これからどうするんです?」

「そこだよな。大きな船はだめだけど小型のやつなら何とかならぬかな?」

最悪は泳いでいく、だ。勇者ロトの父親は泳ぎ切ったって話だし、何も手段がないのだったらそうするしかないだろう。戦闘の訓練

の

合間に泳ぎの特訓もしないといけないのは少しハードだけど・・・」

「・・・ふふふ、ならその体力をつけるためにもたくさん食べなくちゃね」

三人は次から次へと出された料理を平らげていく。ちゃんと決められた料金は

支払っているの、料理を出す側もこれは作り甲斐があると大張り切りで

彼らに提供していた。肉も魚も野菜も、あつという間に皿が空になっっていく。

「いや・・・食べた食べた。せつかく訓練のための腹ごしらえだったのに

もう動けないな。とりあえずは明日からでいいか」

「そうね。でも戦いの稽古はともかく泳ぎの訓練なんてほんとうにやるの？」

あなたは海の男だからそれなりにはできるでしょうけど私たちは……」

「……俺たちもやるぜ！こうなったら最後までお供してやりますぜ！今日は宿屋に戻って……ん？」

突然、三人の目の前を塞ぐ二人の男が現れた。彼らは戦士のような。

ブライアンたちが何かを尋ねる前に彼らのほうから自己紹介を始めた。

「勇者ブライアンとその仲間たちよ、我々とここで出会えたのは幸運だ！」

私は『タイシン』。ビワと共に人里離れた地で修行を重ねてきた者だ！」

「オレは『チケット』。同志ビワ同様、ラダトーム王家に仕える気は毛頭ないが、

この世界を救うことには命を捧げし者だ。しかしお前たちと先に合流すると

言っていたビワの姿がないな。見たところ近くにもいないようだが……」

ブライアンは彼らにビワ、つまり自分の兄ハヤヒデの最期について話した。彼らは

それを聞くと悲痛な表情を浮かべたが、どこかでそれを覚悟していたようでもあった。

「……そうか。オレはあいつと共に生き、同じ日に死ぬことを望んでいたが……

やはりこうなったか。あいつはこうなるのを遠回しに予告してか

らオレたちの

もとを去っていったのだ。ロトの勇者、つまりお前に全てを伝授し、託すと」

「しかしお前がビワ……いや、ハヤヒデと言うべきか。兄弟だったとはな。

我らよりもずっとお前を重視し、アレフガルドを救うために不可欠な男だと

日頃から熱弁していた理由がわかった。そしてブライアン、私たちもお前を

助けるためにここまで来たのだ」

兄の仲間だったということがわかり安心した。しかも助太刀を申し出ている。

ブライアンはここで改めて、自分の旅は多くの人間に支えられているのを実感した。

「それはありがたい話だぜ！じゃあ泳ぎでも教えてもらおうか……」  
「……泳ぎ？ああ、さつきもその店でそんな話をしていたな、お前は。

その必要はない！なぜなら……魔の島に渡る神器が揃ったからだ！」

タイシンが力強く空に掲げたのは杖だった。もちろんただの杖ではない。

「これは『雨雲の杖』！ブライアンよ、お前の持つ太陽の石、そしてハヤヒデより

託されたというロトのしるし、それらと共にこの町の南、『聖なるほこら』へ

持つていくのだ。お前を待つ賢者がいる。いや、ここで説明するよりも

もうそこへ向かったほうがいい。行くぞー」

「……ちよ、ちよっと待って……今日はもう宿を決めてしまったんだ。

明日の朝いちばんに出るからそれでいいかな。あなたたちの宿代も出すから」

「……悠長な男だな。しかしある意味大物の証か？まあいいだろう。」

お前たちの様子を見ても……確かにそれだけ食った後ではな」

少し呆れたような様子ではあったが、二人は翌日の出発に同意した。

そして約束通り、まだ暗いうちに聖なるほころへと向かうことになった。

その道中、魔物たちがその場所へ行かせないとばかりに襲ってきたが、

新たに旅に加わった二人はビワと並ぶ剣の腕前を発揮し、難なく魔物たちを撃退していった。メルキドやドムドーラの辺りにいる敵の

レベルには劣る魔物たちではあったが、それでも彼らの強さは本物だ。

「おっ！この魔物の身体……集めて持って帰りやあ大した金になるぜ！」

「……そいつはゴールドマンだ。私たちは金には興味が無い、好きにしる。」

そんなことより……ブライアンよ、見えたぞ。あの神聖なるほころに

入ってくるのだ。私たちは皆ここで待っている」

ブライアンは雨雲の杖と太陽の石、そしてロトのしるしを持ちほころへ入った。

するとラダトーム城にいた賢者たち同様、いったい何歳になるのか全く見当も

つかないような賢者がブライアンを迎え入れ、ロトのしるしを確認した。

「……フム、どうやら本物のようだ。これまで何人もの愚か者が自ら

を偽って

この地に足を踏み入れたが……ついにこの時がきたようだ。雨と太陽が合わさる時が！ロトの血をひく者よ、『虹のしずく』を授けよう！」

「虹のしずく……！聞いたことがある。そうか、こいつが魔の島へ渡るための切り札か！ありがとうございますございませう、確かに受け取りました」

「ロトもその虹のしずくを用いて橋を架けたのだ。さあ行け、新たな勇者よ」

ほこらを後にしたブライアン。彼の持つ虹のしずくに、ブリザードはもちろん、

タイシンとチケットも興奮を隠せない様子だった。虹のしずくの存在を

知っている者はそれなりにいても、現実はこの目で見た、という人間は

そうはいない。勇者ロトとその仲間、そしていま、ブライアンとこの場にいる

者だけがその比類なき特権に与ったのだ。

「ス、スゲエっ！これが神秘、これが神聖さか！ゴールドマンの金の残骸で

大喜びしていたさっきまでの俺がバカみてえだぜ！」

「……お、おお……！まさかこれほどまでに……！ブライアンよ、我らは雨雲の杖を授け、お前に感謝してもらおう気であったが……もはや逆だ！このような素晴らしき、精霊ルビスの霊に満ちた雫を見せてくれたことに……心から感謝させてもらおう！」

伝説は真実だった、と目を輝かせる男たちとは異なり、アマゾンはどこか冷めた目で

ブライアンをじーっと見ていた。ブライアンもそれに気がついた。

「……？どうしたんだ、何か言いたそうだな」

「あなた……その虹のしずくのこと、知っていたのね？あなたの遠い



先祖が

それを使って魔の島へ渡ったことも。それなのに泳ぎの練習だの、ロトの父親は

半裸で泳ぎ切ったという話があるだの……。もしチケットさんたちが

来なかったらどうするつもりだったのよ。雨雲の杖のこともすっかり

忘れてリムルダールまで来ちゃったし、案外抜けてるのね」

「あはは……。返す言葉もないな。インパクトがあり過ぎたんだよ。泳いで渡ったとかいうそっちの伝説のほうが。悪かったよ」

一行は一度リムルダールへ戻り、英気を養ってから竜王城へ向かうことにした。

そして竜王のもとへ最後の戦いを挑む前日、その晩に議論が起きた。

五人は多すぎる、という問題のためだ。あまり大人数で向かうと竜王軍に見つかって襲撃され城へたどり着く前に消耗しきってしまうからだ。

せいぜい三人が限界ではないかという結論まではよかったがそこからがまた大変で、

「・・・我らが行くべきだろう。我らは戦闘のプロ！ブライアンの力になれる」

「ああ。ハヤヒデの恨みもあるしな。その原因竜王を倒すのはオレたちだ！」

自分たちがブライアンと竜王討伐に向かう資格があると主張するタイシンとチケット。

それに対し、ブリザードとアマゾンも譲るつもりは全くないようだ。

「いいえ、違うわ！究極の死地、必要なのは連係と信頼！つまりずっと旅をしてきた私たちこそブライアンを支えることができるに決まってる！」

「それにハヤヒデの旦那の仇を討ちたいのは俺たちも同じだ！」  
タイシンとチケツトは剣技に優れ、竜王のもとに到達するまでの魔物を

一掃することにも役立つだろう。それに彼らは死を恐れていない。  
ブライアンとの付き合いが短くとも、命惜しさに逃げたり裏切るような男たちではない。

一方のブリザードとアマゾンには彼らよりも物理的な攻撃力は低いが、ブリザードは

竜王軍すら使えない氷の呪文で敵を倒せる。アマゾンにも攻撃と回復、両方の

呪文がある。何より共に戦うことに慣れているので安心感がある。  
ブライアンはどちらを選ぶのか……その最終的な答えはこうであった。

「二人で行く。竜王はぼく一人で倒す。皆はここに残ってくれ」

四人は信じられないといった様子で彼を見るが、ブライアンは本気だった。

彼らが邪魔というわけではない。ブライアンなりに考えた末の結論だった。

「竜王の手下がどこで見張っているかわからない。もしかしたらこの会話すら

聞かれているかもしれない。だから三人でも多い。完全にやつらを欺き、

出し抜くためには一人で行くのが一番なんだ。ローラ姫を救いに行くときも

一人だったし、確かにあのときは敵が少なかった。だからこれでいい」

僅かに残っていた酒を飲み干し、一息入れてから更に彼は続けた。

「……それに、もうぼくのために死ぬ人間はいらない。ラルス王、ハヤヒデ兄さん……二人ともぼくの代わりに死んだからだ。」

これ以上増えたらぼくは竜王に勝てたとしても、もう生きていけない。だから頼む、このリムルダールでぼくの無事を祈るまでにしてくれ」

ブライアンが地につきそうなほどに頭を下げたのを見て、もはや誰も共に行くとは

言えなかった。朝となり、魔物たちの気配がないことを念入りに確かめてから

出発する彼を見送るしかできなかった。しかし、彼が出てから十分ほど

過ぎてから、アマゾンが自分の荷物をまとめて町を出ていこうとした。

「さーて、もういいかな。ブライアンに見つからないくらいの時間は過ぎたし、

こっそり後をつけちゃおっと。やっぱり待ってるなんてできないわ」

いっしょには行かない。しかしその後ろについて行かないとは言っていない。

アマゾンは最初からそのつもりだったようだ。ところが、そう考えていたのは

彼女だけではなかった。男たちもまた、準備は万端だった。

「ウム、私も同意見だ。二人ずつ二組で時間をずらしていけば敵にも見つかるまい。

それに見張りはいよいよ下等な魔物が務めているのが常。ならば私の『トヘロス』、

弱き魔物を近寄せせない魔法が身を隠してくれるだろう」

「虹のしずくがどのように橋を架けるのか……オレたちだって見てみたいしな。

少し離れた場所からでもじゅうぶんにこの目で確かめられるはず

だからな」

タイシンとチケツトが先に町を出ていく。ブリザードも持ち物をまとめ、

「ここまでできて最後の最後に留守番なんてできねえよな。それに竜王のクソ野郎は

どこから仕掛けてきやがるかわかったもんじゃねえ。ブライアンさんに

気づかれないように俺たちが陰から助けてやるんだ！」

二人もリムルダールを後にし、ブライアンを追い決戦の地へ旅立った。

(……静かだ。魔物はほとんどいない)

ブライアンの一人での冒険。虹のしずくをリムルダールの西、最果ての岬で

天にかざすと、魔の島へ渡るための橋が完成した。そこが一番の盛り上がりで、

後は敵の本拠地なのだからと警戒していても魔物は全然襲ってこない。

毒の沼地もロトの鎧のおかげで苦にせず進める。障害は全くなかった。

(嵐の前の静けさか。それに本番はやつの城に入ってからだ。集中するぞ！)

汗を拭いながら、仇敵の待つ竜王城へ確実に近づいていく。ずっとラダトームから

見えてはいたが決して届かなかったその城について突入しようとしているのだ。

竜王の島へ上陸したことで、ブライアンは逆にラダトームを懐かしむことになった。

そのラダトームはちようどいま……揺れていた。



それでも彼女に諦めや屈服、悲痛の色は全くない。竜王の言う希望、

つまりブライアンがこの魔王を打ち砕いて全てを終わらせることを

信じているからだ。

(ブライアンさま………!)

ブライアン自身は静寂のなかで竜王の城へ向かっていたが、彼の後ろを密かに

つけている四人、それにラダトーム城に竜王城……彼の周りはとも

騒がしく、激動していた。

## 海 その愛 (竜王の城①)

竜王の城に囚われたローラ。彼女自身の意思で自らの物にしようという

竜王の考えは変わらない。甘い言葉、不安を煽る言葉、人間の弱さを説き

無力感を思い知らせようとする言葉……。数々の惑わしの言葉を用いて

ブライアンが来るまでにローラを陥落させようとしたが、彼女もまた強かった。

この時代の魔王、この世で最も力ある者に対して挑発的な一言を投げかけた。

「……ふ……ふ……ふ……」

「どうした？わたしへの愛と服従を誓う前に精神が壊れてしまったら困るのだが」

「いいえ、私は正気です。ただ、竜王ともあろう者がこうでもしなければ

自らの妻を得ることもできないというのが可笑しくて笑いを抑えきれなかった。

ただそれだけの話です。あなたの惨めさが滑稽で……」

殺されるならそれでもいい。竜王に屈服しなかったから自分の勝利となる。

ローラの強い意志が見え隠れしていたが、それすらも竜王は笑い飛ばした。

「……はっはっは！余計な心配をさせてしまったかな？だが安心するがいい。

わたしには何も言わずとも全てを差し出すしもべたちは大勢いる。

洗脳や

脅しを使わずとも、このわたしにだったら己の首すらためらいなく献上する

者たちも数え切れないほど、な」

「……それならばなぜ私を……？」

「フム……そうだな。お前の数百年に一人というその美貌も理由の一つだが

一番のわけは……わたしの娘がお前を指名しているからだ。ローラと自分は

似ている、人間と魔族の関係の変化にはローラの存在が不可欠だ、わたしに

幾度もそう言つてやまないのだ。愛娘の頼みを無下にはできない」

竜王の娘。ローラが沼地の洞窟で監禁されていた際の世話係。そして今回

ラダトームの城に乗り込みローラを奪った本人でもある。あのフードを被つた娘の

ローラへの執着は本物のようだ。竜王さえも動かしてしまうとは。

（……あの娘の願いは……まさかほんとうに人と魔物の和平を？）  
現在竜王の間には竜王とローラのほかに、竜王の二人の息子、それに数匹の魔物

しかない。竜王いわく、娘と彼女と共にいた大魔道はもうすぐ城に乗り込む

ブライアンを始末するまで外に出しているとのことらしい。いかに敵とはいえ

残酷に処刑される人間の姿は見せたくない、そう言っていた。

（誰が何を考え何を企んでいようとも私は信じています。ブライアンさまが

ルビスさまのご意志を成し遂げ、この世界に光を取り戻すことを）

ローラは竜王に気づかれぬように精霊ルビスへの短い祈りをささげた。

短くとも思いのこもった、心からの請願の祈りだった。

「……うーん、やっぱり海っていいよね。大魔道もそう思うでしょ？」



「ええ。海は全ての命の源と言われていますからね。安らぎを感じます」

竜王の娘と大魔道、彼女たちは竜王の命令に従い城から出て、島の果てから

海を眺めていた。海を見ていると様々な感情が波のようにやってくるのは

人間だけではなく魔族も同じだった。娘は遠くのラダトームを見ながら言う。

「わたしのお願い・・・お父様は聞いてくれるかな？勇者がやって来ても

やるべきことは戦いじゃなくて話し合いだって。二人のお兄様は全く

相手にしてくれなかったからお父様ももしかしたら・・・」

「・・・どんな結果になると竜王様は深く熟慮なさった末のことであると

わかってください。しかし希望はあります。なぜなら竜王様は：：今初めてあなたにお話ししますが、かつて人間の妻を持ち、彼女とは

本物の愛で結ばれておられたのですから。そして二人の間に生まれました

ただ一人の子ども・・・それがあなただったのです」

魔族と人間の混血。竜王の娘は自らの出生の真実を初めて正式に聞かされた。

しかし二人の兄や城の魔物たちが自分の陰口を語っているときにそのような話を

していたのを薄々知っていたので、大きな驚きはなく、やっぱりか、という

気持ちにしかならなかった。人と魔物の平和を求めるのもそのせいなのかと。

「なるほどね・・・言うならわたしは『モンスター人間』っていうことかあ。

でもわたしのお母さんはわたしを産んだときに死んじゃった、それは

知ってるよ。だから大魔道がわたしを育てるように言われたんでしょ」

娘の言葉に、大魔道は海の波をぼんやりと見ながら昔のことを思い出す。

「・・・竜王様・・・あの方ご自身もあなたと同じ、その母君は命と引き換えに

竜王様を出産なされたのです。だから竜王様もあなたのこととは他の誰よりも

よくわかっておられるはずです。この動乱の世でなければ、いや・・・

そうでなくてもご自分の手であなたを育て上げたかっただでしょうに。

それでも私にこの大役を任せてくださった・・・。竜王様には感謝してもし尽せない・・・まさに私にとっての王であり神なので

す」  
この大魔道によつて母親のいない竜王の娘は今日まで育てられ、成長してきたのだ。

ここで彼女は疑問が過ぎった。いつも自分のそばにいる大魔道について。

「・・・でもわたしにつきつきりで・・・大魔道には子どもはいないの？

あんまりわたしばかり世話してたら怒るんじゃないかな・・・」

その瞬間、大魔道は遠くを眺めるようになった。それに気がついた娘は、

自分の言葉に何かよくないところがあったと悟りすぐに撤回しようとしたが

もう遅かった。聞きたくないと思つても、もう止められなかった。

「……私の子、ですか。流産しました」

「……流産……それって……」

「あなたや竜王様とは逆です。私は生き残り、お腹のなかの子どもは死にました。」

その年は珍しくラダトームの軍と私たち竜王軍の間で小さな戦争があり……

たまたま私たちの住んでいた土地が最も激しい戦場だったので、かつて竜王がまだ自らをアレフガルドの支配者だとは名乗りはしていないもの

危険な存在だと認識し、今のうちに打ち倒してしまおうという動きがあった。

そのときはまだロトの子孫たちのなかに力ある者が現れず計画は果たされずに

現在に至っている。あくまで小規模の戦いで、ラダトームの人々も竜王たちも

そこまで重要な歴史とは思っていない出来事。しかしその中心にいた

彼女は違った。大魔道は海を見つめながら悲しい記憶を隣にいる少女に伝える。

「……私の夫、『死神の騎士』と呼ばれていた者は私の目の前で殺され、

身重の身体でありながら戦わざるをえなかった私もラダトームの兵に頭と内臓に

重傷を負わされ……それが原因で私は遥か昔から使いこなしていた

古代の呪文の多くを失い……そしてもう二度と子を産めぬ身体になつたのです」

竜王の娘はひどく後悔した。大魔道に辛い過去を思い起こさせた

きつかけをつくった

ことではない。彼女の全てを奪った人間と仲よくなりたいたいなどという夢をこれまで

何回、何十回と聞かせてしまったことに。そのたびに傷つけたのだと。

大魔道がラダトームの城で竜王が行った大々的な殺戮や流血、暴虐を見て

大粒の汗と涙を流し、呼吸もできなくなるほどになったのはいまだに

その日の光景が大魔道を毎日休むことなく苦しめていたからだだった。

「.....」

竜王の娘は何と声をかけたらいいかわからなかった。その気まづさを察したのか、

大魔道のほうが彼女に微笑みながら穏やかな声で言った。

「しかし竜王様は慈悲深く愛に富まれた方です。もはや戦いすらできない私を

捨てるどころか、夫を、そして子を失った私にあなたを育てる特権を

与えてくださったのです。そして私はあなたを自分の子の代わりではなく、

竜王様の後継者であるあなたとして育ててきました」

「・・・わたしがお父様の後継？それはないよ。二人のお兄様のうちのどっちかだよ。人間との混血、しかも人間と仲よくしようとする私なんか」

「いいえ、竜王様はあなたのお母様を心から愛しておられました。他の誰よりも。

ですからあなたを産んだ後にあの方が亡くなられたとき竜王様はそれはとても

悲しまれ、一週間は何も口にされなかったほどです。ですからあな

たのことを

「一番気にしておられるのも当然ではありませんか。あなたの主張やご意志も

ああ見えてちゃんと聞いておられますから……もつと自信をお持ちください」

逆に励まされてしまっていた。大魔道はなおも続けた。

「そしてあなたは強く、そして何より優しく成長してくれました。

この間は私を助けることまで……。もう私の世話は十分でしょう。あなたにとって私はもはや不要、これからは……」

「違う！これからだよ！これからもつとずっといつしよにいるんだよ！」

竜王の娘は大魔道の手を取る。そしてそのまま抱きついた。

「もつと仲よくなれる！平和になった世界で、これまで以上に！

ほんとうの親子のように、死ぬまで変わらない親友のように、

何を捨てても互いを愛する恋人のように！わたしたちは……」

「……お嬢様……。あなたの夢が、あなたの望みが

叶いますように。人間と力を合わせ共に築きあげる未来……。

きっとあなたなら成し遂げられるはずです！私もそのためにあなたの隣で

少しでも力になれるよう……！」

大魔道の言葉に、娘は満面の笑みを浮かべた。いつも通りの彼女に戻った。

「えへへ……大魔道が二人目だよ。わたしの夢に賛成してくれたのは」

「二人目……ですか。その一人目……というのは？」

竜王の娘は遠くにぼんやりと映るラダトームの町を眺めながら言った。

「ふふっ……ないしょ。というよりわたしもよく知らないんだよね。

名前も知らない男の子だもん。いま生きているのかどうかもわからないしね。

わたしといっしょで海が大好きで、海の歌をじょうずに歌っていたっけ……。

それに、『夢は想えば叶うんだ』って言うてくれたんだ」

遠い日の思い出に浸りかけたが、これは彼女が十年ほど前に竜王城から黙って

抜け出して夜遅くまで遊んでいた記憶なのだ。あまり深く追及されると

まずいと感じ、慌てて話を変えた。

「そ、そんなことよりせっかくだからもう『お嬢様』とか『大魔道』なんて

呼び方はやめようよ。わたしたちにはほんとうの名前があるじゃない。

わたしの名前は……」

「なるほど……では、私の本名も教えましょう。私は……」

二人が竜王の城から離れた海辺で絆を深め合うのとほぼ同じ時刻、  
竜王は

その二人とは違う誰かが城の地上の門を開けたのを感じ取った。

それが誰なのか……彼にはすぐにわかった。

「フム……ローラよ、お前の待ち望んでいた男がやってきたようだ。  
おそらくはここまで来る前に倒れるなどということにはならぬだろう。

わたしとしてもそれではつまらぬ。自らの手で決着をつけないことにはな。

おい！わたしの息子たちよ！」

竜王の左右に控えていた二人の息子に対し、竜王はとある部屋を指さした。

「お前たちはわたしと勇者の戦いが終わるまでその部屋から一步も出

るな」

「・・・そ、そんな!」 「私たちも父上と共に戦います!」

竜王は動揺している彼らを全く相手にしない。顔色一つ変えずに言う。

「・・・お前たちはそんなにこのわたしが信用できぬというのか?

自分たちの助けがなければわたしは勇者ブライアンに敗れると」

「そういうわけではございません!」 「ですが・・・!」

「ならば黙って待っている。これまでの全てが終わり新たな時代の幕開けを

目にするがいいだろう。それに・・・これは方が一にもありえぬことだが、

もしわたしが倒されるような相手であれば・・・お前たちなど二人掛かりでも

相手にはなるまい。だから大人しくわたしの言う通りにせよ」

竜王の息子たちは何も言えないまま父・竜王の指示に従い安全な部屋に入った。

一方ローラは竜王の王座の後ろに扉のある別の小さな部屋に連れていかれた。

「・・・フッフ、わたしの息子たち以上の観客席を用意してやったぞ。

ローラ、お前の希望が沈みゆく船のように力なく深い暗闇へ

消えていくその様を・・・そこからじつくりと眺めているといい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ブライアンにとって当然初めて訪れる場所なのになぜか地上階の罨、

目に見える階段は竜王のもとには導かず、怪しげな無人の玉座の裏にこそ

地下深くで待ち構える魔王を倒すための真実の道があるということ

なぜかブライアンは理解していた。誰からも教えられてはいなかったはずだ。

（・・・なぜだろう。でもロトの伝説を記した本に書いてあった気もするなあ。

この仕掛けは数百年前と同じなのか。大魔王ゾーマの使っていたものを

竜王が利用しているのか。でも都合のいいときに思い出せたものだな）

頭の片隅に残っていた遠い記憶が助けてくれたのかと思っていたが、

突然ブライアンに語りかける声が頭の上から聞こえた。

『・・・それはあなたが勇者ロトの生まれ変わりだからです。その身体に

眠る血があなたを竜王のもとへ導いているのです。私の深く愛したロト、

あなたの内に力強く宿る彼の力を信じ、恐れずに進みなさい』

「・・・ローラ姫？いや、そんなわけはないか。声は似ているけど・・・

いまのは何だったんだろう。幻聴か・・・おっ、この先はやけに暗いな」

ブライアンはたいまつに火をつけて竜王城の地下へと潜っていた。

相変わらず魔物の気配はするが戦闘にはならず、気味の悪さを感じた。

そして彼を励ます謎の声もまた、逆にブライアンを悩ませるものとなった。



## 若大将対竜王2 (竜王の城②)

竜王はただ一人、護衛も置かずに座っていた。彼自身がその魔物たちも

二人の息子たちも更には攫ってきたローラ姫までも別の場所へと退かせて

しまったからであり、自らそれを望んでいた。そして彼が待っていた

その男がついに目の前に現れたとき、まさに二人だけの空間となった。

「……？……竜王……！」

「現れたか……ラダトームの英雄ブライアンよ」

魔の島に橋を架け、毒の沼地とバリアを突破し、地下七階という深さまで

やってきたブライアンを目の前にして、竜王は全く動じる気配がない。

それどころか、突然手を叩いて歓ぶような態度を示し始めた。

「……？どうしたんだ。何かおかしいか」

「いや、そうではない。わたしは嬉しいのだ、そなたのような若者がこの世に現れたことが！わたしが生まれて数百年……多くの

人間たちを目にしてきたがそなたは別格だ！わたしは待っていたぞ！」

すぐに戦いが始まると覚悟していたブライアンは思わぬ展開に首をかしげる。

竜王が自分を称賛する言葉を述べているのも正直なところ理解が全く

追いついていない。そのブライアンに構わず竜王は更に続ける。

「そなたこそまことの『勇者』だ。まさに勇氣に満ちた者！決して無謀さではない、

正義心と決意にも秀でている真に勇者と呼ばれる資格を持つ者だ。ラダトームで戦ったときより心身共に比べ物にならないほど成長したな。

そして仲間たちがいたという情報を伝え聞いてはいたがまさかこのわたしのもとに

一人で乗り込んでくるとは……！わたしは純粹なる敬意を覚えたよ」

ブライアンの勇敢さと強さを褒めたたえる。そして王座から立ち上がり、

「ブライアンよ、わたしと共にこの世を支配しよう！わたしの仲間となれば

世界の半分をそなたにやろう！どうだ、悪い話ではあるまい。半分だぞ？

決して人の住まぬ未開の地や海を与えようなんて考えてはいない。安心せよ」

「………はっ！」

「つまり……和睦だ！魔族の王であるわたし、そして人間の世で最も力ある

そなたが手を取りあい、世を導き裁いていくのだ。そう、半分ずつに

わけると言うよりは共同支配だ！共に王として世界をよりよいものとするのだ！」

「……そんな話が………しかし………」

ブライアンは深く考え込むような感じでそのまま黙ってしまった。竜王のほうも

後は彼の答えを待つのみとして、じっと彼を見ている。返答を急かしたりはしない。

ブライアンの人生、いや世界の行く末すら決めかねない究極の選択

を迫っている。

竜王もそれを理解しているのか、ブライアンに時間はいくらでも与える構えのようだ。

「・・・お、おいおい！何だあいつは!?本気で言つてやがるのか!?」  
「わからぬ。罨かもしれないし、ほんとうにそう思っているのかもしれない」

ブライアンの後を追って竜王の城まで来ていた彼の仲間ブリザードとアマゾン、  
そしてブライアンの兄ハヤヒデの同志チケットとタイシン。四人もまた

ほぼ戦闘をしないままブライアンと竜王の姿が確認できるほどのところまで

辿り着いていた。そこで竜王の言葉を耳にし、彼らにも動揺が走っていた。

「嘘かまことかは置いておくとして・・・まさか受けてしまうのではあるまいな?」

不安そうに見つめる男たちとは違い、アマゾンはどっしりと構え、愛する男を信じた。

ブライアンからもらった戦士の指輪を見つめながらはつきりと言う。

「・・・だいじょうぶよ。ブライアンはぜったい、正しい道を選ぶから」

ブライアンには後ろにいる仲間たちのことを、また離れた部屋から事態を見守る

竜王の手下たちやローラ姫の存在をも知らない。誰の目もない二人きりだと

思っている。竜王の誘惑に乗りやすい環境が整っていた。ブライアンは

ついに顔を上げ、竜王に対して返答した。

「・・・確かにお前の言う通りかもしれない。人と魔物が力を合わせて平和な世を目指す・・・もし実現すればこれ以上なく素晴らしいことだし」

成功すればぼくたちは未来の人々から永遠に英雄として称えられるだろう」

竜王はにやりと笑う。この若者はどうやら乗り気だ。ほんのあと一押しで決まると。

「そうだ。それに真の意味での平和、あの勇者ロトでも果たせなかったのだ。

ロトの勇者と言われているそなただが、ロトを超えることが可能なのだ。

勇者ロトではない、勇者ブライアンを大いなるものとせよ。今日はまさに

その夜明けだ！大魔王ゾーマが滅びた日以上に歴史的な朝が来るのだ！さあ！」

ブライアンと握手をかわそうと竜王は手を伸ばす。ブライアンもそれに応じるかの

ように右腕を動かし、竜王は更に笑いを浮かべた。ところが、まさに固い握手が

果たされる寸前でブライアンは竜王の手をはたき、後ろに下がり距離をとった。

「・・・むむ・・・！きさま・・・何のつもりだ！」

「・・・ぼくは勇者として失格かもしれない。お前の誘いを受けたほうが

世界にとっていいことなのかも、とも思う。しかし・・・」  
ブライアンはその手で剣を持つ。ロトの紋章のアザが光り始めていた。

「たとえどんな動機だったとしてもお前のせいで死んでいったラルス王、

ハヤヒデ兄さんたちぼくの家族、数え切れない大勢の人々を思う

と・・・。

それだけじゃない、お前に利用されたキースドラゴンやダースドラゴン！

彼らの犠牲を思うとどうしてお前なんかと手が組める！交渉は終わりだ！」

竜王を拒絶し、いつでも戦いが始められるように備える。しかし竜王のほうは

いまだ話を続けようと王座に座り、ブライアンに冷静になるように勧める。

「・・・いつの時代でもどの世界でも・・・犠牲は必要だ。大事な者を失い

ようやく変革の必要に気がつくのだ。そなたの痛みはよくわかる。しかし

それを言うならわたしも同じだ。もう戦いはやめに・・・」

「早く立て！竜王、相手が悪かったな。いまのぼくは・・・数多くの命の

仇を討ち、恨みを晴らし、お前をもはや魂のかけらすら残らぬほどに

この世から消滅させるためにやってきたんだ！何を言っても無駄だ！」

ブライアンの思いは最初から固まっていた。こうなっては流石に竜王も

ブライアンを倒すべく立ち上がるものと思われたのに、いまだ動かなかった。

「そうか・・・我が娘よ・・・やはりお前の願いは夢物語であったか・・・」

「・・・娘？その娘がこの話の提案者か？」

「ああ・・・あれは気の優しい娘だ。人と魔族が種を超えて手を取りあうことこそ

真の平和に不可欠だと信じてやまないのだ。愛娘の頼みだ、わたしも簡単に

折れるわけにはいくまい。そうだ、今からでも会ってみないか、わたしの娘に！」

ここまで来るともはや交渉ではない。何らかの狙いを秘めた遅延行為だ。

これ以上付き合うのは非常に危険だと察したブライアンはすぐに剣を

高く掲げる。その剣をはつきりと確認したところで竜王の顔色が変わった。

「・・・そ、それは・・・！きさま、その剣を手に入れおったか！」

「お前の洗脳から死の間際に解放されたダースドラゴンのギャラント・フォックス！」

彼がぼくに教えてくれたんだ！ゾーマと違いどうやっても剣を破壊できなかった

！  
お前の無力さ、そして自らの城に無造作に放置していたお前の慢心

その事実を叩きつけるための『ロトの剣』だ——ッ!!」

全く防御の用意ができていなかった竜王を斬りつける。以前に斬られた胴体だけでなく

顔面にも傷が入り、これまで友好的な素ぶりを見せていた竜王が豹変する。

痛みと怒りに燃え、ブライアンへの憎しみに満ちた顔を隠しもしない。

!!  
「・・・きさま・・・！一度ならず二度までもわたしの高貴な身体を・・・

許さぬぞツ！魔物ども——っ！この男を殺せ！一斉に襲いかかれ——ッ!!」

竜王はブライアンの後ろに潜ませていた魔物たちを大声で呼びつ

けた。

これまで魔物たちが全く襲ってこなかったのも全てはこの時のためだったのだ。

しかししばらく経っても魔物は現れない。竜王は更に激怒し、

「何をしている！臆しているのかッ！早くしろ——っ!!!」

竜王の迫力ある声に、ついに扉が開く。ところがやって来たのは魔物ではない。

「……ブライアンさん！止められてはいたが、やっぱり来ちまったぜ！」

「ブリザード！それにみんな……」

ブリザードたちがやってきた。その足元にはストーンマンやキー スドラゴンが

倒れていた。彼らが竜王の仕込んだ魔物たちを撃退したのだ。

「ブライアンよ、竜王のやつはお前を密かに討つために議論に没頭させようと

していたのだろう。お前が応じたら安心させたところで汚い騙し討ち、

もう少しお前が迷っていたらやはり考えているうちに背後から襲う……」

「でも私たちもこの城に突入していたことまでは竜王もわからなかったようね！」

ブライアンの顔が明るくなった。これまで散々ラダトームを出し抜いてきた竜王に

ついに一杯食わせたのだ。ブリザードは竜王を指さして叫ぶ。

「これがこの野郎の真実だ！いかに新時代の王を自称し人間との和平を語ろうが

結局はただの卑劣な小物！ゾーマの猿真似をしても全く及ばないやつさ！

最大の武器は変装や奇襲……それがそのくそつたれの正体だッ!!」

屈辱的な言葉を浴びせられた竜王。これまでよりもさらに怒り狂うものと

予想されたが、なんと竜王の顔には笑みが、しかも愉快そうに大笑いを始めた。

「ふっ……ふ、ふはははははははははははははははは!!」

「何だあいつ……万策尽きて壊れたか?」

「ふはははは……いやいや、わたしの正体、という言葉を目にしてつい笑いが堪えきれなくてな。そうかそうか、ならば特別に見せてやろう!」

わたしの真の姿を!どの道お前たちがそれを他の者に告げること  
は叶わぬのだ。

これがアレフガルドを、この世界全てを我が物とする王の偉大なる  
姿をな!

ウ……ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオアアアアアツツ!!」

竜王がおぞましい雄叫びをあげる。それだけで皆ダメージを受け、  
吹き飛ばされて

しまいかねないほどだったが、本番はここから先だった。竜王は自  
らを巨大な

竜に変えてしまったのだ。キースドラゴンやダースドラゴン、その  
なかでも特に

力ある者たちだったあの二匹の側近すらも遥かに上回る大きさと  
迫力だった。

「……な……こ、こいつは……!!」

「ハハハハ!わたしの名は『竜王』!あらゆる竜の頂点という意味だ。  
むしろ

今までがおかしかったとは思わなかったのか、この屑め!わたしと  
しても

愛する娘との約束ゆえ、穩便に事を済ませたかったのは真実だ。し  
かし



愚か者どもがここまで好き勝手に喚いて大騒ぎしているのでは仕方あるまい。

残酷で見るに堪えない死体を積み重ねることになろうともなあつ！」

その発する声すら空間じゅうに重く響いている。迫力も威圧感もまさに別格だ。

「……これはまずい！みんな、ブライアンに加勢するぞ！五人でやつを……」

「雑魚どもには興味がな——い！お前たちはそつちで遊んでいろツ！！出でよー！」

竜王がまた大声をあげてしもべを呼びつけると、城に残っていた最後の魔物たちが

再び集結し、ブリザードたちを囲んだ。ブライアンからは彼らの姿が見えなくなつて

しまうほど、いまだ竜王軍の残党の数は侮れるものではなかった。

「……くっ……アマゾン！ブリザード！それに……」

「お——つと！！余所見をするなよ！！お前の相手はこのわたしだ！お前が望んでいた

一対一での戦いの始まりだ！わたしに歯向かった愚を噛みしめながら存分に

絶望の戦いを楽しむがよいぞ——つ！！」

竜王は大きく息を吸い込んだ。そして最初から全力の力を込めて炎を吐き出す。

「……カアアアア——ツ！！」

「う……！！うおおおつ！！」

その激しい炎はこれまでブライアンが戦ったどの相手のものともレベルが違う。

炎から身を保護するロトの鎧ですら勢いを止めることはできない。

「……べ、ベホイミ……！」

火傷が残る前にすぐに回復呪文を唱えてここは事なきを得る。しかし竜王の攻撃は

全く収まらず、ブライアンに全く立て直しの機会を与えない。

「ベホイミー……これじゃ何もできずに魔力を失うだけだ！」

ブライアンの魔力には限界がある。竜王は激しい炎だけでなく直接ブライアンを

攻撃する威力も魔物のなかで比類なき者なのだ。こまめに回復をしなければ

命を奪われてしまうが、このまま一度も攻撃できずに回復呪文ばかりを

唱えていても倒される時間が多少後になるだけ、敗北を先延ばしするにすぎない。

防戦一方の戦いにブライアンは気持ちまで後ろ向きになり始めてしまっていた。

(……フ……全く手も足も出ないとはこのことか。これでもかつての大魔王

ゾーマよりは弱いとは。勇者ロトはやっぱりとんでもない男だ。ぼくなんかより

何倍も強かったんだろうな。きつとこの激しい炎や強烈な打撃に對抗する

呪文も使えたに違いない。ぼくはロトの遺した剣と鎧を手にしてもこの程度か。

一撃もくらわせることすらできずに負ける……それならいつそ前へ……)

勇気と無謀は似て非なるもの。追い込まれたブライアンが玉砕覚悟で竜王へ

斬りかかろうと考え始めたとき、またしても天からの導きの声が聞こえてきた。

『ブライアン……私の愛する勇者ロトの血をひき、その生まれ変わり

である者よ。

恐れてはなりません。しかしそれに加え冷静でありなさい。前へ向かうことは

必要ですが、焦らずにじっくりとその機会を見つけ出し、逃さないようにしなさい』

「・・・ま、またこの声が・・・！とても安らかなのに力強い、不思議な声だ！」

『ブライアン、なぜいまこの時代にあなたが勇者として選ばれたのか・・・。』

それはこの竜王がまだ己の力に完全に目覚めていないからなのです！もう一度

落ち着いてしばらく戦ってみなさい。あなたにもきつとわかるはずですから』

ブライアンはその言葉に聞き従い、捨て身の特攻を思い留まった。また竜王が

炎を吐いてくる。防御の構えをとって備えるがああ激しい炎が襲って来れば

ベホイミを唱えなければならぬだろう。これまでと同じ、そう思っていた。

ところが、今回の竜王の攻撃はブライアンにとって良い意味で誤算だった。

（・・・あれ？思ったほど威力がないぞ・・・？沼地のドラゴン並みの炎だ）

竜王の炎の強さは一定ではない。防御していてもかなりの苦痛を味わう炎もあれば

大して痛手ではなく、そのまま攻撃に転じても問題ない炎も飛んでくる。威力は

安定していないのだ。竜王が手加減して遊んでいるようには見えない。実は

戦いの最初からそうだったのだが、いちばん始めに激しい炎をまと

もに受けて

しまったせいで身体が恐怖し、全ての炎を脅威だと勘違いしてしまっていたのだ。

『気がつきましたね？自分のほんとうの姿でありながらその力を竜王は

使いこなせていないのです。いまが『チャンス』なのです！しかしもし

この機会を逸してしまうとあと十年もしないうちにこの男は必ず大魔王ゾーマをも凌ぐ暴君として世を支配するでしょう！ですがいまなら！』

謎の声に背中を押され、ブライアンの身体を再びロトの勇者の光が包み込んだ。

### 若大将対竜王3 (竜王の城③)

真の姿を現した竜王相手に、はじめはなすすべなく防御と回復に追われていた

勇者ブライアン。しかしどこからともなく聞こえてくる美しい女性の声が

ブライアンに突破口を与えた。ここまで圧倒されていた相手を冷静に注視する

助けとなった。そして、勝機は確かにあるという希望を得た。

(竜王・・・もう魔法は使わないのか。理性を失っているわけではないみたいだけど、ベギラマはいらぬとしてベホイミまでも・・・！)

慢心なのか、それとも真の姿を見せた以上それを使う必要はないということなのか。

回復してこないのであればそこを突くことができるかもしれない。

竜王の炎が

威力にムラがあることは確認済みだ。勢いの弱い炎を吐いてきたときこそ

勇気を出して竜王の懐に入り込み諸刃の一撃を叩きこむ絶好の機会だ。

『さあ、ゆきなさいブライアン！私の愛するロトの守ったこのアレフガルドを

あなたの手で再び勝ち取りなさい！決して最後まであきらめずに戦い続け、

光を取り戻すのです！ブライアン！ブライアン！ブライア……』  
「……………イアンさま！ブライアンさま——っ!!」

ブライアンは謎の声の様子が変わったことに気がついた。決死の戦いの最中であるのに

その変化にはすぐにわかったのだ。これまでずっと遙か空の上か

ら発せられていたように

感じられたその声が、いまは自分のすぐそばから聞こえてきたからだ。

「この声は……まさか！確かに似ていると思った！けれど……！」

ブライアンがそちらに目をやると、ローラ姫が竜王の玉座の後ろから彼に対して

声援を送り続けていた。もしかしたら初めから彼女が……。あまりにも

声の質が同じであるため一瞬そう思ったが、すぐに違うと気がついた。

あれはローラではない。その答えは半分出ていたが、今は目の前のローラだ。

「姫！どうしてこんな場所に!?まさかまた攫われて……！」

「ええ。でもまだそんなに時間は経っておりません。その男……竜王は

私の目の前であなたを打ち倒し、私に深い絶望に与えるつもりなのです！

そして私自身も、あなたが竜王に敗れたそのときは命を絶つ覚悟です。

ブライアンさま！私はあなたを心から愛しております！私は生涯あなたと共に

戦い、苦しみを乗り越え、喜びを分かち合い……。」

「ウォ——リャア——ツ!!!シヤア——

——ツ!!」

「………!ローラ姫!!」

ローラがブライアンへの愛を叫ぶ。すると、耳障りだと言わんばかりに竜王が

ギロリと彼女を睨みつけると、大きな足で踏みつけようとした。そのとき、

ブライアンの全身がこれまでで最も輝きに満たされ、ローラを跡形もなく

潰してしまおうという竜王の強靱な足から彼女を寸前で救ってみせた。

危険を顧みず、ここしかないという飛び込みが間に合った。

「・・・ブライアンさま・・・!!」

「ローラ姫・・・なんて危険な真似を。でもあなたのおかげで・・・どうやら真にロトの力に目覚めることができましたようです」

これまでブライアンがこの力を磨ききつかけになった数々の感情や思いに、

最後に愛が加わった。自分に向けられる真つすぐな愛、それが勇者にとつて

何よりの武器となる。ついに『勇者ブライアン』が完成した。

王女の愛を受け取り、再び竜王との一騎打ちに挑む。

「・・・本気のわたしとここまで戦えた男は初めてだ。しかし結果は同じだ!

やがてわたしにひれ伏すことになる!早く楽になれ、苦しい生を諦めろ!」

「楽に・・・?それならお前を倒した後じつくりとそうさせてもらうさ!

どんなに痛くても辛くても・・・喜びは生きていてこそ、だ!」  
いかにブライアンが覚醒したとはいえ、攻撃力も体力も竜王が勝っていることは

変わらない。素早さだって互角だ。ブライアンには一撃必殺の技もない。

一進一退、傍から見ているほうが疲れて折れてしまいそうになるほどだ。

「・・・ブライアンさん!くそつ、こいつら何匹いやがるんだ!」

「これではしばらく助けに行けない……いや、その前に我々が……」  
ブライアンはひたすら竜王の猛攻を耐え、機会を逃さず剣で斬りつける。

回復も防御も攻撃も、少しでも気を抜けば全てが一瞬のうちに崩壊してしまう。

それでも根気強く、集中力を決して切らさずに粘りの戦いで竜王に食らいつく。

「グググ……！しつこいやつめ！並の戦士ならもう何度も殺しているはずだ！」

徐々に竜王が気圧されていく。ブライアンに接近することを恐れ、炎による

攻撃を多用するようになっていったが、それは悪手だった。ブライアンにとって

竜王の安定しない炎は最強のものが来た場合確かにどうしようもないのだが、

弱い炎が飛んできたときこそ反撃に出る機会を得るからだ。そのチャンスが

ここにきてこれまでよりも増え始めた。ブライアンの根性と闘志がそうさせたのだ。

勇者ロトと比較してしまえばブライアンは攻撃力、呪文、技術において

凌ぐものはないのかもしれない。しかしその粘り強さ、絶対あきらめないという

根性はおそらくしたら偉大なる伝説の勇者よりも。そう思わせる戦いぶりだった。

呪文は何も通じない。剣での攻撃も少しずつしかダメージを与えられない。

そんな状況で最後まで戦いきれる男は余程の不屈の思いがある男だ。



「……グ……こいつめ……！ま、まずい！」

精神的にだけでなく、竜王が戦いそのものの優位もだんだん失い、逆に

ブライアンが一気に圧倒している。その竜王劣勢の空気は配下の魔物たちにも

影響を与え、自分たちの主の危機に思わず足が止まっていた。

「……そんなところに並んで立っていているんなら遠慮なくいくわ！」

焼き尽くせ——っ！ベギラマ——ツ!!」

待っていたとばかりにアマゾンが魔物の群れに対してベギラマを放った。

このチャンスのために魔力を溜めに溜めた、最高のベギラマに魔物たちは

一掃された。視界が開け、ブリザードたちからもブライアンの様子が

見えるようになった。彼らの希望が竜王を追い詰めている姿を！

「おおっ！ブライアンさん、そこだっ！一気にやっちゃまえ！」

「いけ——っ！」

彼らの叫びがブライアンの耳にも届いた。それに応えるようにブライアンは

ロトの剣に力をこめ、大きく息を吸い込むと高く跳躍し、

「ここだ——っ！くらえ竜王——っ!!」

竜王の心臓にあたる部分を一閃した。これまでにない、ブライアンにとって

生涯最高の感覚だったといえるだろう。これ以上ない会心の一撃が炸裂した。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア——!???」

自らをマンノウォー、戦いに向かう男と名乗り、それまでアレフガ

ルドの魔物を

率いていたキースドラゴンのサーバートンから王の座を奪い取り、ラダトームを

はじめ人の住む地にも多くの戦闘を仕掛けてきた最強の竜。戦いに明け暮れた

その竜王でさえ、数百年に及ぶ生涯で未知の痛み。紫の血が大量に噴き出す。

「ウガアアオオオ——ツ!!??」

「ああ！竜王のやつが……萎んでやがる!?!いや、人に戻っているんだ！」

竜の姿が真の正体であるはずの竜王だが、やはりまだ彼が真の魔王となるのは

これから数十年後だということなのだ。ブライアンに呼びかけた声の通り、

この時代が竜王を倒す最後の機会であり、ブライアンは見事に期待に応えた。

竜王は人の姿に変化しているが、これは自らの意思ではなく、完全に力を失い

勝負が決まったことを明らかにしているにすぎない。だがブライアンは

完全に決着するまでは気を緩めないと決めていた。死に体の竜王に再度襲いかかった。

「これで……これで完全に終わりだ！竜王——っ!!」

「……きさま……!!きさまごときに……」

「ハアア——ツ!!」

先ほどにも負けず劣らずの完璧な一撃。竜王の胴体を更に斬り裂いたが、

なんと竜王の身体が粉々に粉碎された。残ったのは頭部だけだ。その現象をブリザードが解説する。

「・・・そうか！ブライアンさんの究極の攻撃は破邪の一撃！キースドラゴンや

ダースドラゴンのときは邪悪な心のみをまさに殺していたが・・・見ろ！

あのクソ野郎はそのすべてが悪！存在自体が邪悪なんだ！ブライアンスさんの

剣をくらったらもうあいつは何も残らねえ！永遠に深い闇に沈むだけだ！」

その言葉通り竜王の残された頭部もだんだんと消滅していく。

「こ・・・このわたしが・・・世界の王となる竜王がアアアアアア・・・」

やがて竜王は大きな断末魔と共にこの世から消えていった。その野望は

果たされることなく勇者ブライアンによって覇道は潰えた。しばらく静寂が

この場を包んでいたが、そのうち皆、実感がわいてきた。

ブライアンが勝利したのだ。その真の勇者は竜王への最後のとどめをさしたままの

格好でいたが、緊張の糸が解けたか持っていた剣をからんと床に落とした。

それが合図となり、いつせいに勝者のもとへ駆けだした。

「ブライアンさま——つ!!」

「やった——つ！あいつ、やりやがった——！」

真っ先にローラ姫が彼に抱きつき、そして他の者たちも勇者を囲み、称える。

そんななかブリザードは一人天を見上げていた。この勝利を報告するためだ。

「先代ラルス王・・・それにハヤヒデの旦那・・・！あんたたちが命を賭けて守り、

希望を託したブライアンさんがほんとうに竜王を倒したんだ！あんたたちが

愛したアレフガルドを支配しようとした野郎はついに死んだんだ！」

ブリザードは旅人を襲う追い剥ぎにすぎなかったが、ブライアンと出会い

行動を共にすることで、いまや竜王の城に乗り込み強力な魔物相手にも

互角以上に戦えるようになっていた。そんな彼であつても男泣きを

抑えきれなかった。ブライアンの勝利を声高らかに叫んでいた。

『・・・ブライアン・・・よく頑張りましたね。この世を再び闇の世界に

しようと思んでいた者は永遠の滅びへと去っていきました。

アレフガルドをはじめ、世界は再び光を、平和を取り戻しました』

ブライアンの勝利に歓喜し祝福するのはこの謎の声の主も同じだった。

しかも今回はブライアンだけでなく全員に聞こえるように話している。

「・・・あなたはいったい誰なのですか？」

『ブライアン、あなたならもうわかっているのではありませんか？』

私は精霊ルビス。この地に生きる全ての人間たちを見守る者です』

精霊ルビス。アレフガルドの住民であれば誰もが知る崇拜の対象だ。

そのルビスが声だけとはいえこうして登場したことでこの場は驚きに満たされた。

「精霊ルビス様！ああ、読んだことがありますわ。勇者口トを深く愛し、

ロトの生涯中ずっと彼と共にあったという……！ですからいま子孫であるブライアンさまのもとにもやってこられたと……」

『その通りです。ブライアン、あなたはロトの生まれ変わり、そして彼の時代から』

数百年以上経ち、その間の彼の子らたちのなかで最もその力に満たされたもので

ありますから。けれども私はローラ、あなたのことも特別な思いで見えていました」

ローラは自らを名指しで呼ばれたことにぽかん、としていた。全く予想して

いなかったからだ。ブライアンが特別なのはわかっていたが、自分までとは。

「……私……ですか？私はブライアンさまと違い何も持つてはいませんが……」

『いいえ、ブライアンがロトの生まれ変わりならあなたは私の生き写し！』

私が仮に肉体を身につけてこの場に現れようとするならば、まさにあなたの

ような姿となることでしょう。あなたもまた選ばれし者なのです』それが何を意味しているのか……ルビスは続けた。

『つまり、ブライアンとローラ、あなたたち二人が子を残し、その子孫こそが

これ以上ない最高の……新たな世の『始祖』となるのです。

あなたたちが結ばれることは定められている運命であったのです！』

ルビスの言葉に、タイシンとチケットのコンビ、それにブリザードが大きく

うなり声をあげた。諸説あるものの、勇者ロトとルビスが結婚しその子孫が

いまのブライアンの家系だという伝説も残っている。その生まれ変わりと

生き写し、確かに文句なしのカップルだった。

「よし、であればさっそくラダトームへ戻ろう！魔物の残党がまだいるかも

しれないし、こんな場所に長居する理由はもうない！」

「ああ。我らはビワ同様のいまのラダトームを好ましく思っていないがこんなめでたい話となれば別だ！きつとビワ・・・いや、ハヤヒデも

両手を叩いて喜んでいるだろう。新しい時代の幕開けを！」

ブライアンとローラは彼らに祝いの言葉をかけられ、互いに顔を見合わせ、

そして赤くなる。前々から意識していたとはいえ、精霊ルビスの定めた

縁とあつてはこれ以上ない後押しであった。誰の目からも文句なしだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ブライアンとローラを、遠くからアマゾンは無表情で、何も語らずに

ただじつと見ているだけだった。その内奥の感情も察し難かった。

竜王との死闘を終えた一行はルーラの呪文で一瞬のうちにラダトームへと

帰還し、町はローラ姫が最初に救出されたときよりもずっと大きな歓喜に

満たされていた。そして一週間後に平和を祝う祭りを開くことになった。

また、そのときの宴はブライアンたちを送る別れの機会となることも

で 決定した。当初からの予定通り、ブライアンは自らが完成させた船

ローラを連れて海の向こうへと向かうことが決まっていたからだ。仮に王となるならばラダトームではなく新たな地で、というブライアンの思いにローラも賛同し実現する形となったのだ。新たな伝説がまだ見ぬ土地で始まろうとしていた。

この愛いつまでも (ラダトーム③)

勇者ブライアンが竜王を倒し、再び世界に平和が戻ったことを祝う宴が

始まっていた。それだけではなく、ブライアンとローラの結婚、更に

彼らの旅立ちの無事を願って、というものでもあった。

ちようどいま、ブライアンが皆の前に立ち、盛り上がりは頂点に達していた。

「いや〜．．．めでたい日だ。でもブライアン、寂しくなるな。

小さいときからずっとラダトームにいたお前が明日には発つなんて」

「ええ．．．新たな地でぼくも頑張りますから皆さんもお元気で。

このまま話していても辛気くさくなりそうなので、歌を歌います」

ブライアンが海の歌を歌うと、町中が大歓声に包まれた。

その様子をラルス17世、つまりチトセ王は渋い顔をしながら眺めていた。

「．．．くそオオオ〜〜〜っ．．．」

実は王もこれまで自慢の楽器で演奏をしていたのだが、

「この下手糞が——っ!!ラルス王ひっこめ——っ!!」

「ラルス17世ひっこめ——ッ!」

至るところから野次を飛ばされてしまい、ブライアンの登場が早くなくなってしまった。

民衆も酒が入っており、王に対して罵声を浴びせるという暴挙を躊躇わなかった。

彼はいじけながら一人で隅に座っていると、歌い終わったブライアンがやってきた。

「さつきは悪かったな。お前の邪魔をしようとしたわけじゃ．．．」



「いいよオ、別に。しかしこつちこそすまないな。もしお前にラダトームに

残られていたら間違いなくオレは民衆に殺されてお前が王になってた！」

「物騒だな……。まあそうならないように気をつけて統治しろよ」

ブライアンはその場から離れようとしたが王は彼を掴んで行かせようとしなかった。

「……どうしたんだ？」

「若大将！そこで……最後に一つ頼みがある！若大将、あのアマゾンつて娘

なんだけどな、オレあの子がメツチャ好きになっちまったんだよオ……。

お前はあの子に信頼がある。だから頼まれちゃくれないか、縁結びを！」

王の情けない姿にブライアンは少し呆れたように、彼を突き放しながら言う。

「自分のことは自分でやれよ。それにお前、一度あいつに乱暴しようとして

逆に殴られていたじゃないか。よくまた近づく気になれるな」

「冷てエなあ若大将。でもそこなんだよ。オレが小さいうちに死んじやった

お袋があんな女だったんだよ。厳しくも優しいっていうか……。

頼む、お前はローラと結婚するんだからいいだろう？お前からあの子に

オレの嫁になるように言ってくれ。この通り！」

プライドの高い王が頭を深々と下げている。ブライアンも立ち止まった。

「あの子さえ結婚してくれればオレはこれから心を入れかえて真面目になる！」

だからお願いだ、このオレとラダトームの国のこの先の成功を願う気持ち

お前のなかにあるのなら……アマゾンにオレの愛を伝えてくれ！」  
「……わかった。そこまで言うならいいだろう。やるだけやってみるさ」

「おおーうれしいなア若大将！お前が引き受けてくれるならきつとうまくいく！」

じゃあ後は任せた！オレはもうローラといっしょに城に帰らなくちやいけない。

あいつもここに居る最後の晩だからな。城のみんなにあいさつしないとな」

「そうか。仮にぼくが失敗しても自棄になるなよ。ローラ姫のことは任せた」

やがて宴も終わり、チトセ王やローラ姫たち城の人間はすでになくなっていた。

片付けはもう明日にするつもりか、辺りに酒瓶など宴会の残骸が散乱していた。

町の人々もそれぞれの家に戻っていて、暗闇のなかブライアン一人が歩いていった。

彼も本来なら自分の寢床でラダトーム最後の夜を過ごすつもりだったが、王との

約束のためにアマゾンのもとに向かっていた。そして彼女の家の門の前に着いた。

すでに真夜中になっているというのに鍵はかかかっていなかった。彼は中に入り、

「おい、アマゾン！……まったく、不用心だな。みんな酒に酔っているんだから

ちゃんと扉くらい閉めておけよ。ぼくだからよかったものの……」  
アマゾンはまだ起きていたようだったので、ブライアンも彼女に普通に

話しかけていた。しかし返事がない。聞こえていないわけではないだろうに。

「・・・どうしたんだよ？あ、そういえばお前宴会の席にもいなかったな。

というより竜王の城から戻ってきてから全然外で姿を見てなかった。

まだあの戦いの疲れが残っているのか？それとも体調が悪いのか・・・」

ブライアンがアマゾンに心配して近づこうとする。すると、

「・・・あなたは・・・ローラ姫と結婚して明日にはいなくなるのね」

ようやくアマゾンが言葉を発した。彼女はブライアンに背を向け窓から外を見ていた。

「いつか帰ってくるさ。ところでアマゾン、最後に用が・・・」

ブライアンがチトセ王のことについて話をしようと思ったそのときだった。

なんとアマゾンは何も言わずに着ていた服を脱ぎ始め、ブライアンが

気がついたときには生まれたままの姿、つまり裸になっていた。

「!!お、おい・・・！アマゾン・・・」

「単刀直入に言うわ。ブライアン、もし私を少しでも哀れに

思ってくれるのなら・・・私と寝て」

「・・・そんなこと・・・!!どうして・・・」

動揺し狼狽えるブライアンに対しアマゾンは彼の顔をしっかりと見つめながら、

「まだわからないの？私はあなたを愛していた。子どもときからずーっとね。

あなたとこのラダトームの町の一角で慎ましくも幸せな家庭を築きたかった。

でもあなたは・・・やっぱり住む世界が違った。わかってはいたけ

れど私は

今日までこの愛を捨てきれなかった。けどそれももう叶わない。だから最後に思い出をちようだい。このときのために私の身体はいま全く汚れて

いるところはないし、ほら……無駄な毛だつてぜんぶきれいに剃つたのよ」

ブライアンは目を閉じながら顔に手を当てた。アマゾンの身体から目を背けた

わけではない。彼女の気持ちにずっと気がついてやれなかった己の愚かさを悔いていた。

「……はつきり言つて！嫌なら嫌つて……」

もし精霊ルビスによるローラとの結婚の決まりがなければ自分はどうしていたか……

ブライアンにはその答えは出ない。しかしいま、アマゾンの震えるような声に、

彼女を抱きしめずにはいられなかった。もう後戻りはできなかった。

「……！！ブライアン……」

「今夜は夜空の星がとてもきれいだ。初めての夜にはこれ以上ない」

「……最初で最後……だけどね。ぐすつ……うれしいのに涙が……」

思いのままに口づけをかわし、そのまま二人は……

ブライアンの言葉通り、二人ともこれが『初めて』だった。

やがて行為が一段落すると、情熱もまた落ち着いて静かな寂しさが襲ってきた。

「……私も……ぼくの行くところへついておいでよ」とか、『いつまでも

愛している』つて言われたかったな……。でも、これでいいのね、

きつと」

アマゾンの指にはいまだにブライアンが彼女にあげた戦士の指輪があった。

ブライアンは彼女の手に触れながらその指輪にも手を伸ばそうとした。

「・・・アマゾン、この指輪のことだけど・・・」

「返せって言いたいの？妻でもない女にこんなものを渡したままじゃいけないから？」

「そうじゃない。ただ・・・こんなものがあつたらお前が辛くないか・・・」

ブライアンの優しさにアマゾンは安らかな笑みを浮かべた。彼のこういうところが

好きだったんだ、と思ったからだ。しかし女心を読み取るのは最後までだめだったようだ。

そこもまたおかしくなってしまい、心から穏やかな気持ちになつていた。

「いいえ、逆よ。これがあればきつとこの先何があつても私はやっていける。」

だから返してつて頼まれてもお断りよ。いいでしょう？」

ブライアンもそこまで言うなら、とその指輪から手を離れた。彼女が望むなら

一度渡した立場なのだからもう自分にはそれを奪う権利などないと思つたからだ。

「しかしこれはルビス様の怒りを買うだろうな。結婚前からいきなりこれでは」

「・・・大丈夫よ、ブライアン。あなたはルビス様のお気に入りだもの。きつと

許されるわ。罰が下るとしたらあなたを唆した私だけ。でも後悔なんてないわ、

私いま、とつても幸せだもの。ローラ姫には悪いけれど、あなたの

初めては

この私なんだからね。うふふ・・・私たち二人だけの秘密ね」

アマゾンの笑いに、ブライアンもつられて笑い声が出た。そして目と目が合い、

「……………もう一回……………する？」

「……………そうだな。こうなったら心残りのないようにとことんまでだ！えいっ！」

「きやあっ！まったく……………ま、誘っておいた私が人のことは言えないか……………」

そして朝となった。抱き合いながら眠っていた二人は意外な声で目覚めさせられた。

「……………おはようございます、ゆうべはお楽しみでしたね」

ブライアンたちの見慣れぬ女性が部屋の中心に立っていた。二人はびっくりし、

「うわっ……………！誰だきみは！勝手に人の家に入ってきて……………」

しかしその女性のほうは彼らのことをよく知っているようで、挨拶を続ける。

「私は『キャロル』。ああ、お会いするのは初めてでしたね。名前だけは

あなたもお聞きになったことがあるのでは？ブリザードの仕事仲間ですよ」

「……………ああ、そうか！きみがキャロルか！アレフガルドじゅうの情報

を  
すぐに集めるという……………！城の内通者の件ではお世話になった。ありがとう」

ブリザードが前々からその名前を出してはいたが、姿を見るのはこれが最初だった。

こうして見ると影に生きる人間には思えないが、完全に気配を殺してまんまと

家に入り込んでいるのだ。やはり大した人物であることには変わらないのだろう。

「そのきみが・・・どうしてここへ？」

「昨日の夜からあなたの行方がわからないとブリザードが大騒ぎしましてね。

勇者ロトの伝説のように密かにいなくなってしまうのではないかと

心配して私にあなたを見つけるように言ってきたのです。あなたの船がまだ

ある以上どこかにいるだろうとは思っていましたが・・・このことは

ブリザードにも話さないほうがよいでしょうね。もちろんローラ姫たちにも」

キャロルは口到人差し指を当ててニヤリと笑う。ブライアンは彼女の笑いの

意味を察して、持っていた数十ゴールドを全て彼女に差し出した。

「・・・これでいいんだろう？ぼくはともかくアマゾンがこれからこの町で

いままで通り暮らせるためには・・・」

「そう！それが正解です。これでもう私は全てを忘れましたのでご安心を。

そしてもう一つご忠告を許していただけるならば・・・ブライアン様、

そろそろここから出るべきです。直に町の者たちも目覚めるでしょう。

そうなってからではあなたはこの家から出られなくなるのでは？」「・・・」

「・・・きみの言うことが正解だ。感謝するよ」

「では私はこれで。またお会いする機会があるかはわかりませんが……」

キャロルは一瞬で姿を消し、ブライアンとアマゾンが残された。ブライアンはベッドから出ると自分の衣服を手にし、着衣していたが

アマゾンは布を身にまとい横になったままだった。

「……じゃあ、もう行かなくちゃ。アマゾン……」  
「ふふ、そんな顔しないでよ。私だっていつまでもこうしているつもりはないわ。

きつとあなた以上に素敵な人と出会って幸せになってみせるから。さあ、もう

旅立ちなさい。ずっとあなたの後ろをついていった私だけど、もうここから

先へは行けない。だって私はローラ姫じゃないもの……さようなら」

「……いつか帰る。絶対に。そのときまで……」

アマゾンは言葉とは裏腹に、これを自分の生涯唯一の男との交わりにしようとする。

固く思い定めていた。この愛を抱きながら死ぬ日まで一人でいる決意があった。

ブライアンも彼女の真の思いをわかっていた。だから王からの言葉など

伝えられるはずがなかった。それ以上は何も言わず彼女の家を出ていった。

やがて昼となり、ブライアンの船、『光進号』の出航の時がやってきた。

ブライアンとローラ、それにブリザードとその仲間たちが乗船して



いる。

多くの人々が見送りにくるなか、やはりアマゾンはいなかった。

「……………」

「ブライアンさま？どうなさったのですか？」

「いや……………」

ブライアンが返答に困っていると人混みをかきわけてラルス17世が現れ、

「おーい、若大将！例の件はどうなった!?うまく言ってくれたんだろ  
うな!？」

ちようと船が動き出した。だんだん姿が小さくなっていく彼に対しブライアンは、

「すまない！頑張ってはみたが駄目だった！まあお前も頑張ってくれ  
——っ」

「な、なに——っ!?おいブライアンちよつと待ちやが……………」  
勢い余って王は足を踏み外し、その体は海へと吸い込まれていく。

「うわ——っ……………」

あつはつは、と船からも陸からも大笑いの合唱が起こった。

やがてラダトームが完全に見えなくなっていく。ブライアンも船長として

本格的な航海の態勢に入った。新たなる地を目指しながら彼は思った。

いつか必ず帰ると。そのときまで愛する人々よ元気できてくれ、と。

その思いが果たされずに終わることはいまの彼には知る由もなかった。

## 夜空の星（君といつまでも①）

ブライアンたちがラダトームを離れてから数年後、この地では魔物狩りが

行われていた。どうかして民衆の人気を得たいラルス17世、ブライアン一人に

竜王討伐の功績を持っていかれ、無力さを払拭し力を誇示する必要のあつた軍の

思惑が一致し、アレフガルドじゅうの魔物を根絶するための軍事活動だった。

当然魔物たちの側も抵抗した。生き残った竜王の二人の息子たちも竜王の名を

二人で襲名し、魔物たちを集めて戦ったが、もはやブライアンたちとの戦いで

半壊していた竜王軍はラダトームの軍相手に全く優勢になれないまま最終的には

降伏せざるを得なかった。竜王『マンノ・ウォー』の息子二人、つまり

『ウォー・アドミラル』と『ハードタック』は処刑され、ハードタックの

息子、あの竜王の孫にあたる『シービスケット』というまだ幼い竜が

新たな竜王としてラダトームに指名されたが、実権など一切与えられなかった。

この日もラダトーム兵による、無抵抗で好戦的ではない魔物を一方的に虐殺する、

彼らの楽しみのために行われる狩りは続いていた。その様子を眺めている

二人の女性の姿があつた。背丈の小さい者のほうが先に口を開き、

「ふむ・・・これで再び世は混迷に向かうみたいだ」

「人と魔物の真の平和が果たされるのはどうやらまだ先、この時代ではないようだ」

「そうだね、トシフジ。次はわたし、ハーゴンの番ではあるけれども、今ではない。」

時が来るまでしばらくはあの地で待つことにするのが賢明か」

『ハーゴン』と名乗る者がそう言うのと、その側近と思われる『トシフジ』という

女性も領き、二人はどこかへ去っていかうとした。しかしその行く手は阻まれる。

「ちよつと待て——っ!!お前たち、人のような姿をしているが・・・」  
「魔族だな!?おれたちから逃げられると少しでも思ったか!」

ラダトームの兵士二人が立ちはだかった。ハーゴンは彼らに対し、  
「なぜだ?なぜきみたちはこのような行為を続ける?」

動じた様子はなく、あくまで冷静に彼らに尋ねた。兵士たちはヘラヘラ笑いながら、

「ゲへへ、理由か。楽しいからさ。弱い魔物たちを蹴って殺すのがな。  
しかも今回はおまけ付きだ。オレはお前のような幼い身体に目がなくてな・・・」

「ひゃひゃひゃ、変態め。俺はちゃんとこっちの大人の女と遊ぶぜ。  
まずは抵抗できないように痛めつけるのが先だがな・・・」

それぞれ獲物を前に手を伸ばすが、突然風が吹いたかと思うと、  
あまりにも切れ味鋭いために本人たちもなかなか気がつかなかったが・・・。

「・・・あ、あああ!?オレの・・・オレの腕がない!」

「お、俺もだアアア!て、てめえらいったい何をしやがった!」

ハーゴンたちに迫ろうとするがハーゴンはまるで、自分ではない、  
と

言うかのように首を横に振った。それは正しかった。戸惑う兵士

たちと

ハーゴンの間に割って入るように第三の者が現れた。

「……この方たちにその汚れ切った手で触れるな！害虫め！」

「ギヤアアアアゝ……」 「ヒャオオゝゝ」

兵士たちは細切れになってしまい、肉片がぼとぼと落ちていった。

彼らを殺害した水色の髪の女剣士のもとにもう一人、赤い髪に赤いドレスの

おっとりとした感じの女性が汗を拭くための布を持ってきた。

ハーゴンという正体も目的も謎だらけの者を中心とするグループは

この四人で全員のような。ラダトームの方向に背を向けて歩き出した。

「……しかし竜王の娘……彼女には結局会えなかったな。話によれば

わたしたちと同様モンスター人間、しかも人と魔物の完璧なる共存と

和平という将来を目指すという夢まで全く同じだったというのに……」

「ええ。ですがもうこのアレフガルドにはいないのかもしれないかもしれませんね。

キンツエム、ポリー……あなたたちもよく探してくれましたが……」

青い髪の剣の達人は『キンツエム』、最後に現れた、誰もがプリーティーだと

認める可愛らしさを持つ『ポリー』。彼女たちはその髪の色を通り、それぞれ

スライムとスライムベスが人の姿を手にした特別な者たちであった。

「しかしラダトームも・・・これであと百年くらいしか持たないな」「そうだね。また元に戻るだけだよ。魔物たちの楽園にね」

この辺りが『故郷』であるキンツェムとポリーは、現在人間たちが魔物たちを

絶滅寸前まで追いつめているというのに彼らの荒廃を予告してこの地を去った。

その言葉は正しく、難を逃れた魔物たちは決して見つからない場所に身を隠し、

いずれ人間たちに復讐するために力を蓄え始めていた。彼らが牙を剥くのは

まさに約百年後、ハーゴンが世界を支配するために立ち上がったときであった。

ラダトームのチトセ王、ラルス17世について言うと、魔物を根絶する作戦は

彼が思ったよりも成果をあげなかった。彼が己の私腹を肥やすために

国民の税金を乱用したこと、計画性のない政治をしていることを覆うほどの

ものとはならなかったのだ。また彼は民の一部を虐げ始めたので、人々と

精霊ルビスを怒らせ続けるには十分だった。反乱や暗殺に遭うことはなかったが、

ラダトームを見限り国を出ていく者たちが増えたのはこの時代だった。

キンツェムとポリーの予言的な言葉は人間たちの失態ゆえに成就することになった。

ラダトームが老いて衰えていく金満老人であるなら、その地はいまが伸び盛りの

無一文の若者と言えるだろう。新天地にたどり着いたブライアンが王として

治める国、『ローレシア』だ。国民は増え続け、領土は広がる一方だった。

誰も治める者がおらず、ただ散って暮らしていた人々を集め、彼らに平穏な

生活をもたらしたので国民たちは幸福に、安心して日々を過ごしていた。

その領土を広げる助けをしていたのはブライアンの親友ブリザードたちだった。

魔物たちの攻撃、またどうしようもない者たちの支配に苦しむ地を探し、

ブライアンたちと共にその土地に救いをもたらし、彼らの意志でブライアンに

仕える国民となるようにした。決して侵略戦争や奴隷支配をしなかった。

『・・・『ローレル』。この子の名前は・・・ローレル。いい名前じゃないか』

『そう言ってくださりとても感激です。私の母は私を産む前に一人の男児を

死産しているのですが、もし無事に生まれてきたらその名をつけるつもりで

あったと父から聞いていました。私の名前ローラもそこからきているのです』

『そうか・・・ならこの国の名前も・・・『ローレシア』がいいだろう

！』

ローレシアという国の由来は妻ローラ、そして初子からとられてい

るものだった。

ブライアンとローラはその後も子宝に恵まれた。やがて次男『トツプガン』が

誕生し、そして現在、ローラの大きな腹のなかには三人目となる子がいるのだ。

ブライアンが竜王を倒し、アレフガルドを去ってから八年が過ぎていた。

「そうだな・・・うーん、もし男の子なら『マーベラス』か？女の子なら・・・」

「うふふ、あなた。まだ時間があります。じっくりと考えましょう」

「きみの言う通りだ。あと二、三ヶ月はあるっていうのにね」

ブライアンはローラと二人、夜空に輝く星を見つめていた。ブライアンはこんな

綺麗な星空を眺めていると、幼いころ真夜中の砂浜でまさに運命的に

出会った初恋の少女のことを思い出すことがあった。結局その少女を

見つけ出すことは叶わなかった。もしかしたらローラがその正体では

ないかと、探るようにして聞いてみたことはあったのだが、

『私が十歳くらいのとき・・・そうですね。ほとんど城のなかにいました。』

まして夜なんて・・・自分の部屋から一度も出たことはありません『ふーん・・・そうか。大事にされていたんだね』

彼女ではなかった。しかしブライアンにとって、もうどうでもいいことだった。

愛するローラと子どもたち、そして国民たちに囲まれたいまが満たされているからだ。

「・・・幸せだなア。ぼくはきみといるときが一番幸せだ」

ブライアンの口からぽつりとこぼれた、彼の本心だった。ローラも同じで、

「ええ。私もです。ほんとうにあなたとこうしていられることが……」

感極まり瞳が潤むローラを優しく撫でてやると、彼女を寝室へと連れていった。

身重の彼女にとってこれ以上の夜更かしはよくないからだ。ブライアン自身は

就寝する前に明日の予定を確認するために王の間へとひとり向かった。

「……珍しいな。明日は何もないのか。細かい仕事は『ダブリン』や『トラップ』に

任せられるし、よし、久々にローレルとトップガン、あいつらと遊べるな。

海で釣りをしよう。将来のための勉強はまた今度で構わないだろう」

ブライアンは自分の子どもたちが成人した後のこともしつかり考えていた。

これから生まれてくる子を含めたら三人、彼らの未来がよいものとなるために。

『……ローラ、ぼくたちが年老いたらこのローレシアはローレルに継がせる。

でも他の二人にもそれぞれが治める国と城を用意してやりたいんだ。

実の兄弟なのに余計な争いをしてほしくないからね。そのためにいま

ブリザードたちにその候補となる土地を探しに行ってもらっているんだ』



『まあ！それは素晴らしい！かつてラダトームで覆い隠されていた負の歴史、

それを繰り返したくないと思ってはいましたがそのような方法があったなんて！』

『そしていつか後の時代、きつとまた世界は困難を迎えることになっても

彼らが力を合わせたらすぐにそれを乗り越えられるはずさ。ぼくたちの世代の

よいものは残し、悪いものは変えていけるように、これからも頑張らないとね』

『はい。私はいつまでもあなたと共に……』

ブライアンはローラとの会話を思い出しながら、息子たちと釣りをするための

道具を準備すると、少し書き物をしてから寝るかペンを手にした。

ローレシアの周りの魔物たちはラダトーム以上に脅威ではなく、人と魔物が

互いに傷つけ損ない合うことは全くない。よってブライアンも剣を持つことは

ほとんどなくなり、ペンを持つ機会のほうが圧倒的に増えていた。

「……この幸せが、平和がいつまでも続くことを願って……ん？」

一日の終わりに精霊ルビスへの祈りを捧げようとしたまさにそのときだった。

部屋中の灯りが突然消え、真夜中であつたため辺りは真っ暗になつた。

「……急になんだ？たいまつはないし……レミィーラ！」

周りを照らすレミィーラの呪文を唱えた。ところが何も起こらなかつた。

呪文の腕が錆びついているわけではない。この呪文は先日も唱えたばかりだ。

「おかしいな・・・あれ・・・？この黒い霧はなんだ？どこから・・・」  
黒く怪しい霧が部屋中を覆っていた。ブライアンにはわかるはずもないが、

この霧こそが呪文を発動できなくしている原因だった。しかし何かか

おかしいということには気がつき、一度部屋から出ようとしていた。

「・・・変だな。いったい・・・」

ブライアンの動きが止まった。扉に手を伸ばしたところで、彼は自分の腹部に

鋭い衝撃を受けた。暗闇のなかではあるが、彼には見えた。これはナイフだろうか。

何者かによつていま、刺されたのだ。とても深く、内臓に、背中にまで達している。

「・・・だ・・・誰・・・だ・・・！！」

自分を襲った暗殺者の顔を見ようと、その者の被っていたフードに手をかける。

すると、そこから現れたのはまだ幼い少女だった。その息づかいは荒く、

「ハア——・・・ハア——・・・！！お父様の・・・かたき・・・！！」

彼女こそ竜王の娘、ラダトームによる虐殺から逃げ、生き長らえた竜王の最後の子もだった。ブライアンは竜王の娘の存在は知っていたが、

こうして対峙したのはこれが最初だった。しかし一撃で致命傷を受けた彼に

戦う力はなく、彼女に伸ばしていた手もだらりと下がっていった。

「……う………ぐ………がはっ」

ブライアンはその場に倒れた。傷跡からは大量の血、そして臓物が僅かに

飛び出していた。ブライアンはすぐにわかった。これが『死』なのだ。

竜王との戦いするときにも感じなかった、完全なる『自らの終わり』。それ以外は何も考えられないままその場に倒れた。

「……あああ……ああ………」

一方の竜王の娘。父の仇を討ったが、その顔に達成感や満足感はない。

むしろ青ざめ、歯がカタカタと鳴っていた。持っていたナイフも落としてしまった。

無理もない。彼女にとって、初めての『殺し』だったからだ。彼女の後ろには

大魔道が立っていたが、娘は彼女に言われたことを身を持って味わっていた。

ラダトームの近郊だけでなくアレフガルドの至る所で魔物狩りが行われているのを

竜王の娘は全て見ていた。そして殺された魔物の数だけ石を積み上げ、その度に

彼らのための鎮魂歌、レクイエムを天に向かい歌っていた。その歌声はおそらく

アレフガルドの外、世界中まで範囲を拡大しても並ぶ者がいないほ

どの美しさだった。

彼女には力がなかった。人と魔物の間に生まれた『モンスター人間』には、

魔王として頂点に立てるほどの力を得る者もいれば、悪いところだけが

出てしまい一般の魔物以下の能力しかない者もいて、娘はその一人だった。

しかし彼女は決意した。父を打ち倒し、このような事態に至らせたロトの勇者に復讐を果たすと。自らの手で彼を殺すと決意した。

彼女と共にいた大魔道はそれを止めはしなかったが、ただ一言忠告していた。

『報復は報復をもたらします。終わりはありませんよ。そして満たされることもない』

『わかっている。でももうわたしは止められないよ。刺し違えてでもやってみせる』

そしてこのときのために万全を期し、暗殺を成功させるためになすべきことを

余すところなく果たし、こうしてついに悲願を達成したのだ。しかし血を流して

倒れる勇者を目にしたとき、彼女の心には寒い風が吹いていた。

ローレシア王の間での惨劇など夜空にとっては関係なく、星は光り輝いていた。

continue (君といつまでも②)

竜王を討った勇者ブライアンはそれから八年以上経った今日、竜王の娘によつて

闇討ちされ、うつ伏せに倒れていた。出血は増していくばかりだ。その様子を

暗殺者である竜王の娘はただ震えながら見ていたが、息絶えたかと思われた

ブライアンが顔を上げ、娘の顔をじつと眺め始めた。そして彼女の手をとった。

既に足も震えている竜王の娘は抗うこともできず、これはいけないと

後ろに控えていた大魔道が彼女を守ろうとしたが、ブライアンが絞り出すように言った。

「……すまな……かった。ぼくは……確かに罪を犯した」

その言葉に大魔道の足が止まり、竜王の娘も驚いた。自分を殺した相手になぜ

謝るといふのか。ブライアンは続けて言う。

「……ぼくのせいで……きみは父を、そして家族を失った……。多くの悪いことをしていない魔物たちもだ。ぼくはすぐにラダトームを

離れずに……も、もう少し……事態が落ち着くまであの土地に

いるべきだった……。そうすれば……。少なくともきみの二人の兄さんや……。魔物たちは守れたんだ……。」

「……い、今さら何を悔やんでももう……。」

「それにぼくは……。幼いときの約束をも破ってしまった。

人と魔物が完全なる平和を得たら……。きみを迎えに行くこと固く約束していたのに……。いまきみの顔を見てはつきり思い出

した」

ブライアンの血まみれの右手で頬を触られた竜王の娘。彼女もブライアンの

顔をじつくりと間近で見たことはなかったが、彼に言われて電撃が走った。

これまでよりも更に震えが止まらなくなり、その場に膝をついてしまった。

「……う……うそ。あなたがあのときの……あの夜の……!!」

「……きみだったんだね。やっと見つけた。あの日と全く変わらない。忘れはしない……いっしょに歌った海の歌も、将来の夢も希望も。でも……ぼくが全て台無しにしてしまった。どれだけ謝っても許されないのは

わかっている。それでも……何回でも謝らせてほしい……ぼくに最初に……

最初に恋というものを教えてくれたきみに。ほんとうに……ごめん……」

二十年近くも前のあの夜の海、ブラックサンドビーチでたった一晚、幼い二人が

過ごした思い出の時間。これまでいくら探しても見つからなかった相手が今、

目の前にいる。片やその者を殺害し、片やその原因を作った。せめてあと少し早く

出会うことが叶ったならば……。竜王の娘は大粒の涙を流し、激しく泣き出した。

「あ……あああつ……!!あああああ——つ!!!」

「……悲しまないで……悪いのは……ぜんぶぼくなんだ……」

しかし彼女にとって悲劇的な出来事はこれで終わらない。呪文が使えない状況を

作り出し、もはやブライアンを癒すことはできない。つまり彼は死ぬしかない。

そして、報復は終わることなく続くという大魔道の言葉は早くもその通りとなった。

『……愚かなる竜王の娘くっつ……あなたは許されない大罪を犯しました！

偉大なるロトの血をひく勇者を殺すというあなたの罪はその父よりも重く、

このルビスが直々に裁きを下さねばなりません！ただの傍観者であつた

大魔道、あなたも同様です！生きている値打ちなどないあなた方には

弁明も猶予も与える必要はありません。今すぐ私が——』

「……せ、精霊ルビス……!!」

かつてブライアンに語りかけたときの穏やかで優しいものと同じ主とは

思えないほどの禍々しい、憎しみのこもった声だつた。この言い方だ、

おそらくは最も重い刑、死刑を執行するつもりなのだろう。

それを悟つたブライアンはルビスに対し待ったをかけた。

「ル……ルビスさま……待ってください。彼女たちを殺さないでください。

ぼくが悪いのです。ですから二人の命を奪うことは……」

「……ブ、ブライアン……！あなたは……」

死に面しても己のことより他人のことを気遣うブライアンの高貴な人間ぶりに、

竜王の娘は涙を止める機会を失っていた。そんな男を自分が討つてしまったのだ。

何もかも、もう取り返しがつかない。ブライアンは温情を求めているが、

ルビスが聞くはずもないし、このまま死んでも構わないと思っていた。

大魔道を巻き込んでしまったことが大きな悔いではあったが、もはや自分は

生きていても仕方がないとうなだれていた。そんな彼女を嘲笑うかのように、

『……命を奪う？まさか。そんなことは致しませんよ』

「……………な……………」

『むしろそれよりももつと自らの罪を償わせる方法で罰さなければならぬでしょう！』

記憶も、人格も、顔も身体も没収して差し上げましょう！』

何もないはずの空間からとても冷たい風らしきものがふいてくると、竜王の娘、

そして大魔道の全身が透けていく。しかも彼女たちにとって、ただ消えて

いくのではなく、体が四方から強引に引き裂かれそうな感覚だ。

本来であれば即座に死んでしまうほどの激しい痛みに襲われる。

彼女たちが叫び声すら出せないなか、ルビスは淡々と刑を宣告する。

『……竜王の娘よ、あなたはその美しい容姿も歌声も全て失います。

あなたは殺戮のみを用途とした機械となり、自らの意思で生きることも

死ぬことも許されない人形となるのがふさわしい』

「……………」

『大魔道、あなたもそのアレフガルド一ともいわれる賢さ、それによつ



て

習得した呪文をひとつ残らず二度と使えなくなります。地を四本の足で

歩く醜い獣・・・鈍亀あたりがいいところでしょうね。あなたたちは

やがてその時代に私が選んだ勇者によって討伐されることになります』

精霊ルビス、彼女が愛し自らは認した勇者を殺害した罪はあまりに重く、

望まない転生の先に待っているのは無残に打ち倒されるその日まで

人の心とは無縁の機械、獣としての生涯だ。

ルビスとしては大罪人たちに深い絶望を与えたつもりでいた。これからの

地獄にどのような表情を見せるか楽しみであったが、意外なことに竜王の娘のその目から力は失われておらず、気力に満ちていた。

『・・・おや、その顔は・・・。どうやら新たな命となったら真つ先に

私に復讐でもしたそうな・・・。ですがそのようなことは決して・・・』

「・・・いいや、違うよ。むしろその逆・・・かな」

「・・・お嬢様・・・」

その顔を自らへの敵意と考えたルビスだったが、そうではないようだ。

「今度こそ、終わらせてみせる。今回はわたしのせいで失敗した。ルビス、あなたが

怒るのも当然だと思う。でも・・・あなたは裁きのつもりだとしてもわたしは

またチャンスがもらえたと考える。報復の連鎖を終わらせて、人間と魔物が

憎しみを捨てて手を取り合う世界を今度こそ・・・！」

彼女が燃えていたのはいまだ夢を諦めていないからだ。自分の手でその夢を

台無しにしてしまい、いまこの命すらルビスに預かられる形になっているのに

熱い心が再び蘇ったのは、その右手をブライアンが握ってくれていたからだだった。

そして左手を大魔道が。同じ夢を抱き、それを彼女に託す者と、果てない夢を

応援し、親友として支える者。この二人がいたからだ。

『…無理ですね。あなたはこの次も、何もできずに朽ちるのみです。

さて、そろそろ時間でしようか。消えなさい』

「……………」

ルビスの無情な宣告により、二人は完全に消えてなくなろうとしている。

竜王の娘はルビスに一言残して去っていこうとしたが、その言葉は無意識のうちに

『彼』と一語一句重なっていた。それは幼い日、あの夜も二人で歌った言葉。

ブライアンもまたルビスに対して自分の信じていることを臆せず  
に伝えた。

「…………いや、無理じゃない。夢は……想えば叶うんだ」

ブライアン、あなたとかわした約束は生まれかわっても必ず忘れない。  
い。

その世界にもあなたのような人間は絶対にいるはずだから、今度は  
もっと

早く出会って仲良くなってみせる。あなたを許せなかったわたし  
とは違って

あなたはわたしを許してくれた。その優しさを分けてもらってわたしは

再び目覚めたその日からあなたを見つけに探しにいこうよ。

名前すら最後までわからなかったきみ、ぼくの初恋の人。ぼくが何者かに

生まれ変わるかどうかは知らないけれど、もしもきみとまた会えるのなら

互いにどんな姿になろうとぼくもきみを探しに走るよ。想い続けるよ。

次は喜びも悲しみも分かち合える仲になれたらいいね。

大魔道、きつとあなたとわたしは種族も生まれる場所も時代も引き離されて

しまうけれど、あなたとも約束したよね。わたしたちは親子であり親友であり

恋人であり誰にも引き離せない……。そんな関係をもっと続けよう。

あなたまで巻き込んでほんとうにごめん。でももう時間がないみたい。

また出会ったときに償いはたくさんするからいまはここままで……。で

お嬢様、あなたが謝ることなど何一つありません。あなたを守れなかった

私が許しを請うべきなのですから。そんな私とまた歩んでいただけるのなら、

そのときこそこの身が砕け最後の血の一滴が流れるまであなたをお守りします。

あなたの夢が叶うお手伝いにほんの僅かでも役に立てるのならそれが一番の……。

彼女たちが消える寸前、三人の精神の世界だろうか。確かに言葉が交わされた。

ブライアンと大魔道も視線で会話ができた。この娘を頼む、お任せくださいと。

そして二人が『いなくなった』。そこでブライアンは冷静になり我に返った。

床の絨毯に注ぎ出されている血の量はとうの昔に致死量を超えている。

呪文が使えなくなった原因である黒い霧はなくなったが、今からベホイミを

唱えたところで傷が塞がるだけだ。生命力はすでに手遅れなほど失われていて、

効果といえばせいぜい葬られるときの見栄えが多少良くなる程度だ。

だから疑問に思っていた。確かに自分はもう死ぬ。しかし意識が薄まっていく

速度がかなり遅く、痛みも全く感じなくなった。これはもしや…。

『ブライアン、私の力を持ってしてもあなたの結末を変えることはできません。』

ですが…少しだけ命を長らえるくらいならば可能です。あなたは

その生涯の間、ずっと正しく清い道を歩んできました。時には失敗することもありましたがそれも人間、あなたは確かに立派でした』

「…………ルビスさま…………」

『ですがそんなあなたを一番最後に見送るべきなのは私ではありません。』

その者との別れの時間のためにこの猶予が設けられたのです』

誰がそれにふさわしいか、ルビスが言わなくても答えは決まっています。

ブライアンの王の間と寝室はだいぶ離れていたが、きつと予感があつたのだろう。彼の妻、ローラが身重の姿で駆けつけてきた。

「・・・あ、あなた・・・・・・ブライアン！」

「ローラ・・・・・・」

D r e a m e r (君といつまでも My・Way)

全てが終わった後、自らの流した血の海で横たわっているブライアンのもとに

ローラが駆けてきた。妊娠中であるとはいえ煌びやかな服に身を包んでいたが、

彼女は瞬時の判断でそれを引き裂き、ブライアンの傷口に当てようとした。

ブライアンは彼女の行為を見て、自分では無駄だと思っていた回復呪文を

唱え、傷を塞いだ。当然すでに自らの命を救うものとならないことは

わかっていたので傷もそのままにしていたが、ローラのことを考えるなら

こうするべきだと思い、身体の外見だけはもとに戻した。

「あなた・・・ブライアン・・・!!どうして・・・」

「・・・ローラ・・・すまないけれど細かく何が起きたか説明している時間はもうない。ぼくはあと数分もしないうちに死ぬからだ。

いずれルビスさまが教えてくれるかもしれないけれど・・・」

ローラは目の前が真っ暗になったかのような感覚になった。

突然の悪い予感に夫のもとへ走ってみると大量の血と共に倒れ、

その口で自分が死ぬという残酷な事実を語ったからだ。ローラはどうしたらよいのかもわからず座り込んでしまった。

「・・・あ・・・こ、子どもたち・・・」

「・・・二人はいまぐつすり眠っているだろう?そのまま寝かせてやってほしい。

全ての後始末をきみに頼むのはつらいけど・・・すまない・・・」

ブライアンはいまやローレシアという国の王だ。死後のことを指示しなければならぬ。

「まだ幼いぼくたちのローレル．．．まずは彼に王位を継がせるんだ。信頼できる

ダブリンとトラップに任せればどうにかなるだろう．．．遠方へ行っている

ブリザードたちも呼び戻すんだ。彼らも力になってくれる」

「．．．．．私に．．．無力な私に何ができるのでしよう」

「．．．大丈夫さ。きみはドラゴンどころか竜王を前にしても決して屈さなかった。

その強い意志と勇気．．．無力なわけがない。ローレルを支えてくれ。

それとトップガン、あと．．．そのお腹の子どもにも将来は自分で支配できる国を用意する計画もいずれば．．．．．」

ブライアンはいよいよもう精霊ルビスによって延ばされていた自らの終わりが

近いことを知り、『王』としての言葉を終える。ここから先はブライアンという

一人の男、ローラの夫としての最後の会話だった。

「ローラ．．．ぼくのほうが先に逝くというのは正しい形ではあるけれど

まさかこんなに早くきみを残してしまうことになるなんて．．．。

そして最後だからこそ言わなければいけないことがある。ぼくは

きみに隠してきた幾つかの罪がある。それは．．．」

ラダトームの町娘アマゾンとの一夜、竜王の娘に二十年近くずっと抱いていた恋心。

ブライアンは当然ではあるのだが、これらのことに関してはローラには黙っていた。

彼が明かさなければ永遠にローラが知ることのないものだったが、いつかは

話さなければならぬとブライアンは国王となって早い段階のう

ちに決めていた。

そのときが突然訪れてしまったが、いま告白しなければもう機会はない。

愚直なブライアンらしい考えだった。しかしローラは彼の口に手を当てた。

「しーっ。ブライアン、そこから先は言わないでください」

「……だ、だけど……」

「私もいずれあなたの行くところへ参ります。そのときにじっくりと聞きましょう。」

ですがいまは、そのような悪い話よりも心を温かくする思い出話に浸らせてください。あなたの勇ましい勝利、救出、冒険……。

明日が見えない暗闇の日々だったのに、確かに未来は輝いていました」

「暗闇……か。確かにきみはそんな洞窟に閉じこめられていたっけ……」

このような状況ではあったが、二人は過去を懐かしく振り返り、和やかな

空気が流れていた。やはり話はブライアンが『勇者』として活躍していた

ときのことが中心だった。あのころ、まさに二人は若く、青春だったからだ。

「……今からすれば考えられませんね。あなたのことを勇者様、ブライアン様

などとよそよそしく呼んでいたなんて。またそうしろと言われてももう無理です」

「はは……ぼくもそうだった。でもぼくは仕方ないだろう？ きみはラダトームの

お姫様だったんだから。小さいころから城でたまにきみの姿を見たことは



あつたけれど……全く手の届かない世界にいる人だと思つていたからなあ……」

そのラダトームを去り、航海をし、この大陸を新天地とし、気がついたときには

一国の王となつた。ブライアンの治世のよい評判を聞きつけた人々が次々と

やつてきて、ローレシアは大国への道を確実に、着実に進んでいた。最近では

ラダトームをはじめとしたアレフガルドからの移民が特に多かつた。

「ふふふ、やはりお兄様ではだめでしたね。ラダトームの悪評が遠く離れた

私たちのもとにまで伝わってくるほどなのですから。しかしそのため

にこれから私たちの国は栄えていく……それを思えばお兄様にも多少は

感謝するべきなのでしょうかね」

「……まあ難しい話だよ。ぼくたちの故郷がゆつくりと凋落していくのは

悲しいけれど、その人たちがこの国に希望を求めて移り住んでくれる、

それはとてもありがたかつた。ぼくはその期待に応えるためにも……」

ブライアンの言葉が途絶えた。まだ息はあつたが、とうとう限界を迎えたようだ。

「……」

「……ブライアン？」

「ローラ……ぼくの人生は三十年にも満たなかつたがとても中身のあ  
る……」

濃厚なものだった。当然いいことばかりじゃなかったけれど、それでもいま

確かに言えるのは、『幸せだった』ということだ。それもぜんぶきみが

そばにいたからだ……。どんなに人々から称えられ、成功を収め、勝利を手にしても、きみといるときの幸せに比べれば……」

愛する者との別れ。ローラはブライアンに不安や心配を抱いたまま永い眠りに

ついてほしくはなかったためできる限り穏やかな顔で見送ろうと  
していたが、

もうだめだった。涙が溢れて止まらなかった。ブライアンの胸ですすり泣く。

「……………ブライアン……！私もすぐにあなたのもとへ参りますから……！」

「は……はは……すぐに来たら困るよ。ぼくたちの……その子も含めた

三人の子たちを……」

「はい……はい……！ブライアン、私もあなたからたくさん幸せをもらいました。

後のことは私たちに任せ……あなたは少しお休みください……！！」

『ぼくがついているから大丈夫だ。幸せになろう』

『ぼくはただきみが幸せならいい』

ローラの言葉に無言で小さくうなずくと、ブライアンは長い旅へ出かけた。

戦士であり王であり、勇者でもあった彼だが、最後はとても安らかな顔だった。

ブライアンの読み通り、彼が息を引き取ってすぐに精霊ルビスはローラに

幻を見せ、ブライアンがどうやって命を絶たれたかを教えた。ローラは

一晩考え、彼は突然の病に急死したということにした。真実をすべて

明らかにすればせつかくローレシアの領土で続いている魔物との平和な

関係が崩れ去るだろう。自身の子どもたちにも、彼らが成長するまで

事実を伏し、その後も決して他人には言わないように念を押しした。

ブライアンの死で国はどうなるのかという懸念もあったが、彼が短い統治の期間に

しつかりとした基盤を築いていたかもあり、ブリザードたちや信頼できる側近が

ローラ、そして二代目国王ローレルを支え、ローレシアは栄え続けた。

また残る二人の子に関しては、次男トツプガンにもブライアンの願い通り

彼の支配する地が与えられ、その地は原住民たちから『サマルトリア』と

呼ばれていた。最後の子は女兒であったが、十七歳になるとローレシアを離れ

『ムーンプルク』という国の王子と婚約し、後に王妃となった。

ブリザードと彼の妻となったローマン、彼の昔からの仲間たちもまた

ローレル王の支配が軌道に乗り安定するのを見届けてから旅立ち、

彼らも

離れた地に国家を築いた。厳密には悪政を敷いていた独裁者の一族を追放し

彼らが新たな政治を始めたのだが、ブリザードはすぐにブライアンの三人の

子どものそれぞれの国と同盟を結び、協力関係を確かなものとした。

ブリザードはその死ぬ日まで、すでに亡き親友との絆を守った。

栄えていくローレシアなどとは異なりラダトームを含むアレフガルドは

精霊ルビスの加護を失ったせいも、衰退の一途を辿っていった。しかしそれは

人間の住む土地の話であり、魔物や野生動物が住む世界としては変わらぬ

美しい自然がそれらの生物の繁栄を助けていた。

ブライアンが竜王を倒してから百年間、世界は平穏に時を刻み続けた。

ブライアンがこの世を去ってから二十年後、ローラはまだ五十歳を前にして

突然の病に襲われた。ローラ自身もわかっていた。再び回復することは

ないだろうと。僅か一週間という短い時間で体調は更に悪化し、闘病や痛みに

苦しむことなく生を終えられそうなのはある意味で幸福だったのかも知れない。

「・・・母上!」 「ローラ様!」

自らを呼ぶ声が次第に遠くなっていく。これが死ぬということなのか。

恐怖はなかったが、その瞬間はどのようなものなのか気になった。

（・・・さようなら、私の愛する子たち・・・さて、私はどこへ行くのでしょうか。）

そもそも死の先には何があるのでしょうか。何もないのかもしれないが・・・）

ローラは意識を手放す寸前、突然自らが『取り去られる』感覚がした。

かつて彼女は若い日に魔物によって攫われた経験を持つが、それと似ていた。

しかし今回は決定的なものが違う。闇ではなく、光のなかへと導かれていった。

「・・・これは・・・いったい・・・」

すると彼女の目の前に、その空間からすれば考えられない光景が展開した。

なんと船が現れた。光のなかへと進んでいく、力強く羽ばたく船が。

ローラの前でぴたりと止まった。乗船しろということなのか。どうしようかと

迷う彼女だったが、その船から船長が顔を出し、彼女に向かって手招きしてきた。

「きみを迎えに来たよ。いい船だろう。あれからすっかり整備していたんだ。

どうする、いっしょに乗るかい？」

「・・・あなたらしい・・・。私はあなたの行くところならどこまでも

ついていきます。さあ、参りましょうか」

ローラは手を伸ばし、船長は彼女を丁寧に自らの船に乗せた。

そして二人の乗せた船は再び動き始め、出航した。もう二人を引き離す

ものはなにもない。二人の愛は何かあっても変わらない、いつまでも。

ブライアンの歩みは、誰によるものかはわからないが伝記が残された後の世代にも

伝えられていた。その記録者は彼の仲間ではなかったのか、全てのことか

事細かに収められているわけではない。ブライアンが初めに王から命じられて

旅立った日からラダトームを出たときまでのことが収められている。

それはたとえ一見平和な世に生きていても、やがて勇者となる者たちにとって

戦いに備えさせるものとなり、冒険への熱を高めた。ブライアンの生涯は

確かにその時代だけではなく、未来の数多の人々の救いとなった。

「・・・よし、そろそろ行くか。これ以上こんな寒いところにいたらあいつらを倒す前に凍え死んじまう。乗り込もうぜ」

「そうね。わたしはもう休憩はじゆうぶん。あの憎い・・・今すぐにも

この手で殺して仇を討ってやりたい外道の神殿が目の前にあるのだもの」

竜王を倒したときのブライアンと同じか少し幼いくらいか……。青いメットを被った、少年から青年になりたての若者がゴーグルを投げ捨てる、勇ましく敵の親玉の待ち受ける敵のもとへ歩き始めた。

その後を追う少女は、可愛らしくも美しいその可憐な姿に似合わず目つきは鋭く、復讐心による怒りと憎しみに満ちていた。

「……………」

彼らはどうやら三人でこの時代に現れた巨悪との決戦に挑むようだ。

一番後ろにいた最後の一人は前の二人がそのままにいった焚き火をていねいに

消していくと、持っていた厚い本を自らの袋に入れた。先ほどまで彼らが三人で

読んでいた偉大な先祖の記録を、若大将と呼ばれた男の活躍を。

「…………ぼくたちは誰もがドリーマー……夢は想えば叶うんだ」

その本に書かれていないはずのブライアンの言葉を、彼はぽつりと呟いた。